

波濤の記憶 ～月に叢雲、花に風～

COOH

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

深海棲艦が現れて1年ほどたった世界。

最初期からの艦娘、叢雲は鎮守府から離島の泊地への転属を命じられる。新しい生活、任務へ期待も不安もある叢雲だったが、着任した泊地は名ばかりの、提督1人だけの民家だった。

想像したことのない生活に戸惑い、反発する叢雲だったが、次第に打ち解け成長していく。

叢雲1人称視点。

叢雲が槍を持つようになるまでを勝手に補完した話です。

前作「艦これ回想録」の過去話であり、世界観や一部シーンは前作を踏まえたものになっていますが、本作のみでも楽しめるように配慮はしています。

本作を読んで興味を持った方は前作も読んでいただけると嬉しいです。

毎週土曜か日曜日に投稿予定です。

目次

第1章	第1話	ゼロの調律	1
第1章	第2話	箱庭	6
第1章	第3話	Clock Work	11
第1章	第4話	サンドリヨンの番犬	13
第1章	第5話	Treasure	16
第1章	第6話	Deep Blue	22
第1章	第7話	花冠	27
第1章	第8話	パブロフ	30
第1章	第9話	龍	32
第1章	第10話	菩提樹	35
第2章	第1話	鳥籠	39
第2章	第2話	埋火	44
第2章	第3話	TRIGGER EFFECT	50
第2章	第4話	アイデア	56
第2章	第5話	光る魚	62
第2章	第6話	泣いてる獣	67
第2章	第7話	ライオン	69
閑話①			77
第2章	第8話	呼吸	81
第2章	第9話	Howling	86
第2章	第10話	Reckless fire	90
第3章	第1話	ソラゴト	97
第3章	第2話	Jam Tomorrow	103
第3章	第3話	ウララカ	107

第3章	第4話	グッバイメランコリー	112
第3章	第5話	balloon	114
第3章	第6話	ナイトエスケープ	119
第3章	第7話	BITTER SWEET GIRL	125
第3章	第8話	砂糖水	130
閑話②			137
第3章	第9話	フォレストネスト	139
第3章	第10話	轍	146
第3章	第11話	海天使	150
第3章	第12話	夢追い猫	156
第3章	第13話	Mela!	161
第4章	第1話	月	164
第4章	第2話	風船	171
第4章	第3話	風に押されて	174
第4章	第4話	劣等星	178
閑話③			182
第4章	第5話	mirror house	187
第4章	第6話	Primal Scream	192
第4章	第7話	ソルジャーガールズ	198
第4章	第8話	ジュブナイル	204

## 第1章 第1話 ゼロの調律

艦娘、というものになってからもう1年ほどたったとき、つまり、人類が深海棲艦に海を奪われてから1年と数か月たったときの話だ。

艦娘が行き当たりばったりな運用はされなくなったものの、計画的な損失前提での出撃は続いていた。誰もが明日生きている保証なんてなかったし、私も、そしてあいつもよく生き残ったものだ。

これは私がそんな世界で、奇跡に触れる物語――

「むらぐもちゃんー!」

抱き着こうとしてきた吹雪を私は適当に突っぱねた。それでもめげる様子がないのはどうしたものか。

「だって、はなればなれになっちゃうんだよ!」

涙ながらに訴えられても、転属命令はすでに下り明日の朝にはこの鎮守府から出ていくことは決まっている。

「別に大して仲良くもなかったじゃない」

「そんなー!」

吹雪はこの世の終わりみたいな顔で一層大粒の涙を流す。さすがに言い過ぎたか…

「もー、吹雪ちゃんをいじめちゃダメなんだよ」

見かねた他の艦娘が吹雪を抱きしめて抗議をしてきた。そう、この場には私と吹雪だけじゃない。一室に収まるささやかなものながら、今は私の送別会だ。

転属する艦娘の歓送迎会など公式にはなく、身内に行くために人望もろもろが露骨に出るが私のために開かれたのはよく言ってもささやかでしかない。それでも、友人といえる艦娘の少ない中では上等なほうだろう。聞けば吹雪が発案だとか。

「吹雪ちゃんからご利益もらわないと。ほら」

押し付けられる吹雪を再び雑に突き放す。

吹雪はこの鎮守府ではマスコットのようなものだ。損耗率の高い作戦で何度も帰還した、幸運のお守り。練度が低い、というよりはっ

きり言えばそもそもそのセンスがない吹雪は本人の人懐っこさもあり、オカルトにすぎるしかないことが多い艦娘の中で変わった立場を確立していた。私からすれば、ばからしいことこの上ないが。

「明日早いし、もう寝るわね」

主賓が立ち上がるが継り付いてまで止めるのは吹雪だけだ。私がいなくてもこの部屋で談笑もばか騒ぎも続く。昨日も今夜も、そしてこれからも。

皆が寝静まった部屋で音をたてないように気を付かながら荷物をまとめる。もともと少ない私物はすでにほとんど運び出されている。

転属は陸路で行うのが普通だが、私の場合は場所が場所だけに海を自力で渡っていく。荷物は後から送られるらしいが、もしかして私が輸送護衛するのだろうか。使うものにこだわりなどないから配属先で調達できるならそれでいいのだが。

窓から月明りに照らされた景色を見ても、特にこみ上げてくるものはなかった。艦娘になってから1年過ぎしても何の感慨も得られない、それが私のここでの生活だった。

提督と形式ばかりの挨拶が終わった。特に思うところはないようだったが、誰かが沈んでいく日々だ。船の一隻が手元から離れたぐらいで感傷に浸るなら提督などやっていけないのだろう。

本当に最低限が入ったバッグを背負い海に出る。さすがに誰もいない時間だが朝の静けさを好ましい…と思っていたのだが、無粋な砲撃音が聞こえてきた。訓練場からだ、この時間の訓練は行われてなく、記憶を裏付けるように砲撃音は1つだ。

「…なにやってるのよ」

針路上にあるから隣を通っただけだが、思わず声をかけてしまった。膝に手を付きうつむいていた顔を上げて、汗にまみれながらいつもの笑顔を向けてきた。

「叢雲ちゃん。ちよつとね…」

吹雪は体を起こしてこちらに向かってくる。

「ちよつとつて、あんた今日出撃あるんでしよう?」

そんなこと、私はなぜ知ってるんだろう。よぎった疑問も吹雪本人に問われることがなかったので隅に追いやる。

「ほら、私へたくそだから…頑張らないと」

普段が何も無い訓練海域に規則正しく配置された的は、それだけで昨日今日の思いつきで訓練しているわけでないのが分かる。出撃の有無など関係なく、これが吹雪の習慣なのだ。

「でも、なかなかうまくならなくて…」

砲弾の跡がほとんど見られない的を見回してへらへら笑う吹雪を私は冷淡に見てしまう。射撃の精度以前に、そもそも航行すら不安定だ。いつから続けていたのかは知らないが、努力は報われないものだと思います。結局吹雪の役割は幸運のマスケットでしかなく、それも私から言わせれば——

「叢雲ちゃん…」

吹雪のいつもの顔がゆがみ、代わりに表れたのが何かを理解する前に吹雪が抱きついてきた。身長がわずかに高いだけの私では叶わなかったが、顔を見られたくなかったのだろうか。吹雪の揺れ幅についていけず突っぱねるタイミングを逃す。

「みんな…いなくなっちゃって…!——さんも…——ちゃんも…!」

せつかく隠そうとした顔以上に、ときれときれの声が如実に伝え、ようやく私は悟るのだ。

吹雪が泣いていることを。

羅列される名前は聞き取れなかった。当然だ。私はその名前を忘れていたのだから。あの提督と一緒に、いちいち感傷に浸っていたら艦娘なんてやってられない。

「運がなかっただけよ。あんたと違って」

どこまで本心か分からないまま出てしまった言葉を吹雪は必死に首を振って否定した。

「違うよーだって、私が役立たずだったから…!私の…せいで…」

何も考えられずに押し黙る。いや、言葉を返す資格などなかった。

——どうして気づかなかったのだろう。

吹雪が背負うものを、その重みを。吹雪が分かっているかないと、私だけが分かっていると決めつけていた。そんなことあるはずもないのに。

幸運なんてものはない。まともな航行すらできない吹雪が生き残り続けたのは、代わりの誰か、守ってくれた誰かがいたから。生きてほしいと願った1人から繋がった意思の集積が、幸運の偶像だ。

だから、吹雪が見てきた海は仲間が沈んでいく戦場ではない。自分のせいで仲間が沈む辺獄だった。

それでも笑っているのが、どうしようもない苦痛に気づかないふりして笑いかけるのが吹雪の強さなのだ。ようやく理解してそれでも

「わたし…いなくなったほうが、いいのかなあ…」

涙が止まった代わりに決壊した小さなちいさな声に、気が付いたら吹雪を突き放してしまっていた。うつむいた下でどんな顔をしているのか、怖くて見れない。

「知らないわよ」

言葉を探すことすらできなかったからこそ、それがまぎれもない本音だ。力がなくては、あったところで一瞬の油断で死ぬ世界で吹雪が生き残れているのは多くの者が望めなかった幸運だ。それが嫌だというなら――

「強くなりなさい。私が言えるのはそれだけよ」

鎮守府の港が見えなくなった沖で立ち止まり、それでも振り向けなかった。

悲痛も苦しみも無視して、先を信じてただ愚直に進み続けることが吹雪の強さなら、私が見たのはこぼれた弱さだった。それを吹雪が見せてくれたのは仲が良いとか信頼とかじゃなく、ただ私が遠くへ転属になるからだ。相手の悲しみも、自分の苦しみさえも気づいていないふりをする吹雪にとって、もう会うことのないかもしれない私は唯一押し込めた感情をぶつけられる相手だった。

なのに、そこまで分かっているながら私は優しい言葉の一つもかけられない。

「だから私は――」

吹雪に感化されたかのようにつぶやきかけた言葉を心の中にすら  
出さずに押し込める。最悪の気分で、もう二度とは見れないかもしれ  
ない慣れ親しんだ海を去る。

## 第1章 第2話 箱庭

「ここが、ねえ…」

最悪の気分をひきずったままの航海は終着点で困惑に変わった。海図を渡された時点で離島であることは分かっていたし、提督も何もない島と言っていた。一応私も女の子だからそう言われて楽しい気分になるはずがなかったが、人類が抑えている海域の最前線であるのだから前線基地として要塞化された島だと勝手に思っていた。だれもそんなこと言っていないのだから、本当に勝手に。とはいっても：「どこから上陸すればいいのよ…」

軍港すらないのはどういったわけか。鎮守府では出撃と同時に自動的に艦装が取り付けられ、帰還時にパージされる。ただの漁港で上陸するときはどうすればいいか、私は知らない。さすがに疑わしくなり島の名前でも尋ねようとしたが誰もいない。…ただの、ではなくさびれた漁港だった。

「で、これなのね」

困惑はいつの間にか諦観に変わっていた。

仕方なく近くの砂浜から上陸し、陸では効力を発揮してくれず重くのしかかる艦装を身に着けたまま、ようやく最終目的地に着いた。これまた勝手に思い描いていた司令部とは違ったが、もうここが目的の島だと疑えなかった。渡されていた島内の地図と実際の景色が同じだったから。防衛上の観点から伏せられているだけと思っていた空白も本当に空白だった。

だからといって、たどり着く先がただの民家だと予想するのはさすがに無理だ。教えられた提督の名前をはじめに見るのが表札だとは…

「あのー…」

立派だが古ぼけた構えの玄関のチャイムを押すも音が鳴らない。諦めて引き戸を引くと普通に開いた。無防備にもほどがある。まあ泥棒もここまでこないだろうけど。

土間と廊下の段差の大きく、大樹を輪切りにしたつい立てが無意味に置いてある。絵にかいたような、といっても本当に映画でしかみることがない古民家の玄関を眺めていると、お婆さんがゆっくりと現れた。

「本日付で——」

着任の定型句を言いかけて止める。どうみても軍とは関係のなさそうな老婆は案の定不思議そうな顔をしている。だから

「あの、有賀さんのお宅でしょうか……？」

「はい、そうですよ」

そりやさんごん確かめたからそうでしょうよ。聞いたのは私だけだ。

別の定型文を使ってしまったが、とにかく目的の場所であることは再度確かめられた。

うん、ひとつ前進。

「ここに配属になった叢雲、あ、艦娘なんですが」

私自身違和感があるほど場所とマッチしない発言だが、お婆さんは合点いったのか表情が明るくなった。

「ああ、艦娘さん。どうぞ上がってください」

あ、いけるのね。

普通に勧められるままに土間から上がる。足回りをパージするついでに背負った艤装も土間に置く。さすがに放置は心配になり玄関の鍵をかけようとするが、かけ方が分からない。道中誰も見なかったので大丈夫なんだろう。艤装を盗む意味もないし。

「あんた、艦娘さんがきてくれたよ」

広い家の廊下沿いをきびきび歩きながら誰かを呼ぶ。少なくとも艦娘の存在は受け入れられているようだが。

「もうか。明日だと思っていたんだがなあ」

広い家の更に広い庭で座り込んでいた白髪の、おそらくこの家の主人が頭を掻きながら立ち上がる。おそらく夫婦だろうから同じような年齢だろうが、目の前の老婆と比べれば若く見える。若いというより威圧感があるというべきか。鍛えられていることが見て取れる筋

骨に白髪、それに合わせるように伸ばした髭。それだけで十分だろうに、右目に眼帯だ。時代錯誤にもほどがある。

ともかく姿勢を正してしまったので流れて敬礼をする。

「本日付けで着任しました、駆逐艦叢雲です」

「有賀だ。よろしく頼む」

私は慣れてないのがすぐばれる敬礼しかできなかったが、返された敬礼はほれぼれしてしまうほど堂に入っていた。が、背後の家庭菜園で伸びる夏野菜が台無しにし、

「まあのおんびりしていつてくれ」

「あら、叢雲ちゃんっていろいろの」

夫婦そろって親戚にかけるような言葉で無に帰した。なんなのその適当さは？

私のリアクションを見て合点がいったのか、有賀は縁側に上がって障子を開けた。広い部屋のど真ん中の大きな机に向かい合って座る。出された麦茶でもう消え去った軍隊感が徹底的に潰される。

「来てもらってなんだが、なにもしてもらうことがなくてな」

口に含んでいた麦茶が一気に嚙下されて呼吸ができなくなった。髭をさすりながら申し訳なさそうに言われても。

「どういことよー」

せき込みそうになるのを必死にこらえながら問いたです。水滴で濡れるガラスコップを落としそうになって慌てて掴みなおす。

「どうもなにも、ここが泊地になったのも今からだしな。俺もこれで提督になったから、いずれ何かしらの通達は来るだろう」

なんてことだ。そう、私はここまで来てもまだ前線基地なんて妄想を捨てきれなかった。正式にはどうなのか知らないが、港と艦娘と提督がいれば泊地や鎮守府だ。それすら満たされていなかったということは――

「私一人なの…？」

聞いてなかったのか、と言いたげに片眉を上げられてもこくこくとうなずくしかない。

あの提督、感傷がどうかのレベルじゃなくいい加減だった。

「あんたそれでいいの？」

あからさまな閑職だ。私だつて別に艦娘であることに誇りを持っているわけじゃない。だが今まで生き残り任務を果たしてきた自負はある。軍が取り繕うまでもなくどうでもいいと思っている離島に独りで飛ばされるなんて屈辱だ。だが目の前の老人は情けなく頭を掻くだけだ。

「俺はもう引退した身だからな。この島に戻ってきて隠居してたら提督になれと言われただけなんだが」

なんなの、これ。家に馴染む老人を見てやつと気づく。提督としてこの島に来たわけではなく、この島に都合よくいたから提督となったのだ。本土防衛に返り咲く気概どころか飛ばされたという意識もない。まあ、実際に飛ばされたわけじゃないから当然なんだけど…

「じゃあ私はなにすればいいのよ」  
「ひとまず近海の哨戒ぐらいだろう。単艦で戦闘することはないからな」

そりやあそうなるわね。…なにもしないのと同義だけれど。

あきれていたこの時の私は、有賀という老人が海軍でどの立場にいたのか尋ねようとしなかった。そもそも軍人だったことも忘れていたから、艦娘の当たり前前を当然のものとして言い切ることに違和感を覚えなかった。

この家基準で小さめ、つまりずっと相部屋生活だった私にとっては広大といえる部屋を私室としてもらった。自由に使つていいといわれても、バック１つで来た身としては着替えを隅に置かれていたタンズに入れてカスタマイズはおしまいだ。

やることもなく座り込んでいると夕飯に呼ばれた。こんなものしかないけど、と言われたが刺身を見たのはいつぶりだろうか。

海上輸送すら手が足りていない現状で漁などできるわけはなく、食糧が優先される艦娘でさえ新鮮な魚介は貴重品だ。奇特な艦娘たちがサンマ漁を大々的にする計画を立てているらしいが…

老夫婦の話に適当に相槌を打ち、久しぶりに1人でお風呂に入る

と、いつの間にか寝る時間になっていた。訓練や任務を除いて規則正しい生活をしている艦娘にとっても田舎の夜は早い。

「おい、布団が足りないぞ」

有賀が押し入れを開けて尋ねても当然のように返される。

「あなたが叢雲ちゃんは明日来るって言ってたから洗いに出しちゃいましたよ」

そういつて二人分の布団を敷いて枕をぼんぼんと叩く。なるほど、この島にクリーニング屋はあるのね。

まだ現実を受け入れられていない私は、明日船から降ろされる布団を見ることを知らなかった。

「叢雲ちゃんはごっちにどうぞ」

もう一方に入る気まんまんの妻をみて有賀は仕方なさそうに畳に寝ころぶ。初対面の夜にこれはさすがに気が引ける。

「いいのよ。あの人、体だけは丈夫だから」

そう言われてもまだ夜は冷え込む季節だ。よっぽど気まずそうな顔をしていたのか、布団の半分を開けてくれた。

「じゃあ叢雲ちゃんは私と寝ようね」

言われるがままに布団に入ると、電気が消された。

なにもかもが変わってしまった1日に混乱しながらも、1つだけはつきりしていた。

私はこれを受け入れられないことだけは。

# 第1章 第3話 Clock Work

何も無い海の上でただただ時間を潰す。太陽の光を受けて光る水面も見慣れてしまえば日差しの暑さにうんざりするだけだ。海なんて広いだけで変化の乏しいものの代表だろう。独りで海に出て改めてそう思った。

一人だけしかない鎮守府で与えられる任務など、当然偵察だけだ。駆逐艦一隻の索敵能力など知れているし、そもそも人類の勢力圏ぎりぎりですべて常時哨戒や衛星による監視が行われている。連絡がこないならこんなところで偵察するまでもなく深海棲艦は来ていない。

平和と言えば聞こえはいいが、結局は無駄な行動だ。無駄と分かっているのに律儀に従うのは艦娘としての義務感ではなく、退屈でも時間を潰せる場所を求めてだ。とりとめのない思考を巡らせるうちに時は過ぎるが振り返ればなにも思い出せない、そんな無意味な1日を過ごしていると燃料が尽きる。観念してついた溜息が今日海に出て私が発した最大の音だ。

港に戻って艀装を取り外す。来た時に見た古びた小屋が泊地の機能全てだったこと以上に、艀装を自分で取り外しできることが驚きだ。鎮守府にいたときは、艀装は飛んできて飛んでいくものだと思っていたけれど。そんな粗末な設備でも艀装を預けておけば補給も、使ったことはないが修理もしてくれるらしい。電気があることにすら驚けるこの離島で、だ。初めて補給された艀装を見たときには艦娘の技術には妖精がかかわっているなんて与太話を信じそうになったものだ。

まだ時間があるのを確認して寄り道を決める。かつては整備されていたであろう遊歩道を辿りこの島唯一の山を登った。崩れた道の分岐、もはやけもの道でしかないわき道を進むと開けた野原に出る。遮られていた夕日が再び肌を焼く。顔をしかめながらもすぐに明るさに慣れた瞳が赤く焼かれた風景を見下ろす。高い視点から先ほどまでいた海が一望できた。島の半分を景色に含んだところで、夕日に

照らされたところで、海は海だ。変わりばえのない景色で、それでも私はなぜかここに立っていた。

艦娘として燃料切れがあるように私は人間としての空腹がある。暗い遊歩道を歩く自信がない私は山の早い夜から逃げ降りる。

「遅かったな」

玄関を開けると有賀が顔を上げた。

「ただいま」

私はそれだけ言うところに目も合わせず靴を脱いで部屋に向かう。有賀はクーラーボックスから魚を取り出していたところだった。しばらく過ごして分かったが、この家を出てくる主菜の魚は釣りで調達したものだ。今や貴重な水産資源もこの島では個人の分なら自由に取れるらしい。

再び無為な時間をしばらく過ごす夕食に呼ばれる。のそのそと歩いていくと仏壇にご飯を供える背中が見えた。ここでしばらく過ごしてもう1つ分かったこと、いつも手を合わせている相手は並んだ遺影の端、新しい写真の若い男女と少女なのだろう。

その様子を目の端で捉えながら食卓に向かうと、有賀が食器を机に置いた。彼がする料理は刺身だけなので、久しぶりに煮つけでないことを知る。生返事をしながら味の薄い夕飯を食べ、あとは風呂に入っ  
て寝るだけだ。

こんなのが私の1日であり、繰り返されるすべてだった。

## 第1章 第4話 サンドリヨンの番犬

数日経つと哨戒すらなくなった。燃料が尽きてきたからだだが、それは単純に補給が遅れているからだというのがあきれる。このご時世だから補給が滞るのは仕方ないが、だったらそもそもなんでここは泊地なのか。

あきれているうちはまだいい。この広いだけで私の居場所はない建物で一日を過ごすのが初めてで、想像以上に苦痛だった。なぜ苦痛かは分かっていたからなおさら。

いつものようにいつの間にか夕方になっていた。湿った風が肌にまとわりつき、ちようど夕日を隠すように厚い雲が張り出していた。「叢雲ちゃん、ちよつと手伝ってくれる?」

腕に抱え込んだ枝豆の株を置きながら声をかけられる。いつものように応えない私に微笑んで有賀に声をかける。

「あなたも手伝ってください。どうせ食べるのはほとんどあなたなんですから」

言われて有賀は新聞を置いて立ち上がる。すれ違いざま、私に声をかける。咎めるわけでなく。

「今日はトウモロコシもらったからな。叢雲、好きだっただろう」「いいかげんにして!」

気づいたら叫んでいた。私の声が頭の中で反響して消えていってようやく感情が追いつく。きっかけなんてものはない。ただ、積もつてドロドロに濁った叫びがようやくあふれ出しただけだ。私がどんな態度でも許して、なにも言っていないのに好きなものを知っている。それはまるで――

「勝手に家族のまねしないでよ!私は――」

広い部屋の隅で見慣れてしまった写真がちらつく。

「私はある私たちの子供でも孫でもないの!何も知らないくせに、私の本当の名前も知らないくせに!」

喉が裂けそうな声は反響もせずすぐに消える。感情が霧散した沈黙の中でようやく意識が顔を出す。うつむいているのはただ顔を上

げるのが怖いだけだ。そうしているのも限界が来たなら、もう逃げ出すしかなかった。

あてもなく走ったつもりでも気づけば見慣れた景色があった。眼下に広がる海も暗くよどんでいるくらいで変わりばえしない。立っている気もしなくて膝を抱えてしやがみ込む。

私は変わらない。昔から何も言わないで、愛想のいい言葉も選べない。上手く立ち回れないから

「だから私は——」

家族に見捨てられたんだ。

閉じ込めていたはずの気持ちが開かれると、目頭が熱くなった。それでも涙は出ない。

艦娘の適正があると、多額の補償金と引き換えに帝国海軍に身柄を引き取られる。でも決定権は親にあるし、断ることもできたはずだ。急激に悪化した経済の中でそんなことできるのは限られた家だと分かっていても、家族が守ってくれなかったのには変わりない。

もつと愛されていれば——

後悔する私とそれでも変われない私。

手にすることができなかつた家族を求めていたのは私の方なのに拒絶するのは、そうすれば決して幸せといえなかつたかつてに戻れると思っっているからなのだろうか。

どうせもう私の望み通りになる。なのにどこからか冷たい風が吹き体をちぢこめる。

「叢雲ちゃん……」

遠慮がちな声が聞こえてきた。思ってもなかつた声に体が動かなくなる。当然返す言葉があるわけもない。

「ごめんね。叢雲ちゃんが来てくれて嬉しかったから……」

どうして私は謝られているんだろう。混乱した感情の中に声が入ってくる。私を苛まない声が。

「仲良くなりたいと思っただけど、困るよね。名前も呼んであげられないのに——」

「違う…」

他のことは分からない。でも、それだけは絶対に誰も悪くない。

艦娘になった時点で名前も身分も上書きされる。国防の、個人の安全のために過去の名前を名乗ることも探ることも許されない。それを知っているのに私は――

「違うの」

ようやく私のやったことが分かった。愛想を振る舞えなかったことじゃない。

私はこの人を傷付けたんだ。

捨てられたくないくせに、嫌われたくないくせに、愛されたいくせに。

いまさら涙があふれてきた。濡れていく膝が、傷つけるくせに傷つけられる恐怖に震える。

「私が勝手だから、私がダメだから、私が――」

髪が触れる感触にびくつき、痙攣のように息をのむ。すぐそばで声がした。

「大丈夫だから。叢雲ちゃんはいいい子だよ」

こんな私でも、ここにいていいのだろうか。

問いかける前に、ゆっくりと頭を撫でるぬくもりに肯定される。何のためか分からないまま流れる涙が尽きるまでただうずくまっていた。

## 第1章 第5話 Treasure

「叢雲ちゃん、もう帰ろう」

私は素直に頷き立ち上がる。いつかぶりに顔が合う。さつきまで黙っていたくせに急に沈黙が恥ずかしくなる。

「ねえ、どうしてここが分かったの？」

探しに来てくれたにしてもすぐにここへ向かったくらい、すぐに来てくれた。不思議そうな私を見て、彼女はおそらく今までも向けてくれていたであろう微笑みを見せる。

「私も昔はよくここに来たからねえ。あの人と喧嘩して独りになりたかったときにこの景色を見てたの」

「けんか？」

全く想像できない単語が出てきてつい聞き返す。

「だって、軍人のエリートと結婚したんだもの、都会できらびやかな生活が待っているとと思うじゃない。なのにあの人、生まれたこの島がいつて譲らないものだから、仕方なく。でも仕事で帰ってこない日も多かったから不満もいろいろとねえ」

でも、笑いながら付いた溜息はかつての自分に向けてのように見える。何も知らずにあこがれていた過去に向けて。

「まあ、私も社交界なんてがらじゃなかったみたいだけどね」

「迎えにきてくれたの？」

今の私のように、と続けようとしたがその前に首を振って否定された。

「ぜんぜん。あの人、ここを知らないんじゃないかと思うの。あんなにこの島がいいって言ってたのに」

当時を知らない私もその様子を勝手に想像して、女同士でしかかわせない笑みをかわす。

急によぎった想いについ視線を下げる。顔が熱くなるのを感じながらも勇気を振り絞る。今を逃すともっと勇気がいるのは分かっているから。

「ねえ、おばあちゃんって呼んでいい？」

「どうぞ、叢雲ちゃん」

答えは分かっていたはずなのに安堵し、つい口元が緩んだのは多分名前を呼んでくれたからだ。

すっかり暗くなってしまうた登山道を、手を握り合って下りる。

叢雲

かつての私とも、艦娘としての名前とも違う私の名前。ようやく始まる、この何もない島で過ごす新しい私だけの名前だ。

家に着くと誰もいなかった。おばあちゃんは何を気にした様子もなく夕食の準備をする。何をしたらいいかも分からないし、そもそも何も手伝えない私はお箸を並べていると雨が降ってきた。にわか雨だろうが、屋根を叩く音がするほどに激しくなる。

できることがなく座っていると、玄関が空く音がした。小走りで向かうと有賀が玄関を濡らしていた。私から出ていったくせに目が合うと動けなくなつて、必死に目をそらして言葉を探す。

「もうご飯ですよ。こんなに濡れて、まずはお風呂にしますか？」

後からきたおばあちゃんがいつものように振る舞うが、有賀は私をみて姿勢を正す。上体が傾きかける前に、有賀が何をしようとしているのか分かってしまう。

ずぶぬれになった原因は私なのに。

「ごめんさいー！」

有賀にさせないために先んじて頭を下げる。謝罪なんて言わせない。もうボロボロになつてしまったけれど、それが私に残されたプライドだ。でも言うべきことも言いたいこともごちやませになつて言葉が止まる。固まる私の頭を大きい、少し冷たいぬくもりが包む。

「無事ならそれでいい」

それだけ言つて有賀は廊下にかかる。ゆっくり滲む涙を拭いて有賀を追い越す。ようやくできることを見つけた。

「おばあちゃん、私がお風呂沸かすから」

誰でもできることを誇らしげに言う、そんな情けない私を私は少しだけ好きになる。

「ん？」

「な、なによ」

有賀の反応を見てさっそく恥ずかしくなってしまう。

「あの人も呼んでほしいのよ」

笑うおばあちゃんを見て察するが、まだそこまで素直にはなれない。

「気が向いたらねー」

私にしては前向きな約束をして逃げるようにお風呂に走った。

人の動く気配で目が覚める。最近では習慣化してしまつて、薄く目を開けるだけで朝が来たことを知る。

「叢雲ちゃん、起きる？」

問いかけに小さく首を振つて体を丸める。次に起こしに来るまで寝ようか悩んだが、薄い意識を少し味わつてから体を上げた。

顔を洗つてから居間に行くとおじいちゃんは朝からパソコンを開いていた。流暢にキーボードをたたいて入力している姿はなんとも違和感があるが、そもそもこの島でネットが使えることのほうがしつくりこない。

「なにしてるのよ？」

私は隣に座つて画面をのぞき込む。よくわからない言葉が連なつていて、資料もその数字が多いのか少ないのか分からない。

「定期連絡と指令の返答だ」

「指令つて、なにかするの？」

その場合、必然的に私に回ってくる。久しぶりに作戦を意識して身構える。それも一瞬だったが。

「燃料供給のめどがつかないから出撃を控えるように、だ」

「なによそれ…」

いつものことだがあきれれる。本土から突出した場所だから補給も苦勞するのは分かるし、そこまでして守るような要所でないのも分かる。だったらなんで機能させる気のない泊地なんて作ったのだろう。

なんとなく画面に目を滑らせていると差出人に見覚えのある名前

が見えた。顔も知らないが名前は聞いたことがあった。

「これ、海軍の元帥からじゃない」

「ん？知ってるのか？」

「当たり前じゃない。軍のトップを知らないなんて——」

…わりとありえそうね

ぱつと浮かんだ顔の主はそんなこと気にしたこともなさそうだ。

「あいつとは同期だからな」

直接連絡が来るどころかあいつ呼ばわりだ。軍の同期とやらがどんなものか知らないが、口調からして親しそうな感じがした。おじいちゃんもけつこう偉かったのだろうか。

「もしかして天下り？」

なんとなく口に出してしまっただが、言葉にするとこの泊地の説明として一番納得できる気がする。

「どこでそんな言葉を…俺は引退したつもりだったんだがな」

否定しているようなしていないような、歯切れの悪い返事だ。おじいちゃんもよくわかっていないのだろうか。

「あいつ直々の指名だが、そういったことはしない奴だ。昔から何を考えてるか分からんから何とも言えんが」

私にはなおさらよく分からないが、そういうならそうなのだろう。

別に私が気にすることでもないし。

「あ、おばあちゃん。今日私の出撃なくなったから」

朝ごはんができた台所に向かう。

今日は何をしようか——

出撃がなくなっても私は潮風を浴びていた。いつもと違って揺れない足元から眺める海は少しだけ新鮮だ。だけど私は不機嫌だった。

「ぜんっぜん釣れないじゃない！」

しびれ切らして釣り竿を上げるが当然だけど魚はいない。ふてくされる私を見ておじいちゃんは笑う。足元のバケツから魚の立てる水音が聞こえてくるのが腹立たしい。

「じつと待ってるのは趣味じゃないのよ」

ついてきたのは私なのについて文句を言ってしまおう。魚との我慢比べができる人が釣りの上手い人なら私は不向きに決まってる。そうふてくされるとさらに笑われる。

「待つだけでなく仕掛けや釣り場を変えるのも釣りの楽しみ方だ」

「…そう」

生返事で糸を再び垂らす。おじいちゃんは意外そうだ。

「やらないのか?」

「へんな虫に触りたくないの!」

餌をつけることができない私の釣り人への道のりは長そうだ。

「ただいま!」

つい勢いよく玄関を開けてしまった。重いクーラーボックスをもって台所に向かう。見慣れた背中に駆け寄る。

「これ私が釣ったの!」

片手で掲げられるくらいだが、おばあちゃんは褒めてくれる。

「ねえ、魚ってどうやってさばくの?」

包丁さばきのつたない私はそれ以前に学ばないといけないことが多いのだが。

案の定、無残に切り裂かれた魚が食卓に並ぶ。

「なによう?」

不思議そうに眺めるおじいちゃんをにらむと黙って座った。合わせて座るとおつまみが目についた。いつかの枝豆。そんなきつかけで思い出す。

もう思い出になりかけている過去といつの間にか馴染んでしまった私。気づけば二人を家族のように呼んでいた。それでもしよっぱい記憶はこうして些細なきっかけでよみがえり、忘れることはないのだろう。

なんとなくなためらわれたが枝豆に罪はない。つまんで口に運ぶ。

「魚を扱えるようになったとかないといけないでしょ。これからはおばあちゃんだけじゃ大変なくらい釣ってくるようになるんだから」

しっかり噛んで飲み込みながら、また1つ前向きな約束を重ねる。

## 第1章 第6話 Deep Blue

廊下のつきあたり、扉を引くと板張りの間がのぞく。外から見てここに建物があることは分かっていたが大きい物置程度に考えて気にしていなかった。覗いてみたのは単なる好奇心でしかなかったが、予想と違って何もな板張りの空間が広がっているだけだった。なぜかおそろおそろのぞき込む。高いところにある窓と神棚、ただっぴろい間、私はこういったものに詳しくはないけれど、その乏しい知識からするとこれは…

「叢雲、なにしとるんだ？」

背後から声が聞こえ、私はなぜか扉を閉じて隠すようにする。が、おじいちゃんは別に見られて困るものじゃないと言って扉を開ける。

「昔は道場だったんだが。父が師範をやっていたな」

「昔？」

「一応俺が継いだことにはなっているんだが、教える生徒がいなくてはどうしようもない」

確かにこの島では剣術の流行りすたり以前に人がいない。若者と見える人を見た記憶もないし。髭をなぞりながら淡々と語るおじいちゃんはだだっ広い板張りの中央に正座をする。諦観の混じった言葉と伸びた背筋はずれて見えて、埃の落ちてない床を踏んで私は近づく。

「ねえ、私に教えてよ」

見上げられると変なことを言ってしまったのか不安になる。

「継いだってことは教えられるのよね。…そうだ、艦娘の戦闘とかで役に立つかもしれないじゃない」

「教えるのはかまわんが…」

おじいちゃんは立ち上がり床の間に飾られていた日本刀を取ると再び座りなおす。つられて私もつい正座をしてしまう。鯉口を切れ覗く刃を初めて見た私は輝きに目を奪われる。

「それ、本物？」

首肯にさらに姿勢を正す。刀身の全てが露わになり、窓から降る光

を弾く。

「刀鍛冶はもうほとんどいないが、伝承された技術にさらに研鑽を重ね現代の科学技術も取り入れ進化し続けている。斬ることに関してはほとんど極められたと言っているいいだろう」

鞘にしまわれた刀がどこかぞんざいに床に置かれる。

「だが、電子と火薬の世界では無意味だ。砲弾を交わす艦艇の中で剣が人を救うことはない」

おじいちゃんは右目、があつたはずの場所に手をかけた。もう見慣れて気にもならなくなつた眼帯が外される。ピンク色の太いすじとただれた跡はもう完治していて、だからこそ消えることはないのだろう。

「深海棲艦が現れる前、人間同士で争っていた時の話だ」

人が殺しあう、そんなことが実際にあつたなんて考えもしなかつた。でも想像できない世界の痕跡が目の前にある。

「もう語られることはないだろうがな」

眩く心情は分からない。けれども、だからこそ私は刀を掴む。初めて手にする刀は想像より少しだけ重かつた。

「で、教えてくれるのよね」

おじいちゃんは驚いたように見返してくるが、私には関係のない話だ。元より砲弾や魚雷ですら仕留めるのに苦労する深海棲艦を刀で切りつけてどうにかなるとは思ってない。ただ、知りたくなつた。無意味と断じられるまで追求した道のりを、断じてなお床を磨き続けている想いを。

「ああ」

この刀を構えられるようになるのはいつになるのか分からない。

おじいちゃんの気持ち理解できるのはまだまだ先でも、今笑ってくれるのが嬉しかった。

お墓の前で私は手を合わせてみる。合わせてみたものの、会つたことのない人へ何を思えばいいのか分からない。

「ねえ、あの写真の人って——」

「息子だ」

別に驚きはしなかったが、私から聞いたのに言葉に詰まる。親になったことすらない私はその心情が分からない。そんな私が言葉を探しきる前に、おじいちゃんは続ける。

「海難事故で、な。孫一緒にいたんだが、遺体も見つかっていない」  
「事故って、深海棲艦の？」

疑問ではなく確認のつもりだったが、静かに首が振られる。

「それより前の話だ」

「この人とは仲が悪くてね。なかなか孫も見せに来てくれなかったのよ」

まったく想像できない話に目を丸くすると、おじいちゃんはバツが悪そうにした。だからその後はおばあちゃんが引き継いだ。

「この人、仕事ばかりでほとんど家にいなかったからね。私が熱を出して寝込んだ時も帰ってこなかったら、それ以来どうもね」

おじいちゃんよりも自分を責めるような声音にまた言葉を探す。少しずつ語られる思い出に私はいなくて、聞いている私は寂しいような、そんな話を教えてもらって嬉しいような、不思議な想いに浸る。おじいちゃんたちの懐かしむように静かな、悲しさとは違う感情の名前を私は知らない。

お墓に再度、ここにいない人たちに手を合わす。深海棲艦がない世界の死も、私はまだ知らなかった。

視界ばかりが広くても、私は不機嫌に小さくなっていった。久しぶりに来た山の上から見る海は相変わらず見慣れたものだから、答えをくれるわけでもヒントが降ってくるわけでもない。目下私の悩みとは

「少しくらい手加減してくれてもいいじゃない」

剣術を習い始めたものの、まったく勝てない。言葉にしてさらに情けなくなる。いや、手加減をしてきているのは分かっている。でも防戦一方では楽しいわけがないのだから手加減ついでにちよつと攻めさせてくれても。：絶対に言わないけれど。

「帰ろう」

哨戒帰りに寄り道しても上手くなるわけじゃない。遊歩道に入るところで何かが足に当たる。空から降ってこなくても、ヒントは足元に落ちていた。

帰るとそのまま道場に向かう。

「おじいちゃん、早くするわよ!」

私が最近ふてくされていたのを知っているので不思議そうにしながら、今の私基準ではゆっくりと道場に入ってきたおじいちゃんに鼻息荒く拾ってきた木の棒を突きつける。いつも使っている木刀よりずっと長い。

「何がダメだったかって、リーチよ、リーチ! 射程距離! これだったら近寄らせもしないわ!」

思いついた私をほめてやりたくなるがそれはまず勝ってからだ。

「ほら、かかってこれるもんならかかってきなよ——」

パン! と乾いた音がして棒が手から消える。見失った棒が転がり、壁に当たって止まるのをぼけつと見ていると頭から星が弾ける。

「いたっ!」

竹刀で叩かれた頭を抱えてしゃがみ込む。はたき飛ばされた棒を握っていた手もじんじんする。

「遠い間合いで戦う発想は悪くないがな」

「だったら叩くことないじゃない!」

涙目になりながら抗議するが、様子を見に来たおばあちゃんに頭を撫でてもらったのでそれでよしとした。

次の日、私の前に転がったまま放置していたはずの棒が置かれた。多分昨日私が拾ってきたものだと思うが、削られて細くなり先は刃を模したように膨らんでいる。

「なにこれ?」

「これからはこれで練習しろ。刀よりも槍が有利なのは道理だ」

「…私はそれで昨日負けたんだけど」

持ってみると手に馴染んだ。木刀よりも重いけれど、とげもなく握りやすい太さだ。

「いいの？」

「あらゆる武器と戦うことを前提にしているからな。槍術も教えられないことはない」

この現代で何を想定してるのか。あきれそうになるが、私はおじいちゃんの背後にある日本刀を見る。横に並ぶために、同じ景色を見たくて始めたのに。

「模倣ではなく自分に合った形にする。技を会得するとはそういうことだ。芯にあるものが同じならばそれでいい」

芯って何だろう？よくわからないまま構えてみる。重くて違和感があるけど、これが私なのだと言えてみた。

## 第1章 第7話 花冠

「ただいまー」

玄関を開けて野菜の入ったかごを置く。扉を閉めてから再びかごを持ち上げて台所に向かう。

「さつき野菜もらった」

「あら、だれから?」

そう珍しくない出来事をいつものやり取りで流す。

「出撃の帰りによくくれるのよ」

「叢雲ちゃんがかわいいからね」

「なによ、それ」

このてのかわいいほど信じられないものもない。：悪い気はしないけれど。

綺麗出来の野菜の土を落とす。十分売り物になるだろうが、ゆつくりと余生を過ごす人たちにはその必要がないのだろう。深海棲艦が現れる前はこの島ももう少しは人がいたし、辺鄙ながらも船の休息地として港も一定の需要があったらしい。人類の行動圏の端、まだ無事なのが奇跡のような島は経済から外れ、それでもここにいたい人たちだけが残っている。

あらかた野菜を綺麗にした私は居間に戻り、おばあちゃんの隣に座る。動かないでいると眠くなってきた、頭が下がってくる。

「叢雲ちゃん、おやすみする?」

子供をあやすような言い方が恥ずかしかったが、大人しく膝に頭を預ける。

波を高くし疲れさせた風も家の中に入れば涼しさになる。広がっていく厚い雲も湿った空気も眠気を誘う。

「おばあちゃん、私ね…」

ぼんやりとしたまどろみのなか、ゆつくりと呟く。

「知ってほしいの。私の、ほんとうの名前…」

私は叢雲、それでいい。でも、伝えたかった。今なら、艦娘になる前の私も私だと言えるから。そう言える私になったから。でも許さ

れないから

「私、がんばるね。この海をぜんぶ取り返して、戦わなくてもいいようになるまで…」

ずつと一緒にいたい。いろいろなものがなくなっていくこの島で、艦娘としてではなく自分で選んだ結果として。

目が覚めれば恥ずかしくなるような約束を、それでも覚えておう。

頭をなでる柔らかな感触に包まれながら、巡る思考は落ちていった。

曇りの日は魚がよく釣れるというけれど、しよせんは迷信だったみたいだ。初日に釣れたビギナーズラックというには小さな魚で幸運は役目を果たしたつもりのように、あれ以来全く釣れていない。なぜか腕は上がっているという手ごたえがあつて、だから懲りずに隙を見つけては通っているのだが。

「ただいま…」

出かけたときよりむしろ身軽になってしまっている私はおじいちゃんより先に家に入る。いつもより静かな気配に疑問を持ったが何をするわけではなくふすまを開ける。

「おばあちゃん…?」

いつもは見えるはずの背中を探しながら、疑問はようやく違和感になる。浮かんだ違和感が形になる前に、小さな背中が床に倒れているが見えた。

「おばあちゃん、どうしたの!」

駆け寄ってゆすってみても苦しそうな息遣いが返ってくるだけで、私は訳も分からず呼びかける。何もできない動悸に苛まれながら、おじいちゃんが駆け寄ってくるのは理解できた。その後の記憶があるのはやたらとゆっくり進む船の中で、感情が伴うのは病院の狭い廊下からだった。

ただ泣くだけの私の背中をおじいちゃんがゆっくりと撫でる。い

つまでも続くかのような時間は唐突に終わりが来た。医者に呼ばれるがまま部屋に入る。

「おばあちゃん！」

誰よりも早く駆け寄り、手を握ってしまふ。

「いやよ！私まだ教えてもらってない！料理も、編み物も…」

なにも知らない私でも、分かってしまった。今話せているすら奇跡的なことに。だから頑張つて否定する。でも、呼吸器が曇ることと伝わる息とドラマで聞きなれた機械音が規則的なリズムから外れていく。

「…ごめんね」

必死に首を振る。おばあちゃんの手が頬をかすかに撫でる。

「なにもいらない！なんにも教えてくれなくていいから——」

ただ一つ、果たしたかった約束。たった一つなのに

「まだ、知ってもらってないじゃない！私の名前——だから…」

想像も許されないほど遠くなる。

弱々しく握り返される手にすがり相槌を待つ私のほうが慰められているみたいだ。

「——だから、ずっと一緒にいてよ…」

声途絶え、いつの間にか微笑んでくれていた表情も消えた。慰められることのなくなった私の声も嗚咽しか出なくなる。規則的なリズムを刻まなくなった機械音の中で、私はたぶん初めて、深海棲艦などいなくとも人は死んでしまうことを知った。

## 第1章 第8話 パブロフ

墓前で手を合わせ、いつも見た景色を慣れない2人で見る。3人と言ふ気にはなぜかならなかった。

葬式は遺された人を追い立てて寂しさを感じさせないための儀式という考えもあるらしいけれど、身内でもなくやることも分からない私にはただただ長い時間だった。長い時間の最後、遺骨は見晴らしのいい山の上、簡素なお墓に納められた。

「本当になにもなくなっちゃったわね」

いつもより強い風になびく髪を抑えながらつぶやくと、おじいちゃん小さく笑った。

「戦争が始まったとき、あいつを遺して死ぬことを後悔したもんだ。それが看取れて、こうして墓の前で手を合わせている。あいつの墓参りしながら余生を過ごせるなら、それは幸せなことだ」

それが本当にささやかな幸せなのかは強がりなのか、私は知らない。分からないことだらけでも、参るお墓があつて、参る人がいることだけは確かだった。そしてそれだけで十分だった。

「そう言えるのもあいつが最期に笑ってくれたからだ…。叢雲、お前がいてくれた良かった」

悲しくも、もちろん嬉しいわけでもないのに、涙が滲み、あふれ出る。もうこれが最後だと誓う涙の1回目だった。

息を整えると肩に手を置かれた。帰り道に入る前に疑問をようやく訊く。

「なんでこの場所に…?」

「あいつが好きな場所だったからな。お前が知っていたのは驚いたが」

なんでこの場所を知っているのか、そう訊いたつもりだったが想像以上の答えが返ってきた。

「知ってたの?」

「昔喧嘩したときにあいつはよくここに来ていたからな」

懐かしむように語っているところ悪いが、私はおばあちゃんが来てくれたときを思い出す。

「迎えに来て欲しかったんじゃないの？」

「そうなのか？」

意外、どころかまだよくわかっていなさそうな声を聞いてしまった。思いつき溜息をつく。

「あんた、おばあちゃんが結婚してくれてよかったわね。ほら、さっさと帰るわよ」

先を進みながら、こうしておじいちゃんの愚痴でも言い合って笑う未来もあつたかもしれないと想像してみる。鮮明な映像が少し滲んだ。

「ただいま」

いつもの習慣で声が出て、戸を開ければ目が自然に探す。おかえり、の声が聞こえるまで。聞けないと気づくまで。おはようもおやすみも私は探し続ける。

刻まれた習慣もいつかなくなってしまうのだろうか？寂しさにゆっくりと慣れて新しい日常になったとき、おじいちゃんという幸せを知るのだろうか？

目を彷徨わせながら、まだ手に馴染まない包丁を握った。

気まぐれに哨戒をして、槍を振って、料理をして、たまに釣りに行く。変わらない日々の繰り返しの中でただ季節は流れていく。日差しがたらくなくなるときには魚が釣れるようになっていた。気づけば嬉しくなったときには魚が釣れるようになっていた。気づけば広い家に2人でいることに慣れて、3人でいた時間よりとつくに長くなっていることに気づく。変わらないようでも変わっていく日々を、何もなければどかけがえのないこの島で過ごしていく。

この場所がある奇跡を、ここに居る奇跡を享受しながら、私は分かっていたいなかった。

奇跡が孕む本当の意味を。

## 第1章 第9話 龍

その日、初めて緊急の入電が入った。といってもただの電話と変わらぬ見え、私はただ居間に座っておじいちゃんの様子を見ていただけだった。不意に叢雲、と声をかけられて初めて見る剣呑さに背筋が伸びる。

「深海棲艦の侵攻が始まった。ここに到達する前に——」

全てを聞くまでもなく理解した私は呼び止める声も聞かずに飛び出す。警報が響く道を息を切らして走った。息ができずにせき込む私は、浮かんでしまった最悪の想像を振り払いたくて、落ち着く時間も惜しみ艦装を装着する。足をふらつかせながら進む私は電探でその影を認識し、待たずして視界で捉える。

水平線に広がる黒い群れが暗雲を引き連れ、先に到達した雨が私を打つ。人が伺い知ることできない遠洋で生じた活性化の最後、あふれた深海棲艦の浸食現象だ。艦隊なんて規模じゃない数の暴力が水平線の切れ間で撃鉄を上げている。

「…やめてよ」

見たなくなてうつつむく。閉塞された喉からこぼれた声は自分でも聞き取れないくらい震えていた。

「もう…奪わないでよ…」

深海棲艦なんてものがいたから、私は家族を失った。それでもようやく手に入れた居場所が今、崩れようとしていた。

嫌だ嫌だいやだ——

怒りで見据えたはずの目は揺らいだ。膝が震えて、錯覚したからだが芯から冷たくなる。その感情を認めたくなくて冷気とともに湧き上がる暗い灯に体を、心を、すべてを委ねる。全身に燃え広がった黒い輝きがあふれ出し、私の中の獣が胎動する。

——いやだイヤだイヤダ——

〈叢雲〉

頭の中にいつも聞いていた声が響く。

「…おじいちゃん？」

漏れ出し、再び内部まで延焼しようとしていた輝きが止まる。

〈島民の避難は終わった。増援は来ない。お前も近くの鎮守府まで帰還しろ〉

「いや——！」

私の全てが否定されるのをただ拒んだ。近くに他の要所もなく、拠点にも使えない島に人がいられたのはただ、奇跡的に侵略がなかっただけだ。失えば取り戻すことはできないし、こんな簡単に崩れる奇跡がもう1度起きるはずがない。

だからすぎる。交わした言葉に。

「ここが好きだって言ったじゃない！ずっと一緒にいようって言ったじゃない！」

それだけで私は戦える、そう思ってもどこかで分かっている私は嗚咽で言葉を乱す。

「——おばあちゃんにお参りしてすごせたら幸せって、言ったじゃない……」

そんな小さな願いも叶わないなら、叶えられないなら私はなんでここにいるんだ。

再び濺んだ光が漏れ出し、機関が回転数を上げる。

この島で生まれた叢雲は、この島のために戦いたかった。勝手な私が傷つけても受け入れてくれた人たちに返さなくてはいけなかった。

そのためになら命を捨てても良かったのに——

〈叢雲、撤退だ。お前が戦う理由はない〉

聞こえてくる声はそれを許してくれなかった。

〈もうその島には——〉

どれだけ目を閉じても響いてくる。

〈——なにもない〉

そうか——

その言葉を聞いたとき、私を巡っていた力が消えた。

——私は、負けたんだ……

私が命を懸けても、何も変わらない。島が深海棲艦に侵される運命に狂いはない。

私は無力で、みじめだった。

長い航路を進んだ先に鎮守府があった。どうやって航行したのか覚えてないが、ただ長かった感覚だけがある。なじみのない港に見慣れた人が立っていた。どう会えばいいのか分からなかったのに、気が付けば縫り付いていた。服から絞り出された雨が腕を伝った。戦うことすらできない無傷の艦娘はただ泣いた。

冷え切った手が背を撫でるのを感じながら、私は誓う。

必ず、あの島を取り返す――

## 第1章 第10話 菩提樹

鎮守府近くのバス停で1人バスを待つ。日差しが強くなってきたが、もう少しの我慢をすれば冷えた空気の中に入れる。来た時と同様に他の5人は海から出ていくが、私は別の用があつてここにいる。非公式な任務で来たから見送りも大っぴらにはできないが、また吹雪あたりが何かしているのだろうか？

久しぶりに会ったせいで吹雪がなんとなく浮かんだだけだったが

「叢雲ちゃん！」

本当に声が聞こえたので驚いて振り返る。走ってきたのか、膝に手をつけて息を整えている。

「あんた、どうしたのよ」

「叢雲ちゃんはバス停にいるって聞いたから」

そうではなく、なんでわざわざ来たのか聞きたかったが、どうせ古い知り合いの見送りをしたかっただけだろう。そう思っていた。でも吹雪は体を上げて背を伸ばす。

「叢雲ちゃんに言いたいことがあつたんだ。ほら、あの約束」

「約束？」

覚えがなく聞き返したとき、バスが到着した。エンジンが震える音の中でも聞き逃せないくらいまっすぐに吹雪は告げた。

「私、強くなつたよ」

息が止まる。吹雪と別れるときの言葉、約束とも言えないただ一方的に告げただけのそれを吹雪も覚えていた。私はそれからの吹雪を知らない。だけど、彼女はまっすぐ進んでいったのだろう。私よりもしっかりと前を向いて。もしかしたら私との約束を果たすために。

震えて泣いていた彼女は、強くなつたと言えるものを手にして目の前に立っていた。でも、優しく笑う姿はなにも変わっていないかった。だから私は言葉探しをあきらめて背を向ける。

「まだまだよ」

吹雪が変わらないから、変われなかった私はそのやさしさに甘えるんだ。

「せいぜい頑張りなさい」

ドアが閉まる音が吹雪と私を隔てた：のだが、席に座って横眼に見ると吹雪は全身をゆらして手を振っていた。

私は諦めて小さく振り返した。

市街地に入りバスが頻繁に止まるようになって眠りから覚める。さつきまで見ていた夢は覚えていないけれど、目元をこすると指先が少し濡れた。

慌てて降車ボタンを押す。目的地にはまだ少し遠いが、買い物を済ませてから行くのがいつもの流れだ。

予想外に重くなってしまったビニール袋を持って玄関の戸に手をかける。今でも不用心に鍵がかかっているのは分かっていたのでそのまま開けて入る。チャイムは鳴らさない代わりに一声かけてそれで良しとするあたり、私も習慣が変わっていないのかもしれない。

「ああ、来たのか。連絡を入れてくれれば用意したんだが」

おじいちゃんは特に驚いた様子もなく新聞から顔を上げた。

「そうしたら抜き打ちにならないじゃない」

ものが多いからまだ見逃せる程度で収まっているであろう雑然とした部屋を通り、冷蔵庫を開ける。案の定スーパーで買った惣菜が並んでいる。

「別に悪いとは言わないけど、栄養バランスは考えなさいよ」

歳を考えろ、と言うのはさすがに勘弁してあげる。

茶色い中身が透けるパックをどけて買ってきた野菜を入れる。作り置きをしておくつもりだったから量が多い。おじいちゃんも手伝ってくれようとするが。

「それはすぐに使うからしまわなくていいわよ」

私が制したせいで手持無沙汰になってしまう。仕方ないので居間の掃除をしてもらう。こんなことで帝国海軍の元帥が務められているのか心配になる。

「そうそう。天龍が相変わらずね——」

壁越しにいつものように近況を話しながら、時間が過ぎていく。

「まったく…」

布団を出そうと押し入れを開けたら先ほど詰め込まれた生活雑貨が前をふさいでいた。数日後にはもとに戻っているのは目に見えている。そこらへんは諦めているので手を伸ばして布団を引っ張り出したら、見慣れていたものが一緒に転がってきた。

「どうした？」

「これ、ここにあったのね」

あの島に残されていったものだと思っていた。手垢のついた木の槍をもってみると、記憶よりも軽く感じた。

「置いていくのも忍びなくてな」

ささくれもなく丁寧に削られたこれがもとは拾ってきた枝なのだと思うと、とても大切に作られて手入れされてきたことに今更思い至る。

「せっかく持ってきたんだから物干しぎおにでも使えばいいじゃない」

「そうか？」

本当に使われかねないので一番奥に隠して押し入れを閉める。

変わらないと思っていたものも、確かに変わっていく。私の全部だと思っていたものがなくなっても私は生きていて、思い出になっていった。いろいろな出会いも出来事もあったけど、あの日の誓いは変わらない。でもあの時の感情とは何かが違う。おじいちゃんはどうなんだろう？

たまには昔の話をしてみるのもいいかもしれない。思い出になっ  
てしまっても、それは確かに現実にあったことで、今になって気づく  
大切なことだってあるのだ。

「あのね、今日友達に会ったの。久しぶりに会って——」

「叢雲、もう寝る時間だぞ」

電気のスイッチに手をかけたおじいちゃんに話を遮られる。私は大人しく布団に入りながらも頬を膨らます。

「いいじゃない。明日は休みなんだから」

私とは予定が違うおじいちゃんは何か言いたそうだったが、そうか、と笑ってくれた。

「それが、すごいだよ。吹雪っていうんだけど——」

## 第2章 第1話 鳥籠

全てを失ってから1週間ほど経っただろうか。私は別の鎮守府に所属を移されたが、何ができるわけでもなかった。

再び独りになった今、後悔と、何を後悔していいかも分からない無力感の中にいた。

これはそんな私が、奇跡を取り戻そうとする物語――

人類史上最悪の発明は目覚まし時計だと、誰かが言った。心からの同意を全身でアピールしながら手を伸ばす。数回外したピンタはようやく不快な音を黙らせた。起き上がって髪を簡単に整えるが、急ぐ用がないから体はゆつくりとしか動いてくれない。

「私の…せいよね」

絞り出した言葉に、おじいちゃんは何も言わない。何を言ったところで、私には肯定にしか聞こえなかっただろうけれど。

鎮守府への異動を伝えられたとき、おじいちゃんの軍服を着た姿を初めて見た。元帥として帝国海軍を統括する立場になると告げられた。それは、今までの形だけの提督とは違う。

あんなに静かに暮らすのがいいと言っていたのに

…そうか。

叶わなかった。あの島をうしなってしまったから。おばあちゃんと離れてしまったから。

――私が守れなかったから――

…やるべきことがなければいやな思い出ばかりに意識が飛ぶ。

ゆつくりと立ち上がり洗面台に向かう。殺風景な1人だけの部屋では、誰かに起こされることも、漂う匂いで朝ごはんを予想することもない。なのに私は、まだそんな時間を探し続けていた。

朝の光と聞きなれた音に静かに目を覚ます。開けられた窓から聞こえる音は小さいけれど、習慣となった体はそれだけで活力を巡らせ始める。

着替えを進めながら、窓の外を眺める。厚い刀を模したものを熱心に丹念に振る後ろ姿。3階からではずいぶん小さく見えるもの、いつもの朝の光景だ。もう当たり前になり、嘲笑するものすらいなくなった光景。艦娘に刀など無意味だと、それを知ってなお汗を流すその姿をずっと見ていたかった。

「おい、龍田ー!」

ささやかな幸福の時間も、気づかれてしまい終わりを告げる。刀を担いで、こちらを見上げていた。

「起きてんならさっさと降りてこいよ。素振りばかりじゃ飽きちまうぜ」

「はいはい。負けるのが分かってるのに、天龍ちゃんは物好きねえ」  
無意味で誰にも分かってももらえないからこそ、2人だけの時間。壁に立てかけてあるおもちゃの槍を取り、軽い足取りをばれないように気をつけながら幸福に満ちた時間へ降りていった。

「ねーひゅーがー」

天井に反射した相方の声は間違いなく自分に向けられたものだ。礼儀がなっていないが、人のことを指摘できない恰好なのは同じだった。

剣道場の端で寝転がって体を冷ましていた。隣の弓道場では空母が修練にいそしんでいるが、剣道場に他に人はいない。もともと海軍施設にあった弓道場を鎮守府に改修する際にそのまま流用したものだ。併設されていた剣道場も残されたものの、必要性のない剣道をやさわざやる者もそうはいない。伊勢とお互いに立てなくなるほど手合わせができるのは全くの偶然だった。

「大会の開会式で演武した人いるじゃん?」

返答がなくとも構わず続ける伊勢に意識が引き戻される。伊勢とは大学の全国大会で出会った。出会ったといっても剣を交えただけで話もしていない。まさか艦娘になるとは思っておらず、ましてやここで伊勢と再会するとなんて考えつくはずもなかったころだ。

「ああ、いたな」

真剣の演武とはいっても威圧感があるものだが、演者の風貌も相まって特に圧巻だった。

「あの人、海軍の偉い人だったらしいよ」

「そうか」

それ以上の感想は湧いてこない。武士のような、その中でもどちらかと言えば浪人に近い印象だったので、偉い人という響きに違和感があったが。

「だが、会うこともないさ」

一応同じ組織でも、艦娘と海軍上層部は全く違う存在だ。その程度の共通点では縁とも言えない。

「そりゃそっか」

だから何というわけでもないらしく体を起こした伊勢に追従する。もう少し体を動かしたいのは同じだった。

何が目的というわけではなく、暇を見てはここに来る。幼少のころから続けている習慣をただ繰り返す。繰り返すことができるのも、拮抗している相手がいることも幸運なのは分かっている。だが、もはや何の意味を持たない技能を磨くことに、どこか退屈を感じているのも確かだった。

「お久しぶりです、有賀二元帥」

形式ばった敬礼の後に少し親しい挨拶が続いた。歳は娘以上に離れているが、師と言える人の孫であれば当然だった。成人してからは会っていないかったせいで、声をかけられるまで分からなかったが。

「亜庭…いや、今は三笠だったか」

変わったのは見た目だけではなかった。この国最初の艦娘、それが

祖父に倅い軍属した彼女の今の姿だった。だったが、彼女は口元だけ笑う。

「いえ。本日の任務をもって退任し、日本海軍に戻ります」

深海棲艦が現れた当初と異なり、配備される艦娘の種類も数も生存率も増えている。大和型すら出てきた今、前弩級戦艦は御旗の意味すら持てない。

「…何も変えられないまま」

小さく漏れた声が届く。それは軍人でない少女たちを捧げて成り立つ世界へのせめてものの懺悔だった。戦争が危ぶまれていた時期に軍人の道を選んだ彼女たちの世代は、国を担う意識が強い。それが叶わぬ現状への悔恨も。

「…そうか」

気の利いた言葉など出てこない。最後の任務ですら船の上にいる彼女に。

叢雲と交わした言葉を思い出す。何も意味をなさない言葉の羅列。何を言っても傷つけることは分かっていたから言葉を探し、伝わらない。元より苦手なきらいだったが、どれだけ歳を重ねても変わらない。それを今更齒がゆく思う。

「元帥の帯刀、久しぶりに見ましたがやはり似合っていますね」

亜庭は先ほどの空気を払うように、顔見知りの気安さを少し覗かせた。他の士官は緊張や困惑の表情を見せるが、彼女なりの気の使い方なのだろう。

「ただの模造刀もそういつてもらえるなら差す甲斐があつたものだ」

「元帥ならそれでも切つてしまえばいいですけどね」

くだらない談笑をしながら、ふと窓の外に流れる海を見る。視察などという名目でわざわざ危険な海に出ていく理由は分からない。近海とはいえ、深海棲艦が出ない保証はない。

窓に薄く映る安庭を見る。艦娘をやめた後どうなるのかなど先例はない。だが、これは彼女の門出を祝う儀式に見えた。今まで守り抜いた海を、船の上から見つめるための。

「ひとまずはゆっくりとすればいい」

また一つ、意味のない言葉を紡いだ。

鮮血が飛び散った。油のように重くねばつく黒い液体が血であるのであれば、だが。刃の持たない軍刀を反射的に叩きつけられた人類の敵は海に沈む汚泥のようなものを流し、動きを止めた。純白の軍服が体液に染まったことも、帝国海軍の元帥を危険にさらしたことすら気に留める者はいなかった。

唐突に大口を開けて襲い掛かってきた深海棲艦を切り落とした。その意味を正しく理解したのは、刀を振るった有賀だけだった。

「亜庭」

ねばつく液体を払いきれず納刀し、後ろに立つ艦娘に告げる。彼女が無為な平穩を望まないのならば。

「俺の下に就く気はないか」

## 第2章 第2話 埋火

食堂に入るともう賑わっていた。朝食が一番利用されるのは鎮守府であればたいいそうらしい。朝から自炊をするのもわざわざ鎮守府の外に食べに行くのも面倒なのだろう。私のようにすべて食堂で終わらせる艦娘も珍しくないけれど。

さらに2週間ほど経ったけれど、私の出撃は一度もない。今や元帥となつた人のもとにたつた一隻いた艦娘だ。どう扱っていいのか分からないのだろうか。そして、今の私にとって出撃がないということは何もすることがないということだ。

「おい」

味気ないおかずを口に運んでいると後ろから乱暴に声をかけられた。この鎮守府で声をかけられるなんてめつたにないので素直に驚いた。流れのまま口に入れてしまったおかずが喉に詰まりそうになるくらいに。少し落ち着かせて振りかえる。

——え？

呼吸を忘れた。振り向いてすぐに眼帯が目に入ったから。

「辛気臭い顔でメシ食ってんじゃねえよ。作ってくれた人に失礼だろうが」

：…なんだこいつ

見間違いは一瞬で終わった。共通点は眼帯だけ。

「うるさいわね」

どんな顔で食べようが私の勝手に、残さないことで最低限の礼儀ははらっている。

「天龍ちゃん、なにしてるの?」

「わりい、今行く。じゃあな」

自分から絡んできたことなど忘れたかのように、雑に手を振り去っていった。そんな幸先の悪い朝に、私は珍しく命令を受けた。

要領の得ない指示を受けて向かった先は見慣れていて、でもやっぱり違う建物。中の様子が想像できる武道場だった。

…ここにもあるのね。

軍施設なのだからあるのは当然で、胸の奥が引つ張られる感覚がするの無理不筋なことかもしれない。少し重くなった脚をすすめて扉を開けた。

「お、来たね。いらっしやい」

奥にいた艦娘がこつちに向かってくる。髪を後ろで上げ気味に束ねてあり、服は確か伊勢型戦艦。

「わたしは伊勢、んでこつちが日向ね。あなたは…叢雲でいい？」

案の定伊勢型だったのはいいとして、嫌な予感がした。艦娘の制服と偽装の中でも叢雲は特徴的だ。吹雪型からナチュラルに外されるくらいには。だからほとんどの場合は私を叢雲とすぐ認識するのだが、例外はある。特徴的なポイントがダブったとき、その判断のウエイトが大きい故に混乱することがある。そして叢雲と似ているのは…

「お、もういるじゃねえか」  
げ…

嫌な予感はいたい当たるもの。乱暴に扉が開けられて朝見た輩が現れた。

「お前、朝メシ食ってたやつか」

「気のせいじゃない？」

朝飯食ってたやつ、なんてくりならほとんどの人が当てはまるが。そんな指摘を心の中でとどめていたせいで頭を抑えられる。必死に振り払って乱された髪を撫でつける。

「何させられるか分かんねえけど、仲良くしようぜ」

仲良くしているつもりだったのか。だとしたら非常に攻撃的なコミュニケーションで、それだけで仲良くなれない気しかない。

「だめよ天龍ちゃん、乱暴しちゃ」

「ちげえって。オレは——」

「はいはい…あなたたち、見ない顔ね」

私と同じ特徴の艦装を持つ艦娘、おそらく龍田は天龍を適当にあしらって伊勢と日向に話かける。私には一瞥しただけだ。天龍とは別

の意味で仲良くなれそうにない予感がポンポンする。

「まーね。私たちもここに来たのは昨日の夜だし。あなたたちはこの鎮守府所属よね」

伊勢の確認を天龍たちは肯定するが、伊勢がこの鎮守府にいたのか分からない程度の私は首肯にためらう。事情を話したくもないので結局は頷くののだが。

「そろそろ時間だが」

「あと1人来る予定なんだけど、遅れてるんでしよう。同じ説明するのも面倒だしひとまず待とうか。別に急ぐものでもないし」

日向の簡素な言を伊勢が補足しながら答える。たぶんいつもこんな感じで会話しているのだろう。

「説明って…私は何も聞いてないわよ」

伊勢型の2人がこの状況の事情を知っていることは分かったが――

「…まあ、言っていないからな」

適当に返してきた。話すのが面倒というよりじらして楽しんでいるみたいなのが気に食わない。…さつきから気に入らないことばっかだ。だが、もやもやする時間も再び開いた扉のおかげで案外早く終わった。

「すみません。遅れました」

振り返った途端にまた息をのむ。一瞬思考が止まる。

「気にしないで。急な要請だったらしいし、遠いところからわざわざありがとうございますね」

伊勢が応えている間に幻視は収まり、正常な視界で捉えた姿が私の意識を戻した。

「球磨型軽巡5番艦、木曾。本日より本鎮守府に配属となります」

やたらきつちりとした敬礼は再び同じ眼帯をした人を思い出させる。

――何考えてるの、私は。

頭を軽く叩いて浮かぶイメージを追い出す。これから事あるたびにぼけつとするつもりか。てか、私の眼帯エンカウント率高いわね。

この時代、眼帯の需要は上がっているのかしら。

「ふむ、少し違うな」

「なんで私たちがここに呼ばれたかという点、独立した部隊として試験的に運用されるためのもの。ここの鎮守府に拠点は構えるけど、所属はちよつと特殊になるわ」

さらつと告げられたから深く考えずに納得しそうになるが、実際のところ全く分からない。横を見てみると同じ感想のようだ。

「まあ、上がってくれ」

「そうね。こんなところで説明もなんだし」

そこまでの反応は織り込み済みだったようで、私は勧められるがままに奥へ向かう。私が想像した通りの内装が広がる、板張りの間。天龍などあからさまに見回しているが、私をはじめのうちはそうだった。龍田も控えめながら同じように眺めるが、木曾はそういつたりアクションをとらなかつた。慣れているのだろうか。

「さて、試験的な部隊と言ったけど、私たちが選ばれたにはちやんと理由があつてね」

伊勢は全員が座つたのを確認して語りだす。

「私たちの、いや、人類の敵である深海棲艦に通常の兵器は効かない。効果があるのは私たち艦娘の兵装だけ。ご存じの通りだけど」

「ご存じもなにも、艦娘となつたときに初めに教わることだ。これを知らない艦娘など見つけられない。だが、やけに芝居がかった口調のため質問を控えておとなしくしておく。」

「だけど、つい最近深海棲艦を倒せるもう一つの方法が見つかったの。それが——」

伊勢は急に立ち上がる。いつの間にか後ろにいた日向の手に竹刀が握られていた、と思う間もなく空中に投げられる。綺麗な放物線を描く竹刀は伊勢の頭上に向かって落ちていき、伊勢はそれを掲げた右手で見もせずに掴む。パシツと子気味いい音が響く。

「刀よー」

……………?

静寂が耳に痛い。高々と竹刀を掲げた伊勢がゆつくりと動き出す。

「…あれ？」

「だから言っただろう」

日向が座りなおしながらあからさまに溜息をつく。

「いやいや、昨日ノリノリで練習してたじゃん！受けなかったからって見捨てないで！」

「あのー…どうゆうことかしら？」

龍田が少し引き気味に訊くように、演出以前の理解が追いついていない。まあ、それを差し引いてもリアクションに困ったが。

「えーつと。ようするに…」

咳払いした伊勢の言うことには。

刀などの近接武器は深海棲艦が持つ兵器を無力化する力場の影響を受けないため、それを利用した近接戦闘を行う部隊を検証する。そのために私たちのようなある程度武術の下地がある艦娘が集められたというわけだ。それは分かった。

「これは帝国海軍元帥直々の達しだ」

「——え？」

だが、日向が最後に告げた意味が分からない。だって——

「私、聞いてないわよ」

「そうだな。俺も初めて聞いた」

木曾がだから落ち着け、と同意を示しながら気づけば立ち上がって、いた私の腕を引っ張る。

違う、そうじゃないの。そう言いたかったが喉からなにも出てこない。

座り込んだ私は膝に置いた手を強く握る。

私が槍を持ったのはあの島に来てからだ。それを知っているのは1人だけで、だったらこの件に関係しているのは当然のことなのだろう。でも

なんで教えてくれなかったの…？

もうつながりなどなくなったような気がして

「おじいちゃん…」

震えだす手の甲を見つめながら誰にも聞こえないようにつぶやい

た。

## 第2章 第3話 TRIGGER EFFECT

「と、いうわけで」

伊勢が立ち上がり、日向がそれに続く。

「さっそくですけどあなたたちの実力を試させてもらおうね」

「おう！で、どうすんだ？」

天龍が真っ先に立ち上がる。なにも分かってないみたいだが、声は実質初対面の私でも分かるくらい弾んでる。

「全員で手合わせしてもらおう。分かりやすく体のどこかに当てれば一本でいいだろう。得物は好きなものを選んでくれ」

床に乱雑に並べられた武器の中から日向も竹刀を握る。見てみると槍のような長さの竹刀もあった。

「待ってくれ。俺は昔少しやってただけで、それも演武がほとんどだ。お前たちの期待に応えられるとは思えない」

木曾が竹刀を手に取りながらも抗議の声を上げた。もっともな言い分ではある。いきなり集められて剣術勝負と言われても困るのは私も同じだ。だが

「他に経験者がいなかったのだろうか」

「まあやってみればいいじゃん」

適当に流される。どうもこの戦艦姉妹がやりたいだけの気がするけれど。木曾は閉口して竹刀の長さを吟味し始める。タイミングを見計らって一番乗り気な天龍が木曾を引っ張る。

「おっしや、さっさとやろうぜ」

木曾も従ったから記念すべき1戦目は眼帯対決だ。剣道の開始線に合わせて向かい合う。天龍は基本の中段に構えるが、握るのは右手だけ。私から見ても型なんて知らないことが分かる。一方木曾は。

「ん？それでいいのか？」

天龍がわざわざ訊くだけあって、竹刀を腰に当てている。本物の刀だったなら納刀の位置、つまりは居合の体勢だ。

「これしか知らないからな」

そう言い切り重心を下げる。少しやってた、といった割には様に

なっている。だが、居合とは緊急の事態に対応する技術であり、抜いた刀を振り下ろすほうが速い。：昔かっこよさそうだから教えてくれとねだったときに諭された知識だ。

ふとよみがえった思い出にとらわれているうちに伊勢が開始の合図を告げる。馬鹿正直に真正面から振り下ろした天龍に対し、木曾は体軸を傾けることなく回転させ――

ベシツ!

――る前に子気味いい音が響いて倒れる。そもそも居合は刀身を鞘に滑らせることが技術の根幹で、竹刀で使えるものではない。もちろんその不利を覆す腕も木曾にはなかったわけだ。

「おいつー怪我ねえか!」

殴った当の天龍が慌てて駆け寄ると木曾もゆつくりと体を上げる。散々経験した私から言わせれば意外と大丈夫だ。むちやくちや痛いけれど。

「やるな。ろくに反応もできなかった」

「お前もやるじゃねえか」

手を取り合い分かりあったかのような笑みを交わす2人。そんなに剣で語り合う時間あった?

「あら、あなたもそれなのね」

いつの間にか隣にいた龍田が私と同じくらしいの長さの、つまりは槍を手に取った。そう、私は安っぽい青春ドラマまがいを見せられに来たわけじゃない。

「順番的には私とあんただけど」

「いいんじゃない? あなたも刀に負けるより言い訳できるでしょう?」

背を向けながらいやにこなれた挑発をしてくる龍田。でも悪いが私にもプライドがある。ずっと槍を振ってきた自負が。

腰の高さで先端をまつすぐ龍田に向けた私に対し、龍田は右前の半身になりその側面を守るように槍を縦に構える。頭上の左手と、肘を体にかけて横に伸ばす右手。見たことのない型――私の対人経験は1人だけだけど――でも行動の選択肢が少ないことはすぐ分かる。

足元にある刃を跳ね上げるだけだ。あとはタイミングだが――

「……っつー！」

タイミングもなにもない。始まった瞬間には本来刀身があるはずの先端が跳ね上がり迫ってきた。正直で単純な先制攻撃、本質的には天龍と一緒に。だが、私は下からの攻撃に慣れていない。とっさに持ち手を出し、柄でかろうじて防ぐが押さえつけるまではできない。高々と上げられた槍は天を指し、そのまま振り下ろされる。長物の恩恵、遠心力を最大限に得た斬撃が垂直に振ってくる。

「ああ、もうっつー！」

悪態付きながらなんとか穂先をぶつけて逸らす。少しでも角度がついてくれていたらよかったのに、綺麗に真下に振り下ろされた軌道を変えるのは厳しい。それでも成功したのは竹刀の軽さのおかげでしかない。

てか、これ槍じゃなくて――

長物の恩恵、とは言ったけれど槍は突きと小さな払いが基本だ。ここまで振り回すのは薙刀に近い。使っている龍田本人にその区別がついているかは知らないけど。

そうこうしているうちに少しずつ後ろに下がっていく。視界の隅に白線が入り、足が止まる。後ろに下がることで保っていたバランスが崩れた。別に白線を超えてはいけけないとは言われてないのに。

「はい、残念」

そんなこと気づく前に、いつの間にか胸の前に置かれた槍の先で軽く押されて倒れる。

「なかなかしぶとかったじゃない」

賞賛する気もない感想を述べて龍田が離れる。実際私は何もできなかった。あのまま待っていて勝機があったはずがない。乱れた呼吸を整えるふりで、結果を受け入れることができない自分をごまかそうとした。

「いやー楽しかったー」

伊勢が満面の笑みをたたえながら大義名分も忘れて素直な感想を

述べた。剣道有段者という伊勢型の2人はさすがに強かった。私といえは、まったく駄目だった。木曾には勝ったものの、状況を考えれば当然のことだ。久しぶりではあっても調子が悪いわけではないはずなのに。

「天龍に龍田、君たちは強いな」

「だねー。いろいろと雑だったけど、膂力は大したものよ。どこで習ったの?」

「どこでもねえよ。我流ってやつだ」

しれっとよく分からないことを言う。

「毎日素振りと龍田の相手してたからな。他の奴と戦ったことなかったけど、意外となんとかなるもんだぜ」

天龍は褒められて上機嫌だが

「なんでそんなことしてたんだ?」

私の、というより4人の疑問を木曾が代表して訊いた。天龍はともかく、どや顔を向けられても他人事のように目を合わせない龍田が天龍に付き合う姿は想像できない。

「そりゃオレは世界を救う女だからな」

しばらく意識を失って会話を聞けてなかったのかと思った。そんなことはないから、だったら天龍は会話ができないタイプの艦娘なのだ。

「だから、世界中の深海棲艦ぶっ飛ばして平和な海を取り戻すんだよ。それがオレの目標だ」

「できるわけないでしょ」

天龍の馬鹿な話を、私は気づいたら否定していた。良く聞こえなかったが、私が出したと思えない冷たい声。以前だったら気にも留めない馬鹿な発言を、耳をふさぐ代わりに抑え込む。

「深海棲艦はずっと増えて、日本の周り以外どうなってるかも分からないのよ。海を減らされないことすらできないのに——」

「だからだよ」

私の必死は簡単に肯定させる。そして、簡単に否定しようとされる。

「普通のことやってもできねえからな。誰もやってないことやらねえと、つてな」

やっぱり、理解できない。だから剣を振る？そんなことで飲み込まれる海を救えなどしない。そんなことで変えられるなら——

「なるほどーなかなか面白い考えね」

伊勢が手を叩く。会話に加わるように装っているが明らかに私の言葉を遮った。

「とにかく、今回は余興みたいなものだからね。私も日向も剣道しかやったことないし、これから真剣を使うようになるよ。また別物よ。今日の結果に慢心せず、腐らず頑張りましょう！」

「…真剣？」

余興なんてなぜさせたのか、やっぱりただ遊びたかっただけじゃないか、といった真つ当な非難よりも聞き逃せない言葉に食いついてしまふ。

「ああ」

何でもないように日向が肯定する。

「私たちの目的は深海棲艦の討伐、つまりはやつらの装甲を切り裂くことが求められる」

深海棲艦のもつ特殊な装甲が刀に意味を成さないとしても、深海性感そのものが鉄で覆われている。生体部分もあるからそこを狙うこともできるが、どうであれ木刀ぐらいじゃ倒すことはできない。

この時代、真剣をまともに扱った者などそういない。海に立ち剣を振るつた者は人類史上存在しない。艦娘の近接戦闘。私たちの与えられた任務の意味をようやく理解し、つばをゆつくりと飲み込んだ。

「龍田ーなんだよ、さっきの態度は」

「あら、私はいつもどおりだけど」

帰り道、半ば予想していた非難を適当に交わす。乱暴で一方的なコミュニケーションでも良好な関係になろうとする意識がある分、確かに言及されるいわれはある。だが、理屈と心境は別物だ。

「まったく…仲良くしろよな」

言っても無駄だと理解しているのか、頭を搔いてぼやくだけだ。そんな横顔がいつもと違って見えた。

「天龍ちゃんは楽しそうねえ」

「おうー」

それを素直に口に出すと、それ以上に素直な答えが返ってきた。

「新部隊だぜ！今まで剣振ってた甲斐があるってもんだな」

初めて剣を振り出したとき、本当に世界を変えられると思っていたのだろうか。そんなことどうでも良かった。ただその背を見るだけで幸せだった。だが、その時は終わりを迎えた。虚構だったはずの言葉が本物になろうとして。

「龍田もそうだろう？」

ただ2人でいれば良かった。だが、そう思っていたのは1人だけ。そんなことつゆとも思わず同意を求めてくる。

この先でどうなるのかは分からない。でも、今は確かに報われたのだ。その笑顔を見てしまったら、答えは決まっている。自分だけの幸福が終わることを惜しみながら。

「そうねえ」

天龍の目標と龍田の幸福。この日、2人が剣を振り続けた意味がようやく同じになった。

## 第2章 第4話 イデア

「おおー！」

天龍があからさまにテンションを上げて剣というには少し厚い刀身を掲げる。相変わらずうるさい、というには私も少しばかり興奮していた。私も初めて本物の槍を見る。尖った先端に刃止めはマス目のようで、想像していた槍とは違ったが。

持ってみると意外に軽く、天龍と同じく厚い刃のついた龍田と比べるとどうにも心もとない。今まで棒を振っていた私にはこれで充分ということだろうか。

後の3人は取り立てて言うことのない刀だ。本当は刀がある時点で特筆するべきなのだろうが。横をみると木曾が腰に当てた刀を抜いた。以前見た動きとは明らかに速度が違い、振りぬいた姿は様になっていたが、木曾は少し首をかしげた。

「駄目だな」

「何がよ？」

「力が出てない。抜刀術がそういうものと言えばそれまでだけどな。これでは鉄は切れないな」

「別にいいんじゃない？」

居合に限らず鉄を切るための剣術なんてないだろうし、切れないものなのだろう。そもそも相手は鉄そのものではないのだから。

「装甲のないところを切ればいいのよ」

せっかく厄介な防御が1つ減るのに、馬鹿正直に正面突破をしてやる必要もないだろう。と思うのだが…

「そんなつまんねえこと言うなって！」

聞きつけた天龍が肩に腕をまわしてきた。何度やられてもこの過剰なスキンシップは性に合わない。

「やっぱ真っ向勝負でねじ伏せねえとかっこ悪いじゃねえか」

この頭の悪い発言も性に合わない。そんな私の気持ちなど知らず、逃げようとした私を抱えなおし、さらに密着させる。…なんでこいつはいい匂いしてるの。

「すぐにできるようになるだろーぜ。なんせオレは世界を救う——」  
「できるわけないって言ってるでしょ…」

私にも聞こえるか分からない声でも、隣にいる天龍にはしっかりと聞こえたようだ。隠すつもりはないのだから聞かれたところで別いい。が、絡まれるのはべつだ。

「お前はそればかりじゃねえか。お前はやりたいことかねえのか？」

やりたいこと…

不覚にも考えてしまった。その思考が一瞬で終わったのは天龍の相手をする馬鹿らしさに気づいたわけではない。思い出すまでもない、鮮明な記憶。だが——

「言っても分からないわよ」

それは私だけの映像。地図から消えてもだれも気に留めない小さな島。それを取り戻す意味を、誰かが理解してくれるなんて思えない。ましてや恥ずかし気もなく世界などという彼女には。

「んだよ。つれねえな」

天龍は口を尖らすですがすぐに口角をあげる。少しむこうで龍田の聲が聞こえた。

「分かった分かった、そっち行きやいいんだろ。…じゃあな。お前にもなんかあるみたいで良かったぜ」

あつさり私から離れた天龍は背を向けて雑に手を振る。何も返さない私に少しだけ振り向く。

「その気になったら教えてくれよ。手伝ってやるからさ」

やりたいこと。その答えは見えているはずなのに…

全てを失ったあの日に誓った言葉にかかったノイズの意味を知るのはまだ先のこと。

久しぶりに浮かぶ海は飛沫が冷たかった。今まで感じたことのない波の揺らぎがどうにも落ち着かない。

「ただ機関をまわせばいいってものじゃないわ。急旋回したいならなおさらよ」

だからといって操舵技術が劣ることはない。他の5人と比べたら私の艦娘でいる時間は圧倒的に長いのだから。

近接戦闘に特化した操艦なんて知らないけど、動きの引き出しが多いのは私だ。それぞれ試行錯誤をしながらになるが、私が教えることが多くなる。

「そもそも砲撃を避けないとどうしようもないじゃない」

「まあ、そうなるな」

「戦艦って小回り効かないから微妙ねー。近づくととなると装甲もあてにできないし。幸い私たちには飛行甲板があるけど」

「飛行甲板は盾ではないのだが…」

槍を持った日からしばらく経ったが、まだこんな感じだ。

「だったら叩き落せばいいじゃねえか」

混乱した議論は天龍が入ってきて崩壊する。

「せっかく刀持ってんだしよ」

分かったから黙れ。

「ふむ。なるほどな」

「できたらかつこよさそうだけどね」

伊勢と日向は話半分に流す。でも、半分は本気なのかもしれない。何かを期待する空気。天龍と話すときはいつもこうだ。もともと振り慣れていた分、伊勢達に習って剣の腕も上がってきている。いつこうに勝てないままの私と違って。

形にならなからうが、実戦はやってくる。砲撃ができる艦娘がわざわざ近づいて戦う理由は単純に、砲撃できないときのためだ。

「——だからってね!」

深海棲艦に襲われている船への救援なんて無茶にもほどがある。十分な態勢を整えることもできずに戦闘に割り込むのだから悪態の1つでもつきたくなる…のは私だけみたいだ。

「ひゃびゃー! 日向、出るわよー!」

航空戦艦は嬉々として水上爆撃機を放つ。普段からむやみやたらに飛ばしているのだから久しぶりでも何でもないだろうに、緊張感も

なく開放感に浸っている。

「お披露目だけ！あれだな龍田。なんかこう、テンション上がるな！」  
「はいはい。元気なのはいいけど、ころばないようにねえ」

2人も相変わらず騒がしい。静かなのは木曾だけだが、ただ落ち着いているだけで不満とかは無いようだ。救援とは見かけ以上に面倒な行為だと、たぶん誰も分かっていない。かばいながらの制限された動き。間に入って行くものなら強制的に接近戦だ。そのための白兵技能なのだが、私たちにその不利を覆せるほどのものがあるとは思えない。

瑞雲から切り離された爆弾の落下音が、一方的な蹂躪から戦闘へと切り替わる合図だ。誤爆を避けるために直撃をあきらめた投下位置での爆発は目くらましには十分だったが

「馬鹿っ！逆よ！」

叫んだ声に反応して先頭に行く天龍が止まる。その直後、止まらなければいるはずだった場所に砲弾が落ちた。

救援に来たのだから、真つ先に助けに行きたいのは分かる。だが、それは敵の砲口の前に立つということ。そうやって沈んできた艦をどれだけ見聞きしたことだろう。艦娘の性能が上がっても危険なことに変わりはない。背後をとって攪乱するのが常道だ。救援対象をおとりにしてでも優位に立つ。そう、一部見捨ててでも——  
「なんでよっ!？」

天龍が上がる水柱の中へ踏み込んだ。止まっても、針路は変わらない。深海棲艦の吐き出す砲煙としぶきに隠れ、二手に分かれる形になった私の視界から消えたとき、狭域通信越しのため息が聞こえた。  
「天龍ちゃん引っ張ってくるから、あとは任せたわよお」

いつもの、ともすればいつも以上にのんびりと告げた龍田が続けて消える。任せたといわれても…

「どうするっ？」

「どうもこうも、やりようがないわよー！」

木曾に訊かれても投げやりに悪態づいた。釣られて正面に割り込むのは最悪。だったら挟撃を期待して本来とるべきだった針路を進

むしかない。伊勢と日向に爆撃頻度を上げるように頼むが戦艦の改造に航空攻撃は期待できない。そして私は――

「っ！」

動けないでいた。対峙した深海棲艦と私の間にさえぎるものはない。ないはずなのに。

私たちは艦娘、軍艦の類だ。戦うために近づくなんて馬鹿げてる。だからこれでいい。そう言い聞かせて主砲を構える。射線上に民間船も見えるが仕方ない。外さないようにすればいいだけ。いいだけなのに。

ようやくできた慣れ親しんだ行動が異変の本当を教える。情けなく震える膝が主砲を揺らす。それに気づいてしまった困惑を自覚するより早く力が抜ける脚と、直後に湧き上がってきた感覚。目の前の敵のように暗い光に内側から焼き尽くされそうになる。その意味を理解しそうになった時――

「なにしてるの!」

伊勢が目の前に立った。それからわずかの間もなく私を遮るように出された肩に砲弾が爆ぜた。

「ぎゃっ！」

短い悲鳴が上がり、装甲は砕け散る。だが伊勢は私だけを見る。

「どうしたの!?!大丈夫?」

「え…あ、えっと――」

何が起きたのか、私に何が起きているのかわからず、さまよう音はつながらないで消えていく。その背後でまた、でも遠くで爆炎が上がった。

「おい!天龍!龍田!」

木曾が荒上げた声で何が起きたかを知る。2人がいるはずの場所で立った火柱が深海棲艦を燃やす。

「つてえ…」

「だから嫌だつて言ったのにねえ」

炎が煙に変わると、幕に映された影が立ち上がる。

「近づいたんだから魚雷が絶対に当たるって最高の考えだと思っじや

ねえか」

「巻き込まれるって天龍ちゃんでも気づいてると思った私が悪かったわ…」

「分かってたんなら止めろよ！…あーあ、やっぱちゃんと斬れるようになるしかねえな」

頭をかく天龍は服が破けすすけているが、私たちを見てこぶしを掲げる。

「ま、勝てばオツケーだろ」

「馬鹿じゃないの！あんたが勝手なことしたせいでどれだけ——」

「つつつても仕方ねえだろ。オレたちがいなきや船が沈められてたかもしれないねえんだ」

「だからって——」

反射的にでた言葉は続かなかった。天龍は私と違う。彼女は初めから救援をしようとしていた。実情は分からない。後方からの攪乱で十分だったかもしれない。損害が大きくなっていたかもしれない。でも実際は、守ることができたのは天龍のおかげだったし、怪我を負わせたのは…

「まあまあ、そのくらいにしておいてさ。みんな無事だったわけだし」  
いつものように伊勢が手をたたいて割り込む。隠そうとした痛みが一瞬だけ顔に出た。悔やむのか謝るのか、その表情への向かい方が分からない。

「ま、このくらいなんとかしてやるぜ」

天龍は顔を出してきた民間船の乗組員に軽く手を振って応える。なにも分からないくせに、こんな時の感情はやけにはつきりとしていた。

「無理だっって言ってるでしょ。結局刀なんて役に立たなかったじゃない！こんなことしても意味ないの！そんなことに気づかないで、このまま沈む気?!」

奥から登ってくる衝動。はつきりした感情のくせに、その名前も、根源も分からなかった。

## 第2章 第5話 光る魚

「あんな言い方はないだろう」

隣で歩く木曾は少し遠慮気味に、でもはつきりと苦言を呈してきた。軍刀を腰につけると眼帯も相まってなかなか凛々しい。前を行く私がそれを見ることはないけど。

「ほつといてよ」

「そう言われてもな…」

木曾はぼやきながら刀の柄をいじる。

「お前は何がしたいんだ？」

しばしの沈黙の後、木曾は独り言のように問うてきた。私が振り返ると、前になにか言いたそうだったから、とさして普段と変わらない表情で弁明する。

「…あんたはどうなのよ」

どうせ理解してくれない答えを隠したくて問い返す。木曾はおそらく初めて考える質問に目線を宙にあげた。

「俺か…姉ちゃんたちが、って言っても球磨型のだが、いるんだがまた一緒に暮らせればいい」

木曾が姉ちゃんなんて言うのにすごく違和感があった。そう思われているとは露とも知らず続ける。

「だが俺はこうして1人転属になったわけだ、こんな状況では仕方ないが。だからまあ、天龍たちと同じなのかもな。世界、とまではいかなくても余裕が出来れば同じ鎮守府に配属させてくれるかもしれないからな」

「それでいいの？」

淡々と語られるささやかな願い。

私はもう戻れないけれど。戻るつもりもないけれど。

「艦娘になる前の生活だって、家族だって——」

「いねえよ」

木曾が遮ったのではなく、勝手に詰まった私から引き継いだ。木曾は柄から離れた手を眼帯に重ねる。

「港町に住んでたからな。深海棲艦に襲われて何もなくなった。それから海軍に拾われて艦娘だ」

「なんでそんな平然としてるのよ。あんただって深海棲艦（あいつら）に奪われたんなら、取り返そうとか思わないの!？」

「別に今時よくある話だ。なくなつたものが取り戻せるわけでもないからな」

相変わらず私を遮りもせず、否定もしない。だからこそ、私は否定される。

「よくあるって…」

「天龍と龍田も似たようなものだろ。あいつらも前にいた泊地が壊滅してる」

「なんであんたがそんなこと…」

「ちよつと調べれば分かることだ。別に隠していることじゃないからな」

深海棲艦の侵攻を遅らせることさえ精一杯だったころ、戦力が薄い泊地も防衛に失敗した港も当たり前のように壊されていった。だから正しい。ただのありふれた悲劇でしかない。でもそれは観客席から見た景色で、舞台上で演じられているのは替えも繰り返しもない人生だ。そのはずだった。

「なんで、そんなこと言えるのよ…」

過去を忘れることも、目のまえの幸福で満足することも、無関係だから見える選択だと思っていた。

悲劇の当事者であるはずの私の願いは、誰にも理解されない。同じ景色を見たはずなのに。

小さくなつていく背中を見送る。手はまた刀の柄をもてあそんでいた。

よくあること、などと言えるようになったのはいつからだろうか。艦娘になつても泣いてばかりいた自分を、姉たちが囲いだしてからのいつか。優しさとは程遠い扱いで振り回される日々で気が付いたら泣き止み、笑っていた。

だから願いはそんな姉たちと一緒にいること。それだけで良かった。

たぶん自分は幸運なのだろう。悲劇はそこらじゅうにあふれていても、幸運は落ちていてくれない。

「お前はどうかんだ？」

もう見えなくなった相手に問いかけても意味はなかった。

幸福の享受を否定した彼女は、尊大な夢も認めない。揺れて崩れそうな背中を幻視し、始めの問いを繰り返す。

「どうしたいんだ？」

日向が報告の終わりを告げた。それを受けて労いの言葉を返した。

「そうか…」

わずかな疼痛を感じながらその先を思索する。戦争が始まった夜にも感じた、でもどこか異なる痛みの感覚の正体はもう知っていた。

「無理をさせた。とにかく君たちが無事であるのはなによりだ」

結局のところ、当たり障りのない定型句になった。

無事、とは何だろうと自問する。適切な対処をすれば艦娘の傷は修復する。だが感じた痛みは確かにあり、それは本来少女に負わせてはならないもののはずだった。

自答はできずにいたが、伊勢は首肯した。悪戯気な笑みを控えめに見せる。

「お嬢さんも元気にやっていますよ」

伊勢が言うお嬢さんとは叢雲のことだ。もちろんこの場だけの言い回しだろうが。

「心配なさるならお会いになればいいのに」

よっほど顔に出ていたのだろう。何と言ったものか探しながら無意識に顎の髭をなぞる。子供以上に世代の離れている目の前の少女達には、こんな癖もばれているのだろうか。

命令1つで死地に追いやる責任に慣れたことなどなかった。だが、どれほどの痛みがあろうとも誰かが負うべき業であればそれを受け入れる覚悟があった。死を命ずる者が仲間であろうと部下であろう

と、本来守るべき少女達であろうと覚悟は変わらない。

だが、目の前の艦娘を近接戦という任務にさらすのはその覚悟で許されるもののだろうか。

どのような名目を並べようとも、彼女達を危険にさらしている理由が剣術への、故郷への妄執であると否定できなかつた。同じ願いを持つはずの叢雲。答えが見えないまままで会えば、また傷つけてしまうだろう。それが怖かつた。

「伊勢、あまり軽率な発言は控えたほうがいい。元帥も考えがあつて――」

「ねー、ひゅーがー」

2人になつた帰り路、誰に配慮したわけでもないが形式的に呈す苦言は気の抜けた声で上塗りされた。いつものことだ。少し先に行く艦籍の上での姉は両手を頭の後ろで組んで空を見上げている。

「私さ、ラッキーだと思つたんだよね」

何が、が抜けた文の意味を聞き返さなかつたのは、たぶん同じときと同じ感想を持つていたからだ。

「戦艦って大変じゃん？旗艦だけじゃなくて、小さい子の面倒を見たり出撃計画立てたり。それが特殊な配属とはいえ、一艦隊世話するだけで済むんなら楽でいいなって」

日向もいるしね、と漏らしながら組んだ腕を高く掲げて伸びをした伊勢はあくびをした。

「思つてたのにさ。なんか、めんどくさいね」

「ああ」

一字一句すべてに同意した。姉妹艦は気が合うというが、少なくともこの場では事実のようだ。だからわざわざ言うまでもなかつたのだろうか。

「だが、乗りかかった船だ」

おう、と腕を突き上げた同意が返ってくる。少しだけ振り返つたその顔に笑みが見えた。試合をしていると覗かせる、いつもの笑みだつた。

「航空戦艦が万能なのは戦闘だけじゃないって見せてやろうじゃない  
い」

## 第2章 第6話 泣いてる獣

いくら修練を積もうとそれが成果に結びつくかは別問題だ。どれほど槍を振っても手合わせで勝てるようにはならなかったし、薄い鉄すら誰も斬れるようにならなかった。そんな停滞の中でも、変わらず出撃はやってくる。

「——なんなのよー」

変わらない天龍はいくら損傷しても敵艦隊の正面に立つ。そしてどれほど出撃を重ねても、私の脚は踏み出せなかった。敵の懐に入り込めなければただの艦娘と変わらない。なまじ本来の距離感を忘れてただけ厄介だ。そんな理性もなんの解決を示してくれない。

吐き出した苛立ちも動力にならないで、戦闘は終わる。ただ今回は、救援した船の行先が鎮守府と近かったために送ることになった。何ということもない任務であり、実際深海棲艦に遭遇することもなく港に着いた。

また削られた人類の領土からの輸送船には子供たちがたくさん乗っていた。といっても私とあまり変わらないけれど。降りてきた子供たちは天龍に集まっていく。本人がどう思っているかは知らないけれど、親しみやすい感じは確かにある。

そんな光景になぜか肺が縮こまり、息が早くなった。

子供たちに群がられ、頭を撫でながら笑う天龍は間違いなく英雄で、私が馬鹿だと付した言葉も信じてしまいそうになる。私の言ったことなんか気にも留めず信じている彼女がまぶしくて、だからこそ——私は深淵に沈む。

私は気づけば天龍の前にいた。背の高い天龍に比べれば、私は子供たちにまぎれてしまう。なのに、私だけが違った。

「なんでよ……」

胸ぐらを掴んだと思っても、突き上げられる力は出なかった。崩れ落ちそうな体で継り付く爪は服越しでも手のひらを傷つけた。私は信じない。だって、英雄なんてものが本当にいるのなら——

「なんであの時いてくれなかったのよ！なんで助けてくれなかったの！」

見上げた彼女の表情は日差し of 陰になって分からない。

「…悪い」

ただその答えだけが降ってきて、私は思い知る。

「世界を救うって言ったじゃない…なのに、なんで…なんで私は——っ」

——救われないの？

絶望が叫びに変わる前に、背後から肩を掴まれて私は地面にたたきつけられた。

「龍田…おまえ…」

「天龍ちゃん、行きましよう」

天龍が私を見下ろす龍田を咎めるが、当人は何も言わずに背を向け、ためらいを見せていた天龍も後を追う。だれもいなくなった港で、私は起き上がることもできずに天を見る。雲一つない空なのに、港の舗装が私の背から体温を奪う。

ずっとあの島で居たかった。おばあちゃんがいなくても、おじいちゃんや2人でただ何でもない日々を過ごしていきたくかった。戦いなどない世界で、育てた野菜の出来や釣果に喜んだり怒ったり。

——それが、たったそれだけが、私の願い

誰もいない港で、私は目を袖で覆う。

奇跡のような時間を、あの島を取り戻したいのなら戦うしかない。

そんなの分かっている。はずなのに…

すべてを奪われた恐怖が、何もできなかつた無力感が否定する。雨でかすむ向こうに見えた深海棲艦の大群が、叶わない願いだと突きつける。

だれも知らない島で生まれた叢雲の世界はあの島だけで、だれも知らない世界だ。だれも分かってくれない世界をかけた、私一人だけの戦い。

「助けてよ…」

か細いそれは、私の耳にすら届かなかつた。

## 第2章 第7話 ライオン

ベッドでうずくまりながら何を言ったのかなんて覚えていない。泊地が壊されたあと、友人が皆いなくなったあとだから、たぶん想像の範囲内の泣き言だ。

自身でも聞き取れなかった声は届いてしまった。頭をなでられて見上げると、左目に包帯を巻いた姉が見えた。

「泣くな。なんとかなるって」

病室のやけに白い背景の中、滲む視界の中でも見て取れるほどはつきりと笑った。深く考えないいつもの姉らしい言葉を、なぜ否定してしまったのだろう。どれだけ戦ってもまた奪われる、失うことしかない世界への呪詛とあきらめ。そんなありふれた悲鳴をわめいてしまった。

「じゃあ——」

たぶん分かっていたのだろうその意味に一瞬、ほんの一瞬だけ、間が空いた気がした。

「オレが世界を救ってやるよ」

「叢雲は…いないか」

日向がいつもは形すらとらない点呼のなかで呟き隣の伊勢へ向く。

「どうする?」

「まあ、ねえ…」

歯切れの悪い返事をしながら思案し出した答えは先延ばしだった。それは優しさなのか、信じているのか。どちらにせよ、それは伊勢たちだからできる判断。自ら立ち直る強さなんて持てなかった身では彼女を信じることなど出来ず、気長に待つ優しさも忍耐強さもなかった。

訓練が終わるまで。その間で何か変わるとも期待していないから、準備もそこそこに槍を持つ。

「早く始めましょ、天龍ちゃん」

西日が閉じたカーテンを照らしだしたのを見て私は一日が終わろうとしていることに気づいた。透けて淡く差し込む光が小さな部屋の温度を上げたせいで気分が悪くなる。私は起こしたからだを再びベッドにあずけた。横を見ると目の前に投げ出された手があった。なんとなく握ろうとしてみても、半端に開いた指は従う意思をみせない。脚から始まった無気力は一日かけてようやく全身に広がった。

…いいか、別に

戦いたくなかった。その願いが叶うんだから。

これでいい。救われないのならせめて幸せな記憶の中にいればいい。暖かい日々があつたあの思い出に。

「…なんでよ」

目を閉じてしまえばいいはずなのに、宙を見る視線が熱くにじんでも、どこかを見つめようとしていた。口に出そうとした諦念は軋む歯に止められる。そんなあがきももう幾分も持たないだろうけれど。

あるいは、と目を閉じて内側に心を向ける。戦いの間、ずっと揺れ動く暗い感覚。すべてを壊して消えようとするもう一人の私が確かにそこにいた。受け入れるなら、澱んだ恐怖も諦観も消えるのだろうか――

コン、と硬いものがぶつかる音がした。宙に浮く焦点がドアに合わさる。

「叢雲、いるんでしよう?」

耳に入って少し間があつてその声が誰のものか思い出す。その間にノックの音は止みドアノブが回される。だが、記憶になくても力ギはかけてあつたようで、がたつく音が耳についただけで、景色が変わることはなかった。ただ、ため息がはつきりと聞こえ、控えめにノブが揺れる気配は感じた。

「入るわよー」

宣言通り、光が差し込んだ。

「あ、あんた…なにしたのよ!?!」

跳ね起きて凝視すると龍田が見慣れない工具を持つてるのが見え

た。

「大したことじゃないわー」

だから何したんだ。結局なんなのか見る間もなくポケットにしまわれ、龍田はことわることなく横に腰かけた。

「なに…しにきたの」

「生意気な子が柄にもなく塞ぎ込んでるって聞いたもんだから、カビの生える前に見ておこうかと思って」

返す言葉がなく、というよりは言葉を交わしたくなって俯こうとする私の体が引き戻される。

「なんて冗談言ってる場合でもなさそうね」

胸倉をつかまれて無理やり目を合わせされた私がどんな表情をしているのかは知らない。でも、揺れる視界からして情けない顔だっただろう。

「寝ぼけてないでとつと目を覚ましなさい」

「あんた…」

硬直からなんとか顔を背けられてようやく声が出た。

「私のこと嫌いじゃなかったの…?」

「嫌いよ」

間髪空けずに返ってくる。

「不幸を人に押し付けているのもこうして不貞腐れているのもあなたのわがまま。そんな子をどうやって好きになれっていうの?…でも」  
うつむく私の胸元はまた上げられて、目を合わせられてしまった。

「あなたが必要なのよ」

たぶん理解できないでいたその言葉に私の視線は縫い留められる。「別にあなたがどうしようがあなたの勝手よ。だから、天龍ちゃんの邪魔はしないで」

「…あんたも本気なの?」

だれも救ってくれないこんな世界で、それでも世界を救いたいなんて。それが馬鹿げてることだって、龍田はきつと分かってる。

「信じるしかないじゃない。だって…」

私を掴んでいた腕の力が抜け、龍田は前を向く。壁を眺める横顔は

ため息をこぼしながらも小さく笑っていた。

「私は救われたんだから」

それは懺悔だったのかもしれない。

「私が泣いてばかりだったから天龍ちゃんはそう言うしかなかったの。誰にも理解されなくつても刀を振るしかなかったの。：私が弱かったから」

重い十字架を背負わせた罪を告げる。そんなに遠くなくて、でももう届かない昔話。それは確かに懺悔で、でも龍田はやっぱり笑っていた。

「でも、もうそんなこと忘れてるのかもしれないわね、天龍ちゃん」

「そんなわけ…」

「ありえるわよ。天龍ちゃん、勢いがいいのはいいことだけど、よく目的忘れるから。ばかみたいでしょう？」

困ったように微笑む龍田の横顔で理解してしまう。もう天龍の本当の願いはとづくに叶っていて、でもそんなこと気づかないままで、だからこそ龍田は救われたのだと。

「：やっぱり、分かんないわよ」

戦う理由、頑張る理由。私には――

「でも、あなたにもいるでしょう？」

誰が、なんて疑問はなかった。

「なんでそんなこと…」

「分かるわよ。だからあなたはこうして苦しんでいるんでしょう？」

諦めてしまえば簡単に終わる話なのに、誰にも理解されない願いにしがみつ়理由。本当は理解してくれる人がいるから、なのだろうか。

「話してみなさい。どうせあなたのことだから会えてもいないんでしょうから」

「おじいちゃん…」

私の小さなつぶやきを聞き終わる前に龍田は立ち上がった。

「だったら早くしなさい。あなたは私と同じ、だから嫌いなものよ」

開かれたドアの前で立ち止まった。わずかばかりの横顔から、最後

の視線が合う。

「これ以上嫌わせないでね」

龍田が出て行ったあと、鍵が開けられたままのドアをゆっくりと開いた。

初めて来た家の呼び鈴を押そうとする手がボタンに触れただけで止まる。ためらうのはもちろん家の間違いを心配してではない。むしろ間違いであることを望んでたかもしれないけど。

「…あ」

ためらいも甲斐なく、力が入った指は勝手に前に進んだ。明るい音が扉越しに聞こえ、人が動く影と扉が引かれる音が上書きした。

「来たか」

もうずっと会ってないような気がしていたのに、変わらない姿に本当の時間を教えられた。下がった姿を追って重い一步を進む。高い廊下もどこかあの家と似ていて、だからためらいが強くなり、それでも足は勝手に動いた。

「いつ振りだったかな」

畳に座る私の目の前にお茶がおかれ、机の反対に座るおじいちゃんは何でもない話を告げた。でも

「なんで…?」

私は

「なんでなにも言ってくれなかったの?」

涙を抑えるのに精いっぱいだった。おじいちゃんは姿勢を正した、と揺れる水面を見て理解した。

「俺がいると知ればお前は無理してでも戦うことを選んだだろう。お前がどうするか、お前の意思で選んで欲しかった」

おじいちゃんの頭がゆっくりと下がる、心配がした。

「だが、いつも言葉が足らなくて、すまない」

私は私で選んだんだろうか…

違う。私が戦うことを選んだ理由は――

「私は…あの島を取り戻したい。おじいちゃんと一緒にいたい」

それは本当だ。でも

「怖い…」

眼前の深海棲艦が脳裏によみがえった。刻まれた恐怖が、守れなかった現実が体を蝕む。

ずっと平気だった。どんなに辛くても苦しくても戦っていられた。でもそれは、私に何もなかったから。なにかを手に入れそのなにかを失った私は、もう私ではいられない。

いつの間にか、抑えることを忘れたしずくが手の甲を濡らした。

「戦いたく…ないよ…」

うずくまり、隔てられたからだの代わりに私の細く震える腕をつかむ。だから必要だった。私が勝手に生み出した幻ではなく本当の声

が。

「戦えって、言ってる…」

私が叢雲ではなく艦娘になるための言葉を。

「そうしたら戦えるから…戦うから――」

たった一言。それだけで良かったのに

「すまない」

私の願いは叶わない。

「…うん」  
分かってた。だから強がりではなく笑顔を作る。私に家族を与えてくれた、そんなおじいちゃんだから私は一緒にいたい。

戦えとは言わない。取り戻すことなど出来はしないと、私は恐怖が刻まれた本能で、おじいちゃんは積み重ねた理性で理解しているから、艦娘ではない私は戦うことも戦わされることもできない。

でも、戦うなどとも言えないおじいちゃんも私と一緒になのかもしれない。諦めたくなくてあがいているから、私はまだ槍を振っている。

「ねえ」

確かめたいことは終わってしまった。おじいちゃんは変わってなくて、私は叢雲のままだった。だから、かつてを思い返しなが

痴ってみる。

「私、みんなに全然勝てないの。木曾とも引き分けが多くなってるし。やっぱり1年やっただぐらいじゃダメなのかしら」

「ふむ…」

おじいちゃんは髭をなぞるいつもの癖で思案する。

「俺が教えられることはもうないんだが…」

「なによ、それ」

「俺は槍に詳しくないからな。だが、お前は十分に強いぞ」

「勝てないって言ってるんだけど」

納得いかないことを断言されても。だけどおじいちゃんは少し間を開けてから私に視線を向ける。

「弱くては勝てないが強いから勝てるとは限らない。だから勝利には価値がある」

「じゃあどうやったら勝てるのよ」

その問いは予想していたとばかりに軽くはぐらかされた。いつも大事なことを教えてくれない。

「もういい」

ふくれっ面で横を向く。何度も繰り返したやり取りがなぜかおかしくて息が小さく噴き出た。おじいちゃんと目が合う。交わす笑顔が懐かしかった。笑いながら下げた視線の端が気になった。いままさら気づくのもなんだが、広い家がある意味有効に使っている。

「相変わらず片付けはできないのね…」

「まあ、それは、な…」

私とおばあちゃんがいくら文句を言っても改善できなかったのだから期待もしていなかったけれど、こればかりは懐かしいとは言えない。

他愛ない話をしながら散らかったものを片付ける。買ったままで放置されている冷蔵庫の野菜を寄せ集めた料理を作ってみる。時間が流れることすら遅らせそうなほど無為で穏やかな夜は、あの島にいられたとしても同じように過ごしていたのかもしれない。

だからこそ知る。あの島で望んでいた幸福を受け止めるにはこの

家は小さすぎるのだと。

名前も忘れられた、何も無い島。なぜ望むのか、諦められないのか  
なんて、私は誰にも伝えられない。この世界でたった2人にしか分か  
らない、孤独な夢。

別れの言葉はなかった。ただわずかに目を合わせて、この狭い家か  
ら出て行った。

## 閑話①

「お久しぶりです、元帥」

確かにずいぶんと時間が経っていたが、同じ言葉を聞いた船の上が本当に久方ぶりだったので、少しばかりしつくりと来ない。

ああ、と領いて席を勧めると亜庭は遠慮もなく座った。敬意は見せても謙遜も遠慮もないふるまいは昔から変わっていないようだ。

「どうだ？提督というものは」

幼い時から見ていた彼女と同じ提督として向かい合っているのは偶然なのか、必然なのか。

そのどちらであろうと、それが彼女にとって良いものであることを願って問いかけた。

「向いてませんね、私には」

願いなど、簡単に叶うものではない。それが努力や苦勞の代価を払っていない無責任な願望ならなおさらだと分かっている、申し訳なさそうに笑みを作る彼女を見たくはなかった。

「出撃していた時は、安全なところからぬくぬくと命令しやがって、とか思っていましたけどね」

顔に出てしまっていたのか、亜庭は冗談めかして笑う。

「出撃していたほうが気が楽でしたね…」

もう戻れない日々を惜しむような、それでもどこか安堵している自分をたしなめるような。ソファアの背にもたれて漏らした息は複雑だった。

残念ながら、その思いを全ての提督が共有するものではない。自ら出撃したことがないのは当然だが、艦娘という存在を1人の少女であるともみなさないものも多い。どちらが正しいのか、目の前の彼女を見ていると分からなくなる。

「君の艦隊だ。どう運用しようが口出しをする気はない」

そのために、提督に任じたのだ。艦娘と接点も持ちすぎってしまった彼女の決断を知りたかった。

「…たとえ、出撃を行わずとも」

暗に、で終わらせるのは卑怯だろう。そう思いなおして口に出した。

「輸送任務ばかりの鎮守府に配属させてもらって、そこまで甘えさせてもらうわけにはいきませんよ」

だが亜庭はあつけらかんと笑う。

「ま、お言葉に甘えて補給部隊として、のんびりやらせてもらいます」昔から見慣れたいたずらっぽい亜庭に安堵を覚えるのは、我ながら安易だと思う。

「で、せっかくお呼ばれたので私からもお話しがあるんですが」

ただのついで、といった軽い口調で身を乗り出した。それでも声はどこか切実だ。

「私の先輩で、かなりどころじゃなく優秀な人がいるんですが。それも指揮官向きで。その先輩、提督に引き抜いてこれませんか？」

「ぜひ、といいたい提案だが、君の先輩ということは当然だが海軍の間だろう？ 優れた人材をそう簡単に渡してはくれまい」

「そこは大丈夫ですよ。先輩、お偉方にかーなり嫌われちゃってますから。くれて言えば一つ返事でもらえます」

そう聞かされると引き抜ける抜けない以前の問題に思えるが。だがその反応を見越していた亜庭は手を振って否定する。

「先輩は真面目過ぎるだけです。あとつれないです。私とは逆に」  
「逆、か…」

そこに含まれる意味を深読みする。

自ら述べるように、亜庭は指揮官には向いていない。能力としてはなく、性格として。

艦娘に向き合わない提督が多いのは、彼女達を理解しようとした提督たちが耐えられなかったからだ。目の前で話していた少女を死地に向かわせる責任に。少なくとも、閑職で、天下り先で行うことではなかった。だから、艦娘を兵器として扱える者だけが提督として残った。

だが、艦娘を軍の所有物として扱うのなら、それは無関心からではなく職務への忠誠からであるべきだ。亜庭のいう者がそうであると

いうのであれば――

「いや…」

漏れた声が独り言にもならなかったのは、これまでの思考を否定したわけではなかったからだ。

艦娘として、提督として艦娘に触れた亜庭が必要としたもの。そして――

――戦えって、言って…

それは大切な家族に与えられなかったもので、亜庭も持ちえないもの。

そう。艦娘とは一人ひとりが違う。だから、正しさも当然のように違う。亜庭には叶わぬ正しさを持っているというのなら――

「詳しく聞かせてくれ」

亜庭に正対し腰を据えた。

誰であろうと変わらない。提督たちが艦娘の命を使う責任を、その責任を負わせた業を、これからも積み重ねていくことには。

「吹雪さん…」

不安を隠しきれないのは仕方ない。だって、初めての出撃だから。私がそうだったのは、もうずいぶん昔みたい。いや、今だって怖いのは変わらない。

私がここにいるのは、みんなのおかげだ。まっすぐに進むことすらできなかった私を助けてくれたみんなの。でも、私で良かったのか、そんな想いがいつも頭をよぎる。だって…

――私は誰も救えない。

どれだけ伸ばしても届かない手。ようやく伸ばせられるようになったと思っても、結局なにも変わらなかった。ここにいるのがあの人なら、――さんなら…

出撃のたびに動悸が激しくなる。また誰かいなくなるんじゃないのか、私は何もできないんじゃないのか？

「吹雪さん？」

これ以上心配させないために、頑張って笑ってみる。私にはまだ、その不安から救ってあげることができない。だから、そんなものなんてないんだと、気づかないふりして笑顔を作る。

私でも、いつか誰かを助けられたらいいな。

そんな、遠い遠い願い。私なんかには無理なんじゃないかと怖くなる。

でも、約束したんだ。

——強くなるって。

だから私は戦い続けなくちゃいけない。この怖さを乗り越えるために。

「大丈夫だよ」

そんないつかじゃない今、震える手を必死に抑えて手を握る。

「私がやっつけちゃうんだから！」

## 第2章 第8話 呼吸

「釣れてるのか?」

もう埃かぶっていた道具を引つ張り出してくることになって指は無意識に動いてくれたから、意外と早く糸を垂らすことができた。失われた思い出をなぞる無為な儀式とは分かっているが。

「釣れるわけないでしょ」

後ろから唐突に声をかけられてもそっけなく返せたのは浮きに意識を向ける意味がないと悟っていたから。まあ、そうじゃなくても聞きなれてしまったプロペラ音で気づいていただろうが。

「釣りをたしなむ艦娘は案外いな。仕事で海の上にいるからだろうか」

「知らないわよ」

仕事でも趣味でも水上機を飛ばす艦娘が唱える説ではないでしように。訓練にも参加しないでこんなところで時間をつぶしている私を咎めに来たのかと思いきや、なにも言わずに防波堤に腰を掛けた。「落ちても助けないから」

堤防の上で折りたたみいすに座る私は一応警告をしておいた。もちろん日向は頷くだけで、左腕を前に伸ばした。ゆつくりと飛んできた水上機が手の甲から肘まで滑走して停まる。地面を滑る設計でもないのに、器用なことだ。

「海は広いな。私たちとて艦装をつけなくてはこうして脚を投げ出すことすら命がけだというのに」

何を言いたいのか、日向は案外分かりやすい。

「あんたはなんでこんなことやってるの」

まさか世界を救えるとは思っていないだろう、と私も言外に伝える。ふむ、と思案するようなしぐさをするが特に間を開けずに答えが返ってくる。

「私と伊勢は剣道をやってた。といっても、伊勢とは全国大会で戦ったこともあったものの、その程度の認識だったが。艦娘になったときにもう竹刀を握ることもないと思っていたところに伊勢がいた」

「あんたたちの思い出話はいいわよ」

「まあ、そういうな。結局あいつのおかげで剣道が続けることはできたが、なにぶん2人だけだ。どうしても限界がある。そんな行き詰まりの中、君たちが来てくれた」

日向は少しだけ振り返った。片目だけが合う。

「私の願いはもう叶っている。あとは守るだけだ。しいて言うなら、私と同等程度には強くなって欲しいものだが」

「悪かったわね」

反射的に返してしまっただが、日向は軽く笑って流した。

「君は十分に強い。ただ——」

「なによ」

「いや、やめておこう。元帥が言わないのであれば私が口出すことではないからな」

驚きが思わせぶりに対する不快を上回った。

「なんで知ってるのよ？」

「分かるさ。君も元帥も分かりやすい」

日向は答えになっっていない答えを告げ、水上機を指先から飛ばす。

水上機の揺れが安定したのを見て立ち上がった。

「君がどう思っているのかは知らないが、私たちが刀を振るなんて無理を通せているのは君の航行技術のおかげだ」

「そんなこと——」

「分析が進み、艦娘が容易に沈まなくなっただけで1年程度。だが、その間にも死線を超える技術は失われてしまった。君には信じられないかもしれないが、戦場であるという実感はもうない。私自身を含めてな」

天龍たちの戦い方はそれとはまた違うのだろうか、と小さく付け足し、相変わらず浮きを見つめている私とすれ違う。

「生き残る条件など私には分からないが、君は生き残ったから強い。その強さを学ばなくては刀で戦闘など出来はしないさ。私たちは皆、君がこの部隊にいてくれて良かったと思っっているよ」

遠ざかっていく気配を聞きながら、当然その足音とは関係なく揺れる浮きを見つめる。でも、日向の言葉を素直に受け取る心境は私には

なかった。

連続的な風を切る音が途切れた。夜の湿った空気を通して、肩越しに振り返った彼女は私を見た。

「なんだ、もう寝てなくていいのか？」

「別に風邪をひいてたわけじゃないわよ」

「気分が乗らないときってのはあるもんだろ」

そんな経験などなさそうな天龍は再び素振りを始めた。鋭い音とともに散った汗が月明かりを反射する。今日だって訓練があつたはずなのに、単調な動作を上気するほど繰り返す。ただそれだけなのに、それだけで伝わる。

「あんだ、本気なのね」

「なんだよ、急に」

現実を知らないわけじゃない。でも、虚勢でもない。それでも世界を救いたいと願い、信じている。その方法がこうしてただ剣を振ることしか思いつかなかったとしても、叶えられると。

「それだけは謝るわ」

たった一言告げるだけなのに前置きが必要で、深呼吸が必要だった。

「ごめん」

「なんだ、そんなことか」

私の心臓の鼓動など聞こえるはずもなく、天龍は振り返るところか手を止めることもせずにあっさりと返す。

「お前に否定されたとき、少し嬉しかったんだぜ」

「…なによ、それ？」

「誰も相手にしてくれなかったからな。笑われてたときはムカついてもんだが、いつの間にか何も言われなくなっちゃった」

剣を担いだ天龍は憤慨を表したかったのか鼻で大きく息を吐く。

「お前はちゃんと見てくれたからな。あとはお前が文句言えねえくらい強くなるだけだ」

「そんなんじや…ないわよ」

私だつて笑いたかつた。ただ笑えなかつただけ。私が信じきれない願いを口にする天龍を。

振り下ろされる剣を眺める。誰にも理解されず、あるいは馬鹿にされても振り続けた剣筋は私が持つ槍よりもずっとはつきり見えた。ずっと龍田と2人で鍛錬を続け、いまは必要とされ6人になった。

…それでいいじゃない。

でも、駄目なのだろう。諦められないだけの私と、諦めないで剣を振る天龍。あまりにも違うから

「お前はなにやりたいんだ？」

「言つても分からないわよ」

誰もが同じようにできると疑うことを知らないその問いを拒否する。

「…あんたに理解できるとは思えない」

「そうか」

天龍は肩をすくめた。

「ま、全部龍田のおかげつてのもしやくだしな」

「…なんで知ってるのよ？」

「なんでつてか、分かるだろ」

まただ。どいつもこいつも簡単に口にする。私はなんにも分からないのに。

「あいつの言うこと真に受けるんじやねえぞ。オレが勝手にやってるだけだ。…まあ、お前らにも迷惑かけてるかもしれないけど」

少しばつの悪そうにはするが、変わるつもりはないのだろう。

「龍田と約束したんだ。やってやるしかないだろ」

あつさりと吐く決意に、私はようやく思い出す。

私も誓つたことを。暖かさや優しさに包まれながら、この海を取り戻すことを。

誓つた、はずなのに…

——彼女が諦めたときに私も諦められるのだろうか？

なんて惨めなんだろう。しがみついている望みを手放すことすら、

誰かにすがっている。

そんな日が来るのは、ずっと先だったらしいのに――  
半端な私は半端な願いを、それでも切実に願った。

## 第2章 第9話 Howling

「なんでこうなるのよ」

「まあまあ、今回は索敵に時間割かないといけなくてさー。一応おんなじ海域にいるわけだし、良いでしょ?」

抗議の目線を伊勢に、不満の指先を天龍に向けるが、どちらも笑って流すつもり満々だった。

「ってことだ。仲良くしようぜ」

「そうねえ、仲良くしましょう」

天龍型に挟まれそうになったところを全力で逃げ出す。

「いやよ!なんであんなたちと3人だけなのよ!私じゃなくて木曾で良かったじゃない!」

「俺を巻き込むな」

結構真顔で抗議される。ほら、あんなだって貧乏くじだと思ってるじゃない。

「じゃ、それぞれで細かいところを打ち合わせってことで」

伊勢が手を挙げて別れを告げる。背を向けて逃げるときに木曾だけは少しこちらを見る。

「大丈夫なのか?」

「いいじゃん、おもしろそうだし」

「ふむ、私も伊勢と同意見だ」

聞こえてるぞ、おまえら。文句を言う気力も失せてただうなだれる。

「心配すんなって。もしものときは助けてやるぜ」

私の気持ちなど察してもらえとは期待していないのでこっちの文句をやめておく。察してくれてはいそうな龍田も基本敵だと思っておいたほうがいい。

私はいろいろ諦めて肩を落とす。こうして、出撃は続いていく。先など見えなくても、何も斬れなくても、否応なく続いていくのだと思っていた。

前後から飛んでくる砲弾をかわした。乱戦はいつものことだ。そうなるように戦っているようなものだから。飛び道具を使わない分、同士討ちの恐れなくともいい。喧噪の中、電探の端に映った影。深海棲艦の第二陣、戦艦2隻を含む本隊だ。私だけが気づいてしまったそれへ視線を向けてしまった。

乱れた感情が海の上でどれほど危ういか、そんなの言われるまでもなく知っていた。ましてや飛び交う砲弾をかいくぐつての近接戦闘だ。知っているから、足が止まる。その一瞬――

艦娘と深海棲艦の決定的な違い。自沈も辞さない深海棲艦が近距離から放った魚雷は、扇状に広がるまでもなく無防備な私の側面に迫る。

0. 1秒の悪魔――この後起こる結果を、私はどこかで受け入れていた。

「叢雲っ！」

叫ぶような呼びかけに目を開けた。焦点の合わない視界にもう慣れてしまった背中が入り込む。

そう、いつだって

――そんな日が来るのが、ずっと先だったらいいのに――  
私を包むはずだった炎が、彼女たちの影を私に伸ばす。

私の願いは、いつだって叶わない――

「天龍・龍田！」

爆炎が消えるのも待てずに近づく。

「おう」

最悪の予想を見るのが怖くて一瞬浮く視線が戻る前に声が耳を揺らす。でも視線は足元まで下がってようやく止まった。

「元氣そうじゃねえか」

仰向けに倒れても艤装が生み出す浮力でかろうじて水面に浮かぶ天龍は私を見上げて笑った後、苦痛に表情をゆがめる。傷の様子は見えないが脇腹から血が流れていた。命の危険を考えるくらいには。

…考えても無駄ね

たとえ致命傷ではなかったところで、もう深海棲艦が迫っていた。さつきまでの威力偵察部隊とは違う、戦艦もいる本隊が。龍田も天龍ほどではないが脚が負傷した。まともに動けるのは私だけ。駆逐艦1隻。

「やつとだ…」

目を閉じ呟く天龍に合わせて私の視界も消える。そう、終わるんだ。やつと——

「やつと魚雷は斬れたぜ」

明るくなつた視界のまんなか、小さく手を掲げる天龍が映つた。

「当然爆発しちやつたけどねえ」

「分かつてたんなら止めるよ」

「止めたって聞かないでしょう？だから付き合うわよ、これからだつて」

立ち上がった龍田を追うように天龍が立ち上がるうとするが、震える膝では体を支えきれずに崩れ落ちる。それでも膝に手について持ち上げ、口の端から流れる血を拭う。

「次はあいつらか。魚雷の次にはちようどいいでかさだぜ」

「…ふざけ…ないですよ」

うつむくしかできない私が、一番震えていた。

「分かつてるでしょ!?戦えるわけないじゃない!剣なんて意味なかった!世界どころかなにも取り返せないで終わるの!ここで死——」  
「だろろうな」

怒りも焦りも、もちろん後悔もなく、静かに肯定する。剣を担いだ背中しか見えなくても、いつものように不敵に笑った気がした。

「でも仕方ねえだろ。ずっとこれで生きてきたんだ。今更どうしようもねえさ」

——ああ、やつぱり

私の願いは叶わない。

彼女達が諦める日はやつてこない。諦める方法が分からないから。現実を知っても無力さを突きつけられても誓った言葉にとらわれ続けてあがくことしかできない彼女達は惨めだ。でも——

「叢雲、あなたは逃げなさい。伊勢たちと合流する時間ぐらいはあるでしょうから」

「そんなくらはなんとかできつか。ほら、頑張った甲斐があったらろ？」

世界を救うと誓った彼女たちは笑う。私なんかを守れることを誇って。

「ふざけないでよ…」

——認めない。

やっと分かった。天龍と龍田が望んだものは、私と同じ。だれにも理解されないほどちっぽけで、でも手に届かないもの。

それでも私と違って歩みを止めなかった彼女達の夢の終着が、こんな私独りだなんて。それで満たされるなんて、認めない。

胸の奥が熱くなる。暗く燻っていた炎が赤熱する。

天龍を押しつけて深海棲艦の前に立つ。すべてを奪われたあの日から初めて、敵の姿をにらんだ。

認められないなら——

「やってやるしかないじゃない」

溢れ出る光が私を包んだ。

内なる獣が今、目を覚ます。

## 第2章 第10話 Reckless fire

怒り。

それが私を突き動かすものの名前だった。

すべてを奪い、また奪っていこうとする深海棲艦。船の亡霊か大戦時の怨念かなんて知ったことじゃない。それが何であれ、我が物顔で海を支配する奴らを、私たちの前を遮る愚か者どもを許すわけにはいかなかった。

何も知らないくせに分かったような口を利く日向も、旗艦面している加減なことしか言わない伊勢も。嫌味で陰湿で勝手に自分に重ねて押し付けてくる龍田も、人の気も知らないで馬鹿騒ぎする天龍も。木曾は：まあいいやつだけど。

何もかもが嫌いだった。どれだけ努力を重ねても思い通りにいかないやつがいる世界が、そして何より

うるさいのよ、私（アンタ）——

叶うとか叶わないとか、勝手にぐちぐち言って当たり散らかす私も。勝手に傷ついて塞ぎ込む私も。居もしないとわかってるくせに英雄を斯う私も。ろくに勝てない弱い私も。

私は私が大っ嫌い。

だけど、それすらもどうでもいい。

私の内側、出てくる度胸もない癖に騒ぐもう一人の私に呼びかける。そいつが何かなんて興味はない。すべてを覆す力があるというのなら——

——黙ってそれをよこしなさい

あの島を取り返すと誓った。世界を救うと誓った彼女を最後まで見たかった。できるかどうかじゃない。そう願ってしまったのだから——

「やってやるしかないじゃない」

私に力を与えるために燃え上がった炎は光となり、ほんの一瞬私を包んだ。

「叢雲…」

「なによ」

天龍が倒れているのは——私が押したせいか…。とにかく、今は最高に調子がいいんだから水を差さないで欲しい。

「黙って座ってなさいよ。とつとと片付けてくるから」

返事なんて待つてられない。踵を返して加速した。

「——っ！」

砲戦距離に入つてようやく私は妙に高揚していたことに気づいた。急速に冷えていく神経が、駆逐艦が受けるにはあまりある砲弾の脅威を告げる。ひとたび見えてしまえば勇敢ではいられない、鮮明な放物線。だけど——

——いけるんでしよう？

もう一人の私に問いかける。でも答えるのも私なんだから返事を待つ必要なんてない。低い体勢で全速前進。着弾点を一瞬で抜き去る。後ろ髪を散らす衝撃波が心地よかった。駆逐艦の域を外れた出力に不思議と困惑はない。減速もせずに砲撃を返す。私の速度を含んだ偏差射撃はすべて目標の真上に降り注いだ。深海棲艦は反撃してくるが、なんの工夫もない砲撃や雷撃なんかじゃ減速すら必要ない。

「どれだけここにいて思ってたの!？」

命がけの戦場で誰よりも生き延びてきた。だからどんな弾道だつて読める。

実戦でも訓練でも誰よりも砲撃をしてきた。だからどんな目標だろうと当てられる。

惨めでも情けなくても、私が艦娘として歩んできた道は確かにここにあった。だから——

雷撃をかわすために切り返した目の前に砲弾が迫る。逃げ道などない飽和攻撃。許された一瞬で息を吐き切った。急速な脱力に両腕の感覚がなくなる。腰下まで下げられた槍がゆっくりと浮き上がる。

たった1年。あまりにも短い時間の中でただあの人に追いつきたくて振ってきた。大っ嫌いな私でも、それだけは胸を張りたい。だか

ら――

「このくらい、斬ってやるわよ！」

目の前を閃光が駆け上がった。頭上で脳を揺らす衝撃が弾けた瞬間で腕に力が入る。槍の先で受け止めた鉄塊の重さに骨が軋んだ。それでもこの腕に染みつけた振り払いは止まらない。金属同士が削りあう鈍い音を上げながら高々と掲げられた槍は、戦艦の砲弾を両断した。

両脇を抜けるかまいたちに息を奪われながら、天を向く穂先を引き戻す。柄の最端を握り、重力加速以上に振り下ろす。触れ合った瞬間、火花が散った。

「――クソっ」

遠心力を最大限に使った振り下ろしも、ル級の盾のような装甲には傷をつけるのがせいぜいだった。今回は見逃してあげる。弾丸を押し返してしびれた腕で正面突破するほど天龍にほだされたわけじゃないもの。でも次は――

槍を振り上げるのを遅らせて作った間で懐に潜り込む。槍の先端は水面下を、ル級の装甲の下を通過した。その瞬間、手首を返して押し上げる。水の抵抗から解放された穂先が水流を巻き上げ、深海棲艦の首をとらえた。

「次は真つ一二つにしてやるから」

舞い散る透明なしぶきにどす黒い液体が混じる。これから散々味わう感觸の1回目を掌に残しながら崩れゆく深海棲艦を見つめた。だが残心の時間は一瞬もない。もう1体の戦艦、夕級の姿を背後に見て振り返る、がもうすでに装填の終わった主砲が私に向けられていた。巨大な砲口が私を呑み込む。疲労で顔を出した本能がいつも私のように脚を退げようとした。それで沈むことは防げるだろう。

悔しいけど、天龍は正しかった。退けば私は私しか守れない。何かを救おうとするのなら、絶望を塗り替えたのなら――

うねりを上げたスクリュウが海を掻き回す。乱暴な振動で膝の震えをかき消した。

――私たちは前に出るしかない。

耳には届かない声を上げ、がむしやらに槍を突き出す。型もなにもあつたものじゃない切っ先に体重のすべてを託す。

ガギンツ

砲口に、その先の砲弾に到達した槍は鈍い音を立てて砕けた。だが、耐えられなかったのは巨大な力を放つ寸前だった砲門もだ。次の瞬間に起きる現象の覚悟だけはできる空隙ののち、体勢を整えられなままの私は爆風に吹き飛ばされた。

「——チツ」

数メートル。流れに逆らわず海面を跳ねながら勢いを殺す。何度か行った制動の未停止し、流れ落ちる血に視界を妨げられながらも敵を見据える。

これが駆逐艦と戦艦の違いか。私よりもダメージは大きいはずなのに継戦の意思を湛えたタ級が反対の砲塔を構える。魚雷も槍も失った私はもう対等に戦える装備を持っていない。残念だけど——

「……までね……」

掲げていた主砲を下ろした。かろうじて残っていた槍の柄が手から離れて小さな水音を立てる。よくやった。もう十分だろう。そう言い聞かしても、悔しさがにじみ出た。

これだけでも、実力以上を出しても、届かない。今はまだ——

「私だけで片付けたかったんだけどね」

私にとっては耳慣れたプロペラ音にようやく気づいたタ級はとっさに見上げるが、もう防御姿勢をとることもできない。急降下のさなかに切り離された爆弾が叩きつけられ、爆炎に呑み込まれる。

〈みんな無事!?!〉

撃墜を確認した伊勢の声が、数回にわたる至近距離の爆発でさすがに使い物にならなくなった私の耳をむりやり揺らした。通信を聞いてから最速で来たのだろうか、

「遅いのよ」

それだけ返して、揺れる足元を制御して引き返す。

「なんだ、それ？ 恰好も違うじゃねえか」

「知らないわよ。改二ってやつじゃない？」

どうでもいいことを気にする、倒れたままのくせに偉そうな天龍を見下ろしながら手を伸ばす。

「あんだ、訊いたわよね。私の夢」

「…なんだ、教えてくれんのか？」

掴もうと出した天龍の手を弾く。

「言っても分からないわよ」

そう。これは私とおじいちゃんだけの願い。ちっぽけで誰も理解できないもの。でも――

「言っても分からない、地図にも名前が載ってないような小さな島」

――こいつは笑わない。それで充分だ。

「私はその島を取り戻す。私のすべてをかけて、必ず。あんたも手伝いなさい。そうしたら――」

これは契約だ。だから私は彼女に釣り合う条件を差し出す。

「ついでに世界ぐらい救ってあげるわよ」

「上等だ」

天龍はいつものように口角を上げて手を合わせる。契約が交わされた音と共に天龍を引つ張り上げた。

「おいっ！」

つもりだったが、急に力が抜けた私は逆に天龍に引つ張られた。なにも抵抗できずに天龍に倒れ掛かる。私にはない柔らかい感触に支えられる。

「あらあら、仲良しねえ」

「うるさいー」

2人の笑い声が聞こえる。腹立たしいが、雲一つない空がどうしようもなく暑かった。

私が触れたのは小さな小さな奇跡。奇跡の脆さを知って私の無力さを知っても、私は再び求めた。だからあがくしかない。私の命を燃やして。

「おおっ！」

伊勢がのんきな歓声を上げるが、気を取られずに槍を振り下ろす。日向が差し出した竹刀の手元をとらえ、板の床にたたきつけた。息を切らしながら槍の先を日向の眼前に突きつける。

「これで満足？」

高揚と酸素不足のせいで荒れる心臓の音が鼓膜を揺らす。

私がおじいちゃんに教わったのは防御の槍術。戦うことを強いられた私を災いから守るための技だ。だけど、甘えるのはもうおしまい。これからは勝つための槍に、攻めこむ技に変えていこう。これは私が選んだ戦いだから。そして――

「私は島を取り戻す。あんたらがどう思おうがどうでもいいわ。協力してもらおうよ。こうしてあんたの願いとやらも叶えてあげたんだから」

私たちは仲間だ。同じ夢なんか見れなくても自分勝手な夢のために肩を並べる仲間、そんな関係だからこそ私たちは遠慮なく理想を押し付けられる。

「なるほど、いいだろう。…だが」

日向が竹刀を拾い立ち上がる。

「本気を出す程度にはなってもらわなくてはな」

「んえ――？」

日向の腕が消えたのは見えた。

「――つた…」

額の痛みに目を開けると天井が見えた。そこでようやく目を閉じていた、どころか意識が飛んでいたことに気づく。

「…起きたか」

横を向くと大の字になって仰向けになっている木曾がいた。私も同じポーズだけど。

「なんであんたものびてるのよ」

「うるさい」

そっけなく返されたが、少し顔を傾けた木曾と目が合った。

「ふっきたみたいだな」

控えめな安堵が覗いた。ふっきれた、なかなかしつくりくる表現だ。

「そうね…」

高い窓の向こう、青空に描かれた雲が流れていくのを見つめる。

私は弱くて情けなくてかつこ悪くて、自分勝手に誰かを傷つける。

そんな私でも――

少しは進めてるのかな？

馬鹿な事を聞いてしまった。だって、私がどんなにダメだったとしても、笑って頷いてくれるに決まってるのに。

額をなでる日差しに懐かしい手のひらを思い出しながら、そつと目を閉じた。

### 第3章 第1話 ソラゴト

あいつに再会してから数か月後、人類の反攻作戦が始まろうとしていた。淡々と準備が進められていく中、私はまたあの鎮守府に戻ることになった。

戦いが始まるのが少しずつ現実味を帯びていっても、どこか穏やかで平和な時間が流れる。これが現実なのは間違いない。こんな時を夢見たことなど1度もないのだから。

——私のすべてをかけて、取り戻す

そう誓ったのももうずいぶんと前の話。

だからこれは私がそんな日々で、奇跡を諦める物語になるのだろう

はあーっ

私自身びっくりするくらい大きなため息が出た。それに応えるように眼下の浮きは揺れるが、沈んではくれない。

鎮守府前、艦娘が利用する港の端で趣味というより習慣になった釣りをしていた。釣る魚自体がないと思っていたが、少しずつ戻ってきているみたい。島でおじいちゃんに教わるまではやったことがなかったから深海棲艦が現れる前がどんなものかは分からないけれど。そんなわけで意外と釣れるのは分かっていたし、現に前半は釣れていた。もつとも、調子が出ない原因は分かっている。

「むらぐもぢゃーん！」

その原因、堤防で騒がないという鉄則をもう忘れやがったあいつが涙目でかけてくる。

「糸が絡まったー！」

「そんなくらいで騒がないですよ…」

重い腰を上げる。あいつこと吹雪の前に立つと先ほど以上に大きいため息が出たけど、能動的に出したから今度は驚かない。

「…日本語は正しく使いなさい」

糸が絡まった、ではなく糸に絡まった、だ。どうなったらそうなる

のか分からないけど、上半身が動かせないほど縛られている。知恵の輪を解くつもりはないから適当なところで切って解放してやる。

「ありがとー!」

「次絡まっても助けないわよ」

ここにいるのは吹雪だけじゃない。4番艦までの吹雪型——私を含めると5番艦まで——つまりはこの鎮守府にいる吹雪型全員がこの堤防に集まっていた。

私たちの部隊は吹雪がいる鎮守府に移設された。といっても場所が変わっただけで、どこにも所属していない特異な部隊にはかわらないけれど。これから始まる作戦のためだが、反撃の切り札とかおだてられて意気込んでいるのは相変わらず天龍くらいだ。

場所が変わっても訓練内容はそう変わるはずもなく、空き時間はいつものように釣りをしていたのだが、それを嗅ぎつけた吹雪型が夕飯を手に入れようと意気込んで乱入してきて今に至る。

「そもそも初心者がほいほい釣ろうとするのが甘いのよ」

私はいつかの私を棚にあげて講釈をたれる。ただ糸を垂らしておくだけに見えてやってみると意外と奥が深いし経験値というのは確かにある。吹雪はまず忍耐を身に着けることから始めないといけない。

「でも深雪ちゃんはいっぱい触っていっぱい釣ってるよ?」

なんとも伝わりにくいが、様子を見ていた私には分かる。深雪は食いつきが悪いとすぐ糸を上げて仕掛けを変えたりしている。単に我慢できないだけかもしれないけど、それで釣れているのだから大したものだ。

「才能があるのかしらね」

おじいちゃんが言っていた工夫するタイプとは深雪みたいなのを差すのだろうか? 私にはどうにもうまくいく気がしないのだけど。

「へー、私もやってみようかな」

「…次は助けないって言ったわよね」

それでいいなら好きにどうぞ。

「吹雪ちゃん、叢雲ちゃん」

堤防の先から手を振る影が見えた。…静かにするってルールは完全になかったものにされている。

「白雪ちゃん…あれ？初雪ちゃんは？」

「帰りましたよ。自分が食べる分はとれたからもう寝るって」

「えー！」

吹雪は驚いているが、私は泣きたい。もしかして私の釣果は0の吹雪の次？

これでもずっと続けてきたプライドがあるのだけれど、今日はアウェーだということでなんとかそのプライドを守る。

「わ、私も頑張る！」

吹雪がどたどたと走り去る姿を白雪と2人で見送る。今度は手を煩わされることがないよう祈りながらまた海を眺める作業に戻ると、白雪が隣に腰を下ろした。

「あんたはやらないの？」

「私、あの虫が触れなくて…」

苦笑いする白雪に共感と癒しを覚えた。そう、未知の節足動物を平気で触れる年ごろの女の子のほうがおかしい。…私は単なる慣れだから。

「別のエサもあるわよ。次は容易しておくわ」

私も続けるうちに引き出しは増えた。ハードルが低い選択肢は用意できる。

「ありがとうございます。…あの、叢雲ちゃんとお話したいなって…」

「な、なによ？」

穏やかな感じに慣れてないせいで、改まって言われると妙に身構えてしまった。

「吹雪ちゃんとは昔から仲良しだったんですね？」

「ただの知り合いよ」

「そ、そんなに否定しなくても…」

どうせ吹雪が勝手に言っているだけだろう。同型艦のよしみで話したりもしたが、そもそも吹雪は誰とでも仲が良かった。そして私は

誰とも仲良くはなかった。艦娘の入れ替わりが激しかった当時から少しでも面識があった艦娘と今一緒にいるのは、すごいことなのかもしれない。私はともかく

「あのへたくそが、ねえ」

なんともいえない感慨が漏れた。今のは年寄り臭かった、反省。

「へたくそって、吹雪ちゃんが、ですか？」

幸いにも白雪には言い方より内容を気にしてくれた。というか、そこに驚いたことに驚く。

「あそこまでセンスないのも貴重ね。1年たつてまともに航行もできない艦娘がいるなんて信じられなかったわ」

それですますます驚く白雪を見るに、今はちゃんとやっているようだ。ちよつと待っている白雪は控えめにほほ笑む。私、結構白雪のこの表情が好き。私の周りにいるのは面倒な奴らばかりなので引つ張られていたけど、本来はこつち寄りだと思いださせてくれる。

「だから優しいのかな…」

「優しい？」

「吹雪ちゃん、すごく丁寧に教えてくれるんです。失敗しても励ましてくれるし、できないところがあるとずっと練習に付き合ってくれるし」

吹雪が教える側にいるなんて、前にも聞いたがどうにも想像できない光景だ。だがそれは過去の技量的な印象に引つ張られているからで、そこさえなければイメージできそうな気が…しないでもない。

「吹雪ちゃんはどんな感じだったんですか？」

別に仲良くなかったと言っているのに。ここらへんはやっぱり吹雪型な感じがする。

別れた朝を思い出す。たくさんのおいも命も背負って、それでも笑っていた吹雪とそれに気づけなかった私。ようやく気づいたあの朝の感情を言葉にするなら――

「憧れ、てたのかしらね、私」

誰かの気持ちに気づこうともせず、ただ私は私の不幸を振り回すしかできなかった。辛くても笑っていられる、私が持っていなかった、

たぶん今でも持っていない強さ。その強さがあつたのなら、誰も傷つけないでいられたのだろうか——ん？

私、今むちやくちや恥ずかしいこと言わなかった？

全力で振り向くと白雪は嬉しさと慈愛に満ち満ちたほほ笑みを湛えていた。見ているこっちも暖かい気持ちになる——じゃなくって！

「あ、あんた…わかってるでしょうね！」

「え？」

やっぱりわかってないじゃない！

「さっきのこと、誰にも言うんじゃないわよ！」

「さっきのって…吹雪ちゃんにあこが——」

「うわああああー!!」

何てことを口にするんだ、こいつは！

「べ、別に悪いことじゃないですし、吹雪ちゃんに言ってあげればいじゃないですか…」

良くない！私の汚券、いや、生存にかかわる。私のプライドなんてどうせ分かってくれないので、首元をキュツと占めて念を押す。

「とにかく…忘れなさい！」

「ち、近い…それよりも苦しい…」

白雪が必死に首を上下させるのを見て手を放す。ああ、疲れた。私も深呼吸をして息を整える。こっちの騒動を知ってか知らずか…知るわけではないが、小さく見える吹雪が歓声を上げた。

「深雪ちゃん！見て見て！釣れたよ！変な魚だけど！」

変な魚ってなんだ。これだから素人は困る。

「やったな！紫と黄緑のしましまだけど、食えんのかな？」

…変な魚だった。そして食べられないと思う。

生態系が戻ってきたというが、深海棲艦の影響が突然変異が結構見つかっている。そんな中の1つだろう。ちなみに深海棲艦は食べられたものじゃないらしい。らしい、であってももちろん私は食べたことがない。食べる気にもならないし。だが食べた人はいるということ。で、人類の逞しさというか探求心というかには驚かされるばかりだ。

「司令官に食わせようぜ！」

「えー、おいしいのかな？」

少し物思いにふけっている間に話がとんでもない方向に進んでいく。聞かなかったことにしたほうがいいのかしら？

「そうだ、金剛さんにお願いしよう！金剛さんのフィッシュアンドチップスだったらどんな魚もおんなじ味になるから大丈夫だよ」

…それは大丈夫と言えるのだろうか？

なんだかんだで5人分は獲れたので引き上げる。その午後、私は司令官に呼ばれた。

### 第3章 第2話 Jam Tomorrow

ノックをするとすぐに応えがあった。ドアを開けると司令官がいた。結構若いのもあって、親しみやすそうな分威厳はない。私が前にいた鎮守府の司令官と比べるのも酷な話だとは思うけど。そんな司令官は今冴えない顔でおなかを抑えている。

「ああ、金剛が作ってくれるフィッシュアンドチップスはどうも胃に優しくなくてな」

最悪な事態を想像した私の表情を読んでは、苦笑いで説明をしてくれる。

「そう、よかった…」

「よくはないだろう」

認識が違っているが、クーデターまがいの暴挙も未遂に終わった今、わざわざ教える必要もないだろう。知らぬが仏ってやつね。

「君が来てくれたから吹雪は毎日楽しそうだ。ありがとう」

「別にあいつはいつでも楽しそうじゃない」

なんとも直接的に感謝を述べられても困る。照れたわけではないが、言われる筋合いがないのは事実なので否定してしまった。それを受けても司令官は頷くだけだ。前の鎮守府の司令官が冗談どころか笑いもしない人だったので違和感がすごい。

「さて、来てもらった理由だけど、そろそろ部屋も決めないと、思っ  
てね」

まあ移設の手続き関連だとは予想していた。今、私たちの部隊は来客用の部屋を使っている。だが所属とは違ってこの鎮守府の指揮下に入るのだから、いつまでも外様ではられない。

「君には吹雪型と同じ部屋に入ってほしい」

「ええ、いいけど…」

艦娘の部屋割りは2人部屋が多い。プライベートな時間が欲しい私としては今の1人部屋がなくなるのはうれしくないけれど、それは仕方ない。だが、今吹雪型は私を含めて5人だったはず。別に3人部屋も珍しくはないものの、吹雪型、という言い方が気になった。私が

セリフ回しで引つかかったとき、大体当たる。その予感が悪い方向だったら「大体」は「絶対」に変わる。

「これは吹雪からの提案なんだが……」

司令官はどうも歯切れが悪い。

「叢雲、君には拒否権がある、とだけ言っておこう」

もうこれは勘がいいとか予感なんてレベルでなく、良い方向の話なわけないじゃない。

「叢雲ちゃんはだれといっしょに寝る？」

食堂で夕ご飯を食べ終わった私はウキウキステップの吹雪に手を引かれて廊下を歩いている。司令官の言い様に怯えて足取りが重い、落ち着いて考えれば入居する部屋に案内されているだけ。恐ろしいことなんて何もないでしょう？

「誰って、私は空いてる部屋で——」

「着いたよ！」

こいつ……

人に話を振っておいてこれだ。まあ、私からの指定はないのだからこの扉を開けた先にいるのが私の同居人だ。

「お、来たな」

「いらっしやい」

深雪と白雪がいた。なるほど、この2人か。別部屋に吹雪と初——

「あれ？初雪ちゃんは？」

「こたつに潜ってるぜ」

深雪が部屋の隅のこたつに目を向ける。いるのか。なら今夜は集まって歓迎会でも——いや、目をそらすのはもうやめよう。壁の両側に2段ベッドがあることを入っていたときには気づいていた。つまりここで4人過ごしている。

「さすがに3段は無理だぜ」

「うーん、ここに置けるかな？」

そのうえベッドをもう1つ入れようと画策している。もう私がここに入れられることは決定事項のようだ。

「叢雲ちゃん、ベッドは明日にして今日は一緒に寝よう」

「ちよつと待ってよ！なんで1部屋だけなのよ！ろくに荷物も置けないじゃない！」

「だって、みんなでいたほうが楽しいよ」

「服とかは隣の部屋に置いてるからな」

動じないどころか私の言うことを理解しかねるとでも言いたいかのように平然と答えられた。つまりは部屋不足とか冷遇とかではなくわざわざ同じ部屋で詰め込まれて暮らしているというのか。プライベートの時間を惜しんでいた数時間前の私に届かない警告を告げる。私の姉妹艦はプライベートの概念すらないぞ。

「まーまー、そんな顔すんなって。結構便利だぜ」

「べんりい？」

こんなすし詰め状態でいいことなどないだろうに。隠すつもりもない疑念をうけて、深雪はほら、とこたつの隅を指さす。

…これが本当の現実逃避というのか。意図的にはなく本当に視界に入っていないなかった、積み上げられた布の山。いや、本当は私には分かっていて。私はやらないけど、女所帯では面倒くさがって適当に丁重にしまわれないことも多いと聞く、下着だ。重ね重ね言うが、私はちゃんと畳んで収納している。

とにかく、ここにあるのは1人分の量を超えている。つまりは…

先の思考を脳が拒否するが、こたつから手が伸びて山を崩した。雑につかまれた下着がこたつに吸い込まれ、数秒の後に選別から外れたものが吐き出された。

「いやっ…」

無意識に出た小さな悲鳴など聞いちゃくれない。

「叢雲がいたら洗濯当番が5日に1回になるな」

「いやあぁーっ!!」

気が狂いそうになるのを叫び声でなんとか発散する。端から見ればすでに狂っているみたいだが、外聞なんて気にしてられない。

先ほどからなにも言わない白雪の肩を掴む。彼女なら、彼女だけは分かってくれるはずだ。

「こんなのおかしいじゃない！思春期の乙女の生活じゃないわ！そう思うでしょ！ねえ！」

私は間違っていないはずだ。なのに、白雪は困惑しながらも小さく笑うだけ。

「もう…なれちゃいました」

視界が真っ暗になり、私は膝が崩れる音を聞いた。

もう…なれちゃいました

消灯時間の過ぎた暗い部屋、白雪の声が脳内で反響する。ベッドの上で横たわる私の隣で吹雪の穏やかな寝息が聞こえる。白雪すら頼れない今、小さな寝息すら暗闇に潜む魔物の気配にしか思えない。

あの白雪の諦めがこもった表情…いや、あの姿は白雪じゃない。未  
来の私だ。ここにいるうちに諦めて受け入れていって、最終的に女子  
力のかけらもない吹雪型の1人になるんだ――

「助けて…」

膝を抱えながら誰にも分からない懇願を漏らしても、誰かの寝返りにかき消された。

…あほらし

鏡越しの冷たい視線は歯を磨く私に向けられたもの。なにが未来の私だ、なにが助けてだ。動揺していたとはいえ、さすがに昨夜のセッションはおかしかった。私の分の洗濯物は私がすればいいだけだし、共同生活に耐えられないなら司令官も言ってくれたように、拒否して別の部屋に入ればいいだけ。深刻な問題じゃない。

だが、あくまでも私は外様。1人部屋を使わせてもらうのは気が引ける。だったらやることは1つ。私は頬を叩き気合を入れる。

「相方探しね」

### 第3章 第3話 ウララカ

「相方探しね」

さて、気合を入れてみたものの。私がこの鎮守府で声をかけられる知り合いなど限られている。ひとまず日課ともいえる散歩をしていたらその第一候補を早速見つけた。

「早いな」

「あんだこそ」

簡素な挨拶はいつものこと。吹雪たちがまだ寝ているのも無理からぬ時刻だが私はただの習慣だけで早起きの意識はない。それよりも買物袋を持っていてすでにどこからか帰ってきたような木曾のほうが早起きだ。

「ああ、ちよつと港にな」

覗かせてもらおうと立派な魚が入っていた。木曾が料理をするのは知っている。前の鎮守府では釣った魚を一緒に捌いたりした。生活リズムも潔癖さも大体合う。つまり共同生活候補最有力だ。

「姉ちゃんたちが昨日の夜に食べつくしてしまったからな」

忘れていたが、木曾が艦娘になった時の姉妹艦はこの鎮守府にいたのだった。木曾もこの鎮守府に帰ってきた形になる。つまり木曾の希望は叶ったということなのだろうか。

「しかも朝も食べたいっていうもんだから買いに行っていた」

「…なにそれ？」

「まあ、魚食ベさせておけば満足するからな」

木曾は肩をすくめるが、私が気になるのはよく知らない艦娘の偏食ではない。友人として、同じ部隊の仲間として本気で心配になる。

「あんだ、弱みでも握られてるの？」

「滅多なことを言うな。姉ちゃんは誰にだつてこうだ」

…それは擁護になつてるの？

いろいろ気になるところはあるけれど、苦勞が見える木曾はそれでも嬉しそうで、これ以上の追及をする気も失せてしまう。こんなささやかな願いでも、木曾がどれほど望んだかも努力したかも知っている

から

「で、なにか用か？」

「…なんでもない」

私にはそこに入ることができない。

「そうか」

たぶん私がなにかを遠慮したことには気づいているのだろう。困ったときには言ってくれ、とだけ残してすれ違う。

「木曾」

なんとなく呼び止めてしまう。振り返った隻眼を見て、何が言いたかったのか分かった。

「よかったわね」

「ああ」

年相応に破顔した彼女を見て私も笑う。本当にささやかな、それでもこんな世界でようやく手にした日々。それに私は少しでも役に立てたのだろうか？

「お前も楽しそうでなによりだ」

「…は？」

なにを言っているんだ、こいつ？私の状況が分かってるの？いや、言っていないけど。

木曾がいなくなった時にはたぶん真顔に戻っていた。が、それで済むわけがなかった。思いつきり息を吸い込んで。

「んああああー！！！！」

悔恨を思いつきり発散した。

「ばかばかばかっ！なにかっこつけてんの！」

頭を抱え込んでしゃがみ込む。状況が分かっているのは私だ。洗濯物は拒否するにしても、このままじゃ吹雪たちと一緒にプライベートの無い共同生活まっしぐら。だって最有力候補を逃がしてしまった。いや、正直に言おう。最有力じゃなく唯一の希望だった。だって他の知り合いは――

「お、どうした？珍しいじゃねえか」

こいつだ。私が天龍の部屋に助けを乞いに行かなくてはいけないとは屈辱的ね。

「なにか失礼なこと考えてないかしら？」

当然龍田もいる。そう、ここは天龍型2隻で奇麗に収まっている部屋。球磨型5番艦の木曾とは違う。だが私は床にひれ伏す。言葉を失う2人。

「…実は——」

かくかくしかじか、ここまでする理由を告げた。

「ぎやはははー！」

「だ、駄目よ、天龍ちゃん、笑っちゃー…」

「おまえも我慢できていないじゃねえか！」

「あんたら…」

笑いやがった。こっちは真剣に悩んでいるのに。こんな奴らに頭を下げている私が情けなくて震える。

「わりいわりい。深刻なツラしてたもんだからよ。ほら、泣くな」

「泣いてない…！」

頭をぼんぼん叩かれる屈辱に耐えかねて飛び上がった。

「いいじゃねえか。そうやってごちゃごちゃできんのも姉妹艦が多い駆逐艦の特権だぜ？」

「私たちなんて2人で1部屋よねえ」

私はそんな特権なんて欲しくない。もちろん、1人の時間が欲しい私の気持ちをこいつが分かるとは思っていない。

以前はいろいろあったけれど、それから親友になったり…なんてなかった。別にわだかまりが残ったとかじゃなく、単純に性格が合わないだけ。几帳面さなんてかけらもないし距離感が変に近いし味付けも濃くすればいいと思っっている輩だ。そりゃ同じ眼帯なら木曾に行く。

「だが確かに服を散らかすのは感心しねえな。女としてのたしなみは忘れちゃいけないぜ」

脚をおっぴろげて椅子にふんぞり返っているやつが何をいうか。まがりなりに1年以上同じ部隊にいた私が、天龍は龍田に脅されなけ

ればろくに掃除もやらない女だと知らないわけがない。

そんなこと思い至らないのか、なあ龍田と偉そうに呼びかける。

「そおねえ。でも、人が多いとそれだけ片付けも大変よ」

…あんたはあんたで牽制入れてきてない？

「まあ、オレは構わねえぜ。にぎやかにするのは歓迎だ。なあ、龍田」

織細さのかけらを持ち合わせていない天龍に遠回しの意思表示など伝わらない。ざまあみろ、と言いたいところだが

「やっぱりやめておくわ」

「なんだよ、遠慮すんな」

「いや、本当にいいから」

今も天龍の背後から殺意のこもった視線が注がれている。これじゃあ夜もおちおち眠れない。女子力どころか命の危機だ。そして天龍と過ごすとそれはそれで大切なものを失いそう。織細さとか。

さて、その気になるとしつこい天龍から無事脱出したところで、この流れで行く次の当ては…

ノックをしても返事がない。だが鍵はかかかっていなかったのだから開けてみると気配はした。

「どうよ、日向！この瑞雲の輝き！」

「ふむ、よく磨かれているな。だが瑞雲はどのような姿でもいついかなる場所でも輝くさ」

「そりやもちろん！でもやっぱりおめかしして——あれ？叢雲じゃん」

「部屋を間違えたわ」

ここはない。急いでドアを閉めようとしたけれど、あと少しで阻止された。

「どうしたの？あなたも瑞雲に興味出てきた？」

「そんなわけあるか！そもそも私は水上機積めないから！」

「照れなくてもいい。君は瑞雲と同じ字を持っている。惹かれるのも無理はない」

「うるさい！」

必死にドアノブを引っ張るものの、戦艦の力にかなうわけがない。少しづつこじ開けられ、隙間から腕が伸びてくる。：別にこんなことしなけりやいいじゃない。

急に冷静になってノブを離し、全力で逃げ出す。どうしてこんなことになるのよ。どうして私の部隊にはろくな奴がないのよ。目頭が熱くなるけれど、私は負けない。

「みんな…みんな大っ嫌いっ！」

### 第3章 第4話 グッバイメランコリー

ぼやけた視界の中走っていると誰かにぶつかりかける。

「どうしたんだい、叢雲。廊下を走ると危ないよ」

慌てて目元を拭って見ると時雨が心配そうにのぞき込んできた。この鎮守府に来てからの知り合いは少ないが、白露型は貴重な顔見知り。だが、顔見知り以上になんとも一般的な感覚を持ち合わせてそうではないか。

がしつと、去ろうとした時雨の肩を掴みとめた。

「なるほどねー」

「叢雲ちゃんも大変っぽい」

ようやく望んでいたリアクションが得られた。本当は白露型じゃないのかしら、私。

「ま、あそこは特殊だよね」

適切に配置された2段ベッドの上で白露が顔をのぞかせる。やっぱり特殊なのか。

「ぼくも静かなほうが好きだから気持ちちは分かるよ」

「えーっ、夕立はみんなといたっぽい」

夕立は下から顔を出した。そんな2人を椅子に座った時雨が楽しそうに見ている。なんだか穏やかな、理想的な光景だ。

「でもあんまり深く考えないでさ、1度くらい試してみればいいじゃん」

「な、なにを言うのよ?」

白露、あんたも私を裏切る気!?

「そうだね。せっかく誘ってくれてるんだから」

「ぼいー」

「なんでそんなに吹雪たちの肩持つのよ!? 私の人権は!」

結局理想郷なんてなかったんだ。うなだれる私の背を時雨がぽんと叩いた。

「そんなに嫌がらなくてもいいじゃないか」

「いやー…吹雪はさ、ずっと楽しみにしてたんだって。叢雲が来るって知ってから部屋とかやりたいこととかいろいろ考えてたみたいだし」

白露は頭をかきながらためらいがちにぼやいた。

「吹雪ちゃん、うるさかったっぽい」

「夕立に言われるなんてよっぽどだったんだね」

「こんな説得はズルいかなって思ったんだけどさ、叢雲がいないと吹雪悲しむと思うんだよね。ちよつとくらいは一緒にいてあげていいんじゃない？」

先に断られたって、卑怯なのは変わらない。だって簡単に想像できしてしまう。だらしのない笑顔も落ち込む顔も。想像できてしまったから、私はもう諦めるしかない。

「…わかったわよ」

なんだか照れくさい感情をうなじを搔いてごまかそうとする。別に喜ばせたいわけじゃない。でも、吹雪が傷つくのは見たくないと思った。もうずっと昔の記憶のせいだろうか？謎に昂っていた感情が冷めていく。

「なんだか私もおかしかったわ」

「それは仕方ないさ。吹雪型に囲まれてればね」

なにそれこわい。

なんだかまた不安がよみがえってきたが…

「ウチは遠征行ってる妹たちも多いからね。部屋は空いてるから我慢できなくなったら逃げてくればいいんじゃない？」

そう言ってくれるなら頼もしい。私は慣れない礼を言っただけで白露型に別れを告げた。

やっぱり今日はテンションが変だ。脚が勝手に弾むんだから。そんな妙な高揚に便乗し息を吸い込む。

私は叢雲。雪がついているあいっつらとはちがうんだ。だらしのない生活をしているなら私が正してやればいい。

「やっつやるわよー」

### 第3章 第5話 b a l l o o n

「さっさと起きなさい！」

部屋に入ると目覚まし時計がいたるところで鳴り響いていた。耳をふさぎたくなるほどの音でも布団にこもり続ける彼女達には起きたくないという消極性ではなく絶対には眠るといふ強い意志を感じる。こんな光景も数日続けば慣れたもの。

当の私は朝の散歩を終えたところ。本当に健康的な習慣がついているものだ。

「吹雪、今日は朝から演習でしょ！初雪、こたつで寝るなって言ってるわよね！」

「叢雲、母ちゃんみたいだな」

「深雪、あんたはパジャマ投げるなって何度言えば分かるの！」

「うへえ」

「おはようございますー」

「寝ぼけてないで顔を洗ってきなさい」

どいつもこいつも…

良い習慣は身につくのが遅いとはよく言われるけれど、数日の短い時間では艦籍上での姉たちの矯正はできそうもない。それどころか私のほうが馴染んできている気がする…

あわただしい朝の恒例行事を終えてみんな散らばっていく。決して歴戦の猛者とは言えないけれど艦歴はそれなりにある彼女達は相応に忙しいらしい。一方、艦娘としては最古参レベルの私は不相応に手持ち無沙汰気味だったりする。独りになった部屋でゆっくりとお茶を飲んで一息つく。少しばかりの静かな時間を味わったのち、部屋の隅に立てかけられた槍を手に取った。

「やあ、早いじゃん」

鎮守府内の道の交差点で見慣れた顔が反対からやってきた。ちょうど分岐で隣に並ぶ。私はここで左に曲がるから、当然伊勢は右に曲がる。目的地は同じ鎮守府の端だ。

「試したいことがあるのよ」

昨日の訓練で気になって、と続けると伊勢は隠すことなく感嘆をもらしたけれど、同じところに向かうのだから目的はそう変わらないだろう。

「どうよ、最近は」

「余計な苦労が増えたわね」

どうもこうもない、と隣に並んで歩く速度を落とさずに答える。

「そっかそっかー」

前を向いていてもやついた顔が想像できた。

「なによ」

「私はいま変わらないからさ。相変わらず日向と一緒に、出撃もあんまりないし」

「羨ましいわね」

私はどれだけ振り回されていることや。今朝なんて枝毛を見つけてしまった。

「なんにせよ、叢雲が楽しそうだなにより」

「はあ？なに言ってるの？」

なんだか前にも同じようなことがあった気がする。そして同じように否定した気がする。

「君もまだまだですなあ」

頭を乱暴になでられた。やめろ、枝毛が増える！

抵抗しようにも身長差があるからこうされるとどうしようもない。

逃げるために前に走ると伊勢はにやにやを通り越して声を上げて笑った。本当に腹立たしい。

「そっか、近いうちに私たちも普通の艦隊に混ぜられるみたいよ」

私をいじめて満足した伊勢が告げた言葉に、数歩先にいた私は振り返る。

「基本的に私たちが独立なのは変わらないけど、いろいろと運用を試してみたいって提督に昨日言われた」

「…試すって？」

「私たちの実力を知りたいってのもあるんだろうけどさ」

詳しくは知らない、と伊勢は肩をすくめた。それでも、ようやく始まることは分かり切った。

「…いよいよね」

「普通の艦隊戦なんてもう忘れちゃったけどさ、その戦果次第で今後どんな運用されるかが決まってくる」

伊勢は気の抜けた伸びをして、また私の頭に手を置いた。今度は目があった。

「舐められるわけにはいかないよね」

「当たり前じゃない」

そのために私たちは訓練を重ねてきた。最前線で戦わなければ、望みは叶わない。

いつの間にか門の前に着いた。私たちの目的地、武道場に。

「叢雲、せっかくだし一戦付き合ってよ」

「一戦って、あんた勝つまでやめないじゃない。10回くらいは覚悟しとくわ」

しやがみ込んで頬杖をついていた。私は海上で、見つめる先は訓練をしている一団だ。

「焦らなくていいからね。そうそう、上手だよ」

訓練といっても新しく入った艦娘の航行訓練だ。目新しいものは新人に声をかけながら先導する吹雪だが、それを物珍しく感じるのは私だけみたい。一度同じ海域で戦ったものの、私の中では今まで、あの立つこともままならない新入りと同じ動きをする吹雪しかいなかった。指導するため後ろ向きに航行する吹雪の技量をあの新人が理解するのはいつになるのだろう。私が島に行つて別れたあの日からの歳月をようやく実感する。

「むーらーくーもちゃん」

休憩時間になって吹雪が横に付けてしやがんだ。横に滑るのも、私は今普通にやっているけど海上にとどまってしやがむのも、巡行を前提とした艦娘の足回りでは結構難易度が高い。

「叢雲ちゃんもどう?」

どう、と聞かれても。まさか吹雪に手を引かれるわけじゃないだろうから、教える側か。

「いやよ」

どちらにせよ即答だ。

「あんたこそよくこんな面倒なことできるわね」

「楽しいよ。みんなとも仲良くなれるし」

そこらへんの感覚を私が理解することはなさそう。…だったらどうしてここに来ているのだろうか？

「叢雲ちゃんが教えてくれるならみんな喜んでくれると思うな」

「そんなわけないでしょ。それに私は忙しいの」

「剣やってるんだよね！」

私が使っているのは槍だけど、訂正するのもめんどくさい。部屋に置いてある槍は物干し竿でも思われているかしら？

そんな心中など知らず、吹雪はたぶん刀を振っているであろう動きをする。

「かつこいいいよねー。私もやってみようかな？」

好きにすればいい。そのへっぴり腰では怪我するのが目に見えているけれど。でも

「あんた、うまくなったわね…」

へなちよこな振り下ろしでも機関の動力でしつかりとバランスはとっている。イメージ通りの吹雪と確かに変わった吹雪が一緒にいるせいで、不思議な感覚にとらわれる。そんな私から漏れ出たつぶやきに、吹雪はへらつと相好を崩した。

「頑張ったからね」

「…そう」

頑張った、言葉にすれば確かにそれだけなんだろう。この笑顔の向こうにある、何のために、どんな想いで、なんてものは誰も考えない。私だって、ほんの少ししか知らない。同じ鎮守府にいたはずなのに。それが吹雪で、彼女の強さ。

休憩が終わりまた同じ訓練が繰り返される。実感したはずなのにまだまだ奇妙に見える光景を私は静かにみつめていた。

「それはね、こうやって、キュツつて感じで…分からない？じやあ、シユツとかは…」

必死にジエスチャーを繰り返す吹雪に、なんだか妙に安心した。だけど、見慣れていたほんこつの吹雪は、静かに見ているにはじれったすぎる。

「ああ、もう！」

私のほうがうまく教えられる。急いで駆けつけて押しつけた。

「キュツとかシユツとかわけわかんないこと言ってるんじゃないわよ。それはギャツでしょ、ギャツ！ほら、やってみなさい…：…なんでわからないのよ！」

### 第3章 第6話 ナイトエスケープ

…なれないことはするもんじやないわね。

結局日が沈むまで訓練に付き合ってしまった。にしても、この私の指導がまったく伝わらないのはどうということなんだ。うちの部隊では結構ちゃんと伝わったのに…

まあ、高尚な教えは素人には早かったのだろう…うん、きつとそう。お風呂あがりでも火照った体を冷ましながら頷く。部屋の扉を開けるとまだ明かりがついていた。

「まだ起きてたの？明日も早いんだからもう寝なさい」

何か話していた同僚たちは時計を見て大人しくそれぞれの寢床に戻ろうとする。

「もう少し…」

だが、初雪だけはこたつから出ようとしなない。のぞき込むと「なにそれ？」

「ゲーム」

いや、それは知ってるけど…

手元の画面では2人が戦っている。これが格ゲーってやつね。

「面白いの？」

「初雪、強いんだぜ」

初雪が静かにうなずくと深雪と吹雪が近くに来た。

「すごいんだよ。私なんてぜんぜん勝てないんだ」

「あんた基準じゃ参考にならないわね」

「そんなー」

結局、初雪中心に集まってしまった。確かに手の動きをみると、普段からは想像できないほど速く動いているけど…

「くだらない。所詮ゲームでしょ？」

「でも、やってみると楽しいですよ」

白雪が控えめに反論する。こんなゲームしなさそうなのに。

「ちよつとやってみようぜ。これ対戦できるからな」

どこからか出したもう1つのゲーム機を渡された。しかも深雪も

持って構えている。

「初雪とやるんじゃないの？」

「素人が初雪とやろうだなんて甘いぜ。まずはこの深雪様を倒してからだ」

いつの間にかキャラクターの選択画面が開かれた。付き合つてられないと思っていたが、素人扱いとは心外だ。確かにゲームなんて触ったことがないけれど――

「結局戦いの基本は間合いとタイミングよ。実戦を積んだこの私があんたらに負けるはずないじゃない」

よくわからないけど強そうなやつを選んで、ボタンを押した。

「卑怯よ！腕が伸びるなんて聞いてない！」

「へへへ、油断しちやいけねえぞ」

ろくに近づけないまま終わってしまった。駆け引きもなにもない。

「深雪ちゃんすごい！」

「うるさいわよ！」

吹雪を恫喝して黙らせたので気持ちを切り替える。そう、まだ一本取られただけよ。

「もう見切ったわ。2本勝負にしたことを後悔なさい！……なんで後ろとられてんのよ!?!」

「ゲームなんだからレポートぐらいするぜ」

「隠してたのね！」

「出すまでもなかったからな。深雪様の本気を出させたことは褒めてやるぜ」

余裕たっぷりに笑われて、逃げ帰るわけにはいかなかった。

「これで分かったわ！もう一回やるわよ！」

何度やっても、何度やっても勝てない…

ようやく電撃が出せることに気づいたのに、待ってたかのように火を吐かれた。もうわけが分からない。

「ね、深雪ちゃん強いでしょ?」

隣で声をかけてくる吹雪と目が合った。そうだ、こいつだ。

「…ええ？」

「まずは練習台がいるわ。吹雪、ちょっと相手しなさい」

首根つこを掴んで深雪と変わらせる。まずは勝ち癖をつけるところから。

「私だってけっこうやってるんだからね」

吹雪が鼻息を荒くゲーム機を構える。大丈夫だ、構えてわかる。こいつは雑魚ね。

「…つて、なによこの蹴り！隙が無いじゃない」

「ふふんっ、負けないからね！」

見たことのないキャラの連続蹴りに徐々に追い詰められていく。

「でも吹雪これしかできないぜ。ほら、ここでジャンプして後ろとれば——」

「深雪ちゃん！それはだめえ！」

…なるほど。本当にそれしかできないと分かれば悩むことはない。あつという間に決着がつき、それと同時に吹雪は机に突っ伏す。

「うう…叢雲ちゃんに負けた…こっそり練習してたのにー」

「才能の差よ。さて、白雪」

「えっ、私ですか!?!」

吹雪を慰めていた白雪が驚いて飛び跳ねた。残念だけど、逃がしてあげない。あんたも倒した勢いまま深雪と戦うんだから。

「——っ！なんか飛んできた…」

もう現実との違いを散々思い知らされている私は動揺なんてしない。…避けられるかは別だけど。じわじわと削られていくものものなにか間合いを詰める。端にいるから背後は取れないけど近づけばなんとかなる。

「…それ、だめ」

自分の手元を見たまま初雪がつぶやいた。嫌な予感しかしない、でももう飛んでしまった。

「んなっ!?!」

着地の寸前で蹴り落とされた。倒れている間にまた距離を取られる。そしてまたなにかを飛ばされる。

「私もこれしかできないんですけど…」

「これだけって言われても——」

結局何もできないまま時間切れになる。なんて陰湿な。

「白雪っ、あんたがこんなことする子だとは思わなかった…」

「いや、そんなこと言われても…ゲームですし…」

…そう言われたらその通りなんだけど。そう、たかがゲーム。どうも熱くなりすぎた。

ふと初雪を見る。

「…なにそれ」

「通信対戦。結構強い…」

いつものようにゆっくりとした平坦な声なのに、指だけは見たことのない速度で動いてる。それに対応して画面のキャラクターが動いているけど、さっきまで私がやっていたゲームと同じとは思えない。そもそも対戦と言っても、今や電波も貴重なりソースなんだけど。軍は優先的に使えるとしても、これは艦娘の特権で済ませているのだろうか？

「ま、いいわ。初雪、それ終わったら相手してもらおうよ」

「いいけど」

「おいおい、それは無茶だぜ」

分かっているけど、それでも見極めないといけない。私の今の場所を。

「叢雲ちゃん、頑張っ！たぶんダメだけど…」

「うるさい！負けるつもりで戦う艦娘がどこにいるのよ！」

…まあ、気合だけで勝てるほど甘くないのは知ってたけど。

頭がガンガン痛む。一晩中画面を見続けるなんて慣れないことをしたせいだ。

「どうした？お前が体調管理を怠るなんて珍しいな」

休憩時間に座り込む私に木曾が声をかけてきた。珍しく心配が声

から感じられるのが申し訳ない。

「動きもおかしかったな」

それは誤解だ。私の動きは完ぺきだったはずだ。ただし

「私から電撃が出せたら——」

「…本当にどうした？」

口に出してしまったのがまずかった。木曾が心配どころか怪訝な顔をした。

「実は…」

不本意ながら白状した。あらぬ誤解を受けて出撃に支障を出すわけにはいかない。

「ゲーム？お前がか？」

「あれ、けっこう良くできてるんだよな—」

なんとなく一番聞かれたくなかったやつ、天龍が木曾の肩に肘をかけて割り込んできた。

「お前もやってるのか？」

「ちよつと前に流行ってたからな。木曾もどうだ？やってみるとハマるぜ」

「天龍ちゃん、私に勝てないでやめたの忘れちゃったのねえ」

「てめえ！俺だってガキどもには勝てらあ！」

なんだか不毛な方向に話が盛り上がってきているのをぼけつと見つめる。あのゲーム、有名だったんだ。

「はいはい、そろそろ休憩終わるよ」

いつものような伊勢の号令でもいい話が切り上げられる。私もゆつくり立ち上がる。

「ま、遊びすぎもほどほどにね」

「…なによ」

怒られると思っていたのに、伊勢は満面の笑みで背中をたたいてくるから、私のほうがなんだか不満げになってしまう。

「まあ、そんなときも必要ということだ」

「なんかムカつくわね」

相変わらずよく分からない日向と背中をたたき続ける伊勢に挟ま

れて、日常に戻っていく。変わったことと言えば、天龍が時々私の部屋に来るようになったくらい。初雪にぼこぼこにされて、深雪と盛り上がる。

第3章 第7話 BITTER SWEET GI  
RL

「なんか、久しぶりに落ち着いて食べれた気がするわ」

食後のお茶を飲んで一息つく。両手で持つ湯呑から手にゆつくりと熱が伝わる。不思議なことに、いつまでたってもお茶を淹れるのはおじいちゃんに敵わない気がする。

「忙しいみたいだな」

机の向こうでおじいちゃんが同じようにお茶をすする。お互いの近況——おじいちゃんは安易に口に出せないことも多いが——を話しながらの食事を終えて静かな余韻に浸りながら、それでも少しずつ言葉を交わす。

「引越しも終わったし、だいぶ慣れたわ」

新しい同僚にも、騒々しい日々にも。時々白露型の部屋に逃げたりもするけど、それももう自然なことのように感じる。

「おじいちゃんは鎮守府に来ないの？」

艦隊の指揮とかではなく、私たちの部隊のためにだ。私たちは鍛錬を積んで、確かに技量が上がった。だが、上がったところで、鉄を切るのとはなかなか簡単にはいかない。深海棲艦と戦うにはまだ足りない。「まだほとぼりが冷めてないことだし、1つの鎮守府に入れ込むのも外間が良く無くてな」

どんな外間なのか分からないけれど、偉い立場も大変なのだろう。私がいる時点でひいきにする理由になりえるのだし。でも、私たちだけではまだまだ及ばないことが多い。もうすぐ戦火が交わろうとしているのに。

「それに、鎮守府は提督に任せるものだ。余計に口出しをするものではないな」

「…あの司令官、そんなに信用していいの？」

「不安か？」

たしか、おじいちゃんが推薦したんだっけ？別に何が悪いってわけ

ではないんだけど…

「なんか頼りないのよねー」

艦娘との距離が近いせいもあるだろうけど。ぼやくとおじいちゃんは苦笑いする。でも、否定はしない。

「確かにな。お前は宗谷のところに行ったから、余計そう思うんだろう」  
前の鎮守府の司令官は淡々どころか冷淡なイメージだった。私が特殊な部隊だからってわけでもなくて、だれにでも同じような事務的な対応だ。外から見てる分にはだけど、私は嫌いじゃなかった。

「提督もいろいろというものだ。成長もするし変わっていく。何が正しいとかではない」

ふーん、と気の抜けた返事をして、ふと思った。

「おじいちゃんはなんか変わったことないの?」

「どんなことだ?」

近況を話してもそこまで大きな事も起きていないようだからなんとなく訊いてみただけで、何を期待してたのかは私にもよく分からない。ちよつと考えてみて、最初に出てきたのは

「好きな人が出来たり、とか?」

「…この歳だぞ?」

おじいちゃんは目を丸くしながらも間を置かずに返した。確かに言い方が変な気がしたけど、

「なんかこう、良い人とかいないの?老いらくの恋、みたいな」

どこで覚えたんだ、とおじいちゃんをあきれる。

「浮気を考えたことは一度もないのがささやかな自慢なんだがな」

考えられたことはあるかもね。私が見ていた範囲ではいま想像できないけれど、おばあちゃんも苦勞してたみたいだし。

「それとは違うでしょ。別に悪いことじゃないんだし」

「…おまえがそんなことを言うとはな」

肯定も否定もせず、おじいちゃんは髭をなでる。私もなんでこんな考えが出てきたのか。まあ、想像つくけど。

「心配なのよ。相変わらずでき合わせのものしか食べてないし、片付けもできないんだから。遺産目当てでもいいから、世話してくれる人

見つけたらいいじゃない」

「ふむ、そうか…」

「ちよつと、なに真剣に考えてるのよ!」

「お前が言ったんだろう?」

「そうだけど、やっぱなし!」

想像しようとしてうまくできなかつたけど、なんか嫌な感じはした。だからなし、だ。

「そうゆうのって無理にするもんじゃないわよ。もういい歳なんだし」

「それは俺が言ったんだが…」

どうもぼつが悪くなって台所に向かう。

「鎮守府も近くなつたし、私が来てあげるからそれでいいでしょ?」

蛇口をひねって食器をすすぐ。今日は2人分だからすぐに終わる。

「叢雲、今夜は泊っていくのか?」

湯呑を持ってきて隣に立つおじいちゃんに首を振る。

「明日の朝に深雪と釣りする約束してるから。初雪にももつと簡単に遊べるゲーム教えてもらおうし」

「そうか」

「なによ。鎮守府は近くなつたし、また時間あるときには泊りに来てあげるわよ」

「…いや、今になってこんな気分を味わえるとはな」

おじいちゃんは1人で納得してお風呂のお湯を張りに行った。

「なんなのよ、いったい…」

雨は嫌いだ。昔からなんとなく好きじゃなかつたけど、あの島で暮らすようになってからはつきり嫌いになった。雨だとおじいちゃんには釣りに行かないし、洗濯物は乾かない。あの日々で嫌いになったものだから、今でも嫌い。

「ぼくは好きだけだな。静かでもいいじゃないか」

「私の部屋はうるさいのよ」

普段分散している吹雪たちが集まるものだから。最近は大龍もゲームをやりにきたりしているからなおさら。だからこうして避難してきてる。

「夕立もあんまり好きじゃないっぽい」

「そうかな…」

時雨は自分のことのように残念がる。名前に縁があると親近感があるのでだろうか、と思ったけれど夕立はそんなことはないみたい。

「白露は？」

「遠征っぽい」

こんなふうには、私たちの任務は天候を選んでいられない。だから訓練も演習も天候は考慮してくれない。やっぱり雨が降っていいことなんてないじゃない。

「でもこうして叢雲が来てくれるんだから、悪いことばかりじゃないや」

「…あんだ、よくそんなこと平然と言えるわね」

あきれやるやら感心するやら。私が大きく息を吐いて立ち上がると

「もう行くのかい？」

なんて本当に名残惜しそうに言うからたちが悪い。

「好き嫌いとはもかく、雨でも体は動かしておかないとね」

ドアを開けて別れを告げた。

はずなのに、けっこうすぐに呼び止められた。夕立だ。何の用、な

どと尋ねるまでもなかった。

「言ったはずよ。改二のことは忘れなさいって」

意図してきつい口調を使うと夕立はたじろいだ。

「でも…」

「でも、じゃないわよ。…まあ、私もちよつときつく言ったかもしれないけど」

以前言った。自分の命が大切なのは幸せなことだと。それは紛れもない本心だ。そして夕立は幸福であることを否定しない。

「あんたは十分に戦えてる。わけの分からない力に頼ろうとするのは

やめなさい」

「でも、夕立、みんなの役に立ちたい、つばい…」

「それを誰が望んでるの？」

答えを聞きたいのではなく、黙らせるための質問。

わざわざ追いかけてきて切り出すのだから、夕立が時雨に限らず白露型の姉妹に聞かれたくないのは分かっていた。もっとも、時雨は夕立の行動を見透かしたうえでなぜか止めなかったのだろう。

「私たちは運がよかっただけ。何かが違えば沈んでいたわ」

今だから分かる。体の内側から上がってくる冷たい感覚はたぶん深海棲艦と同じもの。それが何なのかなんて、なんで改二になったかなんて分からない。ただ言えるのは無防備に踏み込んで戻ってこれた夕立に2度目の保障はないということ。そして、その2度目を試す理由がないということ。

「今が幸せならそれでいいじゃない」

分かってくれ、と懇願する。でも、誰もが命を賭ける価値を見出せない願いを、命を賭けてまで望むしかない私にその力はないのだから。

いつかと同じように、立ち尽くす夕立に背を向けた。

### 第3章 第8話 砂糖水

「ショッピング？デパートで？あんたらが？」

いろいろと想定外のワードが聞こえたのですべて聞き直してしまった。

「叢雲ちゃんも行くよね！」

勧誘でも確認でもなく、私も行くことは決まっているようだった。別に明日の予定はないけれど。

「なに買うつもりよ？」

「もうすぐ鎮守府でお祭りがあるんですよ」

「だからみんなで浴衣着ようぜ」

なんともゆるい話だ。私が艦娘になった当初からすると考えられないけれど、そろそろ艦娘が季節を感じることに慣れないといけないういかもしれない。

「あんたも？」

「…行く」

さすがに季節柄こたつからは抜けたものの布団と同化している初雪も領く。まあ、私もゆっくり買い物するのは久しぶりだから、いい機会かもしれない。

「それでね、お願いがあるんだけど——」

同伴、ねえ…

私は知らなかったが、この鎮守府では遠くに外出するのに年齢制限があり、雑に分類すると駆逐艦が外出するなら軽巡洋艦以上の付き添いが必要になるらしい。私がおじいちゃんのところに行くのは何も言われなかったのだけど。

「もしかしてあいっただけの規則じゃないの？」

口にするとなんか気がしてきた。少なくとも、私が特別扱いされるよりありそう。

前々から頼んでいた軽巡洋艦に急用が入ったため、私にあてがないか聞いてきた。この鎮守府での知り合いは少ないが、私の部隊は私以

外軽巡クラス以上ではある。…あいつらより子ども扱いされるのは納得いかないわね。

納得いかなろうが、艦種と年齢はどうしようもない。いつかのよう同僚を探すと木曾と天龍がいた。食堂で雑誌を開いてのぞき込んでいる。

「少し派手すぎないか？」

「つつても流行りの色だぜ？このくらいはねーとむしろ地味だろ」

…私も詳しいほうではないけれど、なんかファッションの話をして  
いるみたいだに聞こえる。服装なんて無頓着そうな組み合わせのせいで違和感がすごい。

「あんたら、なんの話してるのよ？」

「ああ、叢雲か。天龍と買い物に出かけるんだが、ある程度めぼしをつけていた」

違和感があるのはともかく、

「ちようど良かったわ。だったら——」

どんなものがあるのかとのぞき込んで、声が途切れた。これが絶句ってやつなのね。

「どうした？」

「そりゃあんたらの組み合わせになるわね…」

不思議そうにするこいつらは本当に自覚がないのか？眼下に広がる眼帯特集に困惑する私のほうが正常だと思う。私には分からない世界だけど、確かにこの色は派手でしよう…

「んで、何がちようどいいんだよ？」

「…なんでもないわ」

すぐ影響されるあいつらが一緒に買い物に行ったらろくなことにならないのは目に見えてる。まわりまわって私まで眼帯をつけさせられるはめになりかねない。

「てかあんたたち、いつも同じ眼帯じゃない」

「実は少しずつ違う。俺は柄が目立つのは好きじゃないから分かりにくいだけだ」

「…そう」

「オレも数持ってねえけど、プライベート用に買ってみたくなくてよ。女子力アップってやつだ」

「…そう」

私から振っておいて悪いけど、本気で興味がない。適当に流して早めに立ち去る。

ノックをしても返事がないが、鍵はかかっているないので静かにドアを開ける。

「やつぱこの季節は瑞雲カラーで決まりだよね！」

「うむ。祭りであるなら法被で瑞雲を模すのはどうだ？」

「いいね！さっすが日向！」

——パタン

声が遮られ静かになった廊下で思いつきりため息をつく。たしか春先も瑞雲がどうか言ってなかった？

私の人脈は細く、つながる先だってこんなものばっか。あと残るは—

「まさかあんたが来るとは、ね…」

「なあに？あなたがどうしても言うから付いてきてあげたんでしよう？」

それはそうだけど、断られると思っていたから。

「あんた、年下嫌いじゃない」

「素直な子は好きよ。あなたみたいなのとは違って」

「素直ねえ…」

「なにが言いたいの？」

鼻で笑うと声のトーンを落として見下ろしてきた。コワイコワイ。

「龍田さん、ありがとうございます！」

吹雪一同丁寧にお礼を述べる。そう、確かに素直ではあるの。でも

「龍田さんは叢雲ちゃんと仲良しなんですわね！」

「え、ええ…」

龍田はひきつった笑顔で曇りのない笑顔の吹雪に相對する。無邪

気を通り越して能天気と言えるこいつらは  
「あんたには合わない素直さだと思っわよ」

だからといって特になにがあるわけでもない。予定通りに浴衣を買って、服を試着したら吹雪たちにおだてられてその気になって、私ひとりでは買わない派手な色のアイスをわけあって…そんなかんじ。  
「そろそろ帰る時間よ」

龍田が時計を見ながら告げると吹雪たちは元気に返事をした。それを聞いた龍田は私だけにしか聞こえない安堵のため息を漏らす。  
ほんと、ご苦労様。

肩をすくめるとまたにらんできた。いやいや、労う気持ちは本当よ？

「なーなー、プリクラがあるぜ」

「あ、いいですね」

帰りの出口に向かう途中にあるこのご時世だからほそぼそとあるゲームコーナーで足をとめた。私は入ったことのない暖簾の前で姉妹は立ち止まる。

「龍田さんも一緒に撮ろうぜ！」

ちなみに私は当たり前のように頭数に入れられている。

「あらー、私はいいわよ。吹雪型のみんなで楽しんで」

「なに言ってるんすか。もう友達じゃないっすか」

深雪は腕を掴んで龍田を引っ張る。これが今日の龍田の苦労を表した光景だったりする。龍田は作り笑いをしても本心の拒絶や怒りをにじませて相手に察しさせる。なかなか悪い性格してると思うけれど、裏を読めないどころか裏があるとすら思わない連中には相性が悪い。だから今日一日振り回されてきた。

「深雪ちゃん、ちよつと待って」

吹雪が間に入る。ようやく建前というものを理解できるようになったのね、となぜか熱い感情がこみあげてくる。が、そんな油断をしていた背中が押された。龍田と一緒に。

「やっぱり最初は2人で撮らないと！」

状況が呑み込めない私たちはあっさりと暖簾の内側に押し込まれた。わずかばかりの確かな沈黙。

「なんなの、あの子たち?」

「私に聞かないでよ」

なにをどうすれば私たちだけで写真を撮らせようと考えるのか。不思議を通り越してもはやホラーよ。身を震わせる私に対して、それすら放棄した龍田は肩を落とす。

「とにかく、さっさと終わらせましょうか」

「終わらせるって…」

証明写真のようだと思っていたのに、いろいろボタンや画面があつてどうすればいいかわからない。ひとまず触ろうと手を伸ばしたところ、龍田がためらいもなくお金を入れた。

「適当でいいわね?」

…なにを適当?」

「あんた、分かるの?」

「天龍ちゃんとたまにねー」

なるほど。どうせ嫌がる天龍を無理矢理引っ張るのが目的だろうけど。

「意外?」

「——なにが?」

「ゲームをしたりプリクラを撮ったりする私たちが」

意外、なんだろうか? 私はしようともしたいとも思ったことがない。だって——

「そんな時間があれば槍を振るんでしょうね、あなたは」

「…そうね」

「別にいいじゃない。まだ長い道のり、息抜きぐらいしなないとやっていけないわ」

「私はあんたたちをどうこう言うつもりなんて——」

「でも、あなたはあなたを非難するんでしょうね」

あの島から心が離れてしまったら。私が変わってしまうんじゃないかないかと怖くなる。夜遅くまでゲームをやってしまった日も、なんと

く時間をつぶす会話も、こうしている今でも、心のどこかで言い訳を探している。

「大きな望みが目の前の幸せを否定する理由にはならないと思うけど？」

本当にそうだろうか？もしも、もしも叶わなかったとき、この時間を後悔せずにいられるのだろうか？そんなはずはない。だったら、私の幸せって何だろう？

「まあ、あなたらしくっていいんじゃないかしら？」

「…ごめん」

気づけばうつむいて口に出ていた言葉は、何に向けてだったのだろう。たぶんずっと言えなかった想い。龍田たちの願いを否定したときの、私の不幸を押し付けたときの。どこかで溜まっていたも気にも留めなかったのに、どうして今になって。ちゃんと謝りたかったのに、どうしてこんなに脈絡もなく――

龍田はあきれたようにため息をついて笑った。いつもと違う、なんか安心してしまう吐息。

「どうやら余計な心配だったみたいね、最近のあなたを見ていると」

「――え？」

聞き返す前に背中をたたかれる。

「ほら、そんな顔で撮るつもり？あの子たちが心配するわよ」

そう言われても…

目のまえの画面がカウントダウンを始めた。ちよっと待ってよ。

あ、前髪が乱れて――

「いっぱい撮れたねー」

吹雪が戦果物を見て満足そうにうなづく。

「はい、叢雲ちゃんの分」

渡された小さな写真には何人も詰め込まれていてなんだか分からない。それ以上に目が大きくなっていたり肌が妙に白くなっていて、思ってたのと違う。みんなこんな感じだから変なことはないと思うけど

「あらあら、上手じゃない」

龍田がにやにや笑うせいで不安になる。龍田はどうなのかと見てみると、営業スマイルに隙がない。予想できてたことだけど。

なんだかさっきの時間が嘘みたい。こんな小さなものだけがたった1つの証だなんて、それでいいのだろうか？言わないといけないことも、終わらせちゃいけないこともたくさんあるはずなのに。

「カメラも買いましたからね。これからもいっぱい撮れますよ」

白雪がバッグからカメラの箱を取り出した。みんなでお金を出し合った、小さなカメラ。

「あ、見せて見せて！」

「ふぶきー、落とすなよー」

「開けるの、帰ってから」

「うう：信用されてない：」

「はしゃがないの。帰るまでがお出かけよー」

騒がしい背中を追う龍田の後ろ姿を眺めた後、もう一度龍田とのプリクラを見つめる。

「まあ、いいか」

何度見ても違和感が残る姿。私にはなんでこんなものを撮りたがるのか分からないけど。これからたくさん機会があるのだから、素直になれない私たちの最初の一枚はこんなものでいいのかもしれない。

## 閑話②

通信が入ったことを知らせる電子音が鳴り、亜庭は目を向ける。執務室の椅子にだらしなくもたれかかったまま少しばかりの時間が経ち、まだ秘書艦が来ていないことをようやく思い出す。

「最近たるんでんなー」

頭を掻きながらのそのそと体を起こして立ち上がった。口ではぼやいてみたものの、別に咎めるつもりはない。どうせ大した仕事などないのだ。秘書のすることなど、せかし続けるこの通信に出ることくらいか。

「はいはい」

亜庭が直接出たことに軽口どころか驚いた様子も見せないあたり、かなり急いでいることが分かる。そのつもりで聞くと砲撃音が聞こえてくる。それだけで状況は分かった。

「撤退していいよ」

だから状況報告を聞き終わる前にさっさと指示を伝える。リスクとその見返りを天秤にかけるための判断材料など必要ない。だとしても、それは亜庭だけの判断だ。現場で任務を遂行する艦娘にとって、それは失敗を意味する。

「別にいいよ。誰かが死ぬわけじゃないしさ」

これは大陸との輸送任務。深海棲艦が現れる前から海上輸送のほとんどは無人船で行われていたし、今では物資の輸送は完全に無人になっている。だからその護衛任務を放棄したところで人命が失われるわけではない。そんなものを守るのに少しでもリスクを負うなんて馬鹿げると亜庭は思う。

提督とは便利な立場だ。どんな命令でも従ってくれるのだから。

「んじゃ、気を付けて帰ってきてね」

それだけ告げて通信を切る。椅子への短い帰り道の途中でコーヒーを淹れる。インスタントなのでお湯を注ぐだけだが。

再び椅子に深くもたれかかって息を吐く。

誰も死なないなんて希望的で安易な考えでしかない。誰もいない

船が運んでいたのは誰かの資産であり、物資の不足するこの国でのそれは命に等しいものだだったかもしれない。そんなことは分かっている。分かっているから輸送部隊は撤退に反発したし、分かっているがら亜庭はそこに頓着しなかった。

コーヒーをちびちびとすすりながら引き出しの奥を探る。ずいぶん奥に隠れていた、存外久しぶりの感触が指に触れた。

沈むのが怖いのか、沈めるのが怖いのか。諦観と保身と自虐が混じった心のうちでは正しい判断など出来ないだろうに。

つぶれた箱から煙草をつまみ出した。数回からぶつた後にともつたライターから熱が移ると喉に煙がなだれ込む。

小さな咳を出して肺は情けなく抵抗する。こんなものでは鉄と同化したからだを害なすことはできないはずなのに、律儀に人だったころの反応をしてくれる。

ドアを叩く音がする。返答を待たずに入ってくるのだろうか。

今日の秘書艦は誰だったっけ？

ゆっくりと息を吸い、今度は肺まで毒を送り込む。

できもしないと分かっているくならない自傷を、彼女は叱ってくれるだろうか。

### 第3章 第9話 フォレストネスト

ようやく始まった大規模作戦の第1回ブリーフィング。私は後ろのほうで巨大なスクリーンに映し出された映像を眺める。淡々と話す司令官の口からは大仰なワードが出てくる。日本近海の太平洋を奪還し、最終的にヨーロッパまでの航路を開く、実際大きな転換点となる作戦だ。東南アジアを抜ければ深海棲艦は少ないらしいけど、今までの侵攻を止めるだけの作戦とは違う。

淡々と話しても気合が入るのだから、ちゃんと演出を考えればいいの。まあ、誠実といえば誠実なのだろう。この鎮守府の艦娘はそんな司令官に慣れてきているみたいだから、私がどうこう口出すものじゃない。

ブリーフィングと銘打っても発令はまだ先の、告知みたいなもの。物資の輸送や演習の強化は前々から進められていたわけだし。

画面が切り替わった。作戦第一弾となる海域の海図。

「——っ」

ふいに映し出された光景に息も飲めずに押し黙ってしまった。手が無意識に握られる。

海図の端、普通ならあることも気づかない——

「おい——」

隣の木曾の声が小さく聞こえた。詳しく話したことはない。だから分からないはずだけど、おおよその場所と私の反応で悟ったのだろう。

「やっとな…」

近づけたわけでもない。地図で見るとなにも違いはない。でも、確かにそこにあった。私が確かにいた、確かに望んだ島を——

「やっとな、とらえた——」

示された航路は海図の中央を通り、西へと抜けていった。航路を拓くこととはその近海すべてを解放することじゃない。役に立つのかどうか、冷酷なほどの価値判断を経て取捨選択が行われる。そして、

あの島は捨てられた。分かっていたこと。

ギリ：

だけどなぜか歯が軋む音がした。

「叢雲」

ブリーフィングが終わり、扉が解放された喧噪のなか、木曾が呼びかけてきた。木曾だけじゃない。私の部隊なら、皆察しがついているのだろう。互いの望みを叶えるために、そう約束したのだから。

「分かっているわよ」

気にしていない、そう装う。巨大な範囲を示した海図に写りこんだだけ。人類がそこを取り戻す力を得るのはまだまだ先。好機を逃がすでもない。だってなんの機会も得ていない。

私の仲間はなにも言わない。私たちが助けるのはそう懇願したときだけだ。そんな暗黙のルール。ただ、私の望んだものを、思いを、明確に伝える日が近づいてきたのだと知る。

「叢雲ちゃん」

部屋に入ると、吹雪が顔を覗き込んできた。いきなりで、思わずのけぞる。

「どうしたの？」

どうしたものにも

「急に近づかないでよ」

「そうじゃなくって、なんか元気がないみたいだから」

元気がない、か。吹雪らしい表現だと思う。

「なんでもないわよ」

「でも…」

「あなたには関係ないわよ」

なにがあるうが、なにを思おうが私の勝手だ。だから隣を抜けようとする。でも、両肩を掴まれる。振り払おうとする前に吹雪と目が合う。

「叢雲ちゃん、教えて。私、力になるから」

「…なによ、あなた」

たじろいでも、目はあつたまま。肩から伝わる柔らかい感触に力が抜ける。

そう、吹雪たちには関係ない。無自覚にあつた焦燥感を吹雪にぶつけるのは筋違いだ。

「ごめん…」

「どうしたの？」

心配するようなあやすような声。謝ってほしいわけじゃないのは分かつてる。そして、黙つたままでもダメみたい。

別に、いいか。

叶うのも叶わないのもまだ先の話。届かない願いを教えたところで何かが変わるわけじゃない。でも、知ってほしい気がした。艦娘として戦う理由を、叢雲としての私を。

「——私は取り戻したいの。どれだけかかっても、この島に帰りたい」  
広げた海図はなんの役にも立たなかった。どこにあるのかなんて、取り戻したい理由には関係ない。むしろ価値を見定められてあきれられるだけだ。でも、みんな最後まで聞いてくれた。初めて話した。おじいちゃんのこともおばあちゃんのこと。かつて木曾が言っていたありふれた悲劇の1つで、聞くだけなら些細な思ひ出。でも、私にとつてのすべて。それを話せたことが、なんだか嬉しかった。

「むらくもーっ」

「なによ——つて、深雪！」

深雪が抱き着いてきた。胸元に顔をうずめられる。

「大変だったんだな——！元気だせよ——」

「話聞いてた!?別に今落ち込んでないわよ！」

背中をたたいているとどつちが励ましているのか分からない。別にあんたが泣くことないじゃない。鼻水まですすつて——

「なすりつけないで！離れなさい！」

急いで突き放す。危ない危ない。油断も隙もあったもんじやない。

服を確かめて一息ついていると、頭になにか乗った。初雪の手だ。

「…なによ」

さわさわと頭をなでられる。

「…いや、なにか言いなさいよ」

「むらくもーっ、頑張ろうな——!」

「あんたは近づくなって言ってるでしょ!」

再び深雪を突き放してティツシユ箱を投げ渡す。ちーんと盛大な音が聞こえる。

「言ったでしょ、まだまだ先の話よ」

それでも、あのちくちくした感覚は胸の奥から消えていた。

…頑張ろう、か。

「ねえ、叢雲ちゃん。待たないとダメかな?」

「——は?」

「だって、せつかく近くを通るんだよ。なんとかできないかな?」

当たり前に優しい言葉をかみしめていたのに水を差された。

「なんとかって、どうするんですか?」

私じゃなくて白雪が聞いたのは、私にはその問いの答えが分かっていたから。作戦会議の時からずっと考えていた。でも、どうしようもない。

「攻略海域を広げてもらって——」

「あんた、話聞いてた?戦力の余剰なんてほとんどないわよ。だいたい、どれだけ離れてるか分かってる?私一人のためにどれだけ作戦を変えてもらうつもり?」

「うう…じゃあ、私たちだけでもこっそり——」

「だから、作戦海域からどれだけ離れるつもりよ。深海棲艦もいる中を単艦で——」

私、たち…?」

「——とにかく、無理よ」

「そうかなあ…」

吹雪はうなだれる。分かっている。吹雪なりに励まそうとしてくれたんだらう。でも、諦めた思考をもう一度繰り返してしまうことが辛かった。だから、もうこの話は終わり——

「じゃ、天龍さんたちに手伝ってもらおうぜ」

——は？

「なるほど…」

「いいですね、それ」

いや、ちよつと待ってよ——

「じゃあ、さっそく天龍さんたちのところに行こう！」

「なんでそうなるのよ!? 待ちなさい！」

走りだそうとした吹雪のうしろ襟をつかむとうえつと悲鳴があつて吹雪は仰向けに倒れた。困惑した視線を私に上げる。

「ど、どうしたの？」

「どうしたもなにもないわよ！これは私の問題で、あんたたちには関係ないじゃない！」

「でも、みんなで一緒にほうがいいよ？」

そんな当然のことを説明する必要があるのか、とでも言いたげに不思議そうな顔を向ける。ずっと考えていた。私だけでなにができるのかを。何もできない事実の受け止め方を。

「なに言ってるか分かつてるの？」

命令違反で済むのならまだいい。沈むかもしれない。誰も助けたくない海の真ん中で。私のためなんかに。

「うん！」

それを知つてなお、吹雪は頷き跳ね起きた。突っ立っている私の手を握る。

「一緒にがんばろー！」

もしかしたら、本当にもしかしたら、できるのかもしれない。私独りではできなかつたことが。

「そう、ね…」

なんだか恥ずかしくなつて目をそらす。でも、吹雪の笑顔は見れた。

「私も頑張るから。えへへ、なんたつて私は叢雲ちゃんのお姉ちゃんだからね！」

「——は？」

私の中の吹雪はまだやっぱりポンコツな吹雪だ。いや、過去は関係

なくとも姉とは認めにくい。

「ほら、お姉ちゃんって言ってるいいんだよ」

「絶対に嫌よ。馬鹿言わないで」

「ほらほら、照れないでいいから！ね？」

なんだこいつ。ここぞとばかりに押ししてくる。しかも、このだらしない笑みは何かの勝算があつて——

記憶の中の何かがあつながつて急いで白雪に視線を向けた。

「あ、あんた——」

私以上に高速に首を捻じ曲げて視線を逸らしたのが答えだ。こいつ、吹雪に言いやがった。釣りをしながら漏らした私の気の迷いを。

「しらゆきいっ——！」

吹雪を突きとばして白雪の肩を掴む。

「ひいっ——」

「なんで！なんでよ！」

頭を掴んで私に向けさせる。それでも目はあちこちに泳いで合わそうとしない。

「あの…吹雪ちゃんが聞いたら喜んでくれるかな…って…」

——そんなっ

「そんなふわつとした理由で!? 監禁されて拷問の末とかなら何とか許せるけど！」

「そ、そこまで追い込まれても何とか、なんですか…?」

「まあまあ、ここはお姉ちゃんに免じて——」

「うるさい！」

背後のポンコツは投げ飛ばす。

「見なさい！この間抜け面を！あんたが生み出したのよ！」

「そのことについては…ごめんなさい…」

「むらくもー、落ち着けて」

深雪が肩をたたく。…確かに少し興奮しすぎていたかもしれない。深呼吸すると、深雪のリアクションが薄いことに気づいてしまう。事情をすべて分かっているかのような——いや、これは——

「あんたも、聞いて——」

最悪な想像を肯定されるのが怖くて声が出せない。そのとき頭に何か置かれた。初雪の手だ。

「な、なにか言いなさいよ…」

本当になにか言われていたら発狂していたかもしれない。先ほどとは明らかに違うのでられ方で十分答えになってしまっている。

みんな――

「みんな、大っ嫌い！」

気づけば部屋を飛び出していた。

### 第3章 第10話 轍

「この部屋は避難場所じゃないんだけど」

二段ベッドの上からのぞかせる白露の目がなんとも冷たいが、私は小さくなつて座るしかない。

「ま、事情はきかないけどさー」

「叢雲も大変だね」

寝転んで見えなくなつた白露に代わつて時雨が本から目線を上げる。内容があれだけにあまり説明もできないけど、こくこくと頷いて肯定する。

「吹雪ちゃんと仲良くしないとダメっぽいー」

「仲良くつたつてね…」

それができたら苦労しない。あいつらは私の繊細な心など分かりはしないのよ。

「でも、叢雲ちゃんは吹雪ちゃんのことあこが——ぽい?」

——今なんつた?

気づけば夕立の胸倉をつかんでいた。

「なんであんたが知つてんのよ…」

「苦し…ぽ…い…」

「叢雲、落ち着いて」

そう言われても、無理な相談。一応首元は解放するけど。

「ふ、吹雪ちゃん、みんなに言つてたっぽい…」

——あいつつ!

そうだ。吹雪が言いふらさないわけじゃない。心の機微など理解できないやつがあれな内容を広める姿を想像して絶望する。

「みんなって誰よ!」

「ゆ、夕立といっしょに白露ちゃんも…」

「巻き込むな!バカっ!」

だんまりを決め込んでた白露が跳ね起きてベッドから降りようとするが、私のはしごを外すほうが早かった。

「は、話し合おう。あ、時雨!姉を見捨てる気か!」

「話し合うことなんてないわよ…」

はしごは高く掲げられ――

「ひい――」

「ぽいぽい――」

「忘れなさい！」

振り下ろされた。

「――で、今日になったと」

「めんぼくない…」

日が照らす道場の真ん中で私は小さく座り込む。木曾があきれたのは他のみんなの心情を代表して、だ。

「とにかく、オレはいいぜ。どうせ世界の海を相手にすんだからな」

「天龍ちゃんがそういうなら私も文句ないわ」

「ふむ。善は急げということか」

「と、ゆーことだけど、どう?」

「どうと聞かれても…」

伊勢に振られても答えようがない。そんな簡単な話じゃないはずなのに。

「よかったね!」

吹雪が肩に手を置いてのぞき込んでくる。その笑顔が胸に実感を落とした。

望んでいいのだろうか? まだ遠くにあると諦めたものに手を伸ばしていいのだろうか?

迷う理由なんてない。私はずっとそのために生きてきたのだから。ただどこか――

「命令違反って学校の時見たいでドキドキするな! なあ白雪」

「私は悪いことなんてしたことありません」

「入念な準備と計画が必要だな。どうする?」

「ここでいいんじゃないか? 極秘の会議ってテンション上がるよな!」

「天龍ちゃんと同じにしないでくれる?」

「天龍さん！あたしは好きだぜ！」

どこかにあるためらいはずつと残っていた。

「叢雲」

人がはけていった道場の出口で、私は呼び止められた。

「なによ？」

最後に日向が1人残っていた。

「迷いは剣筋を鈍らせる。君に今更説くことでもないだろうがね」

こいつは普段寡黙なくせにいざ喋ると回りくどい。

「あんたはこんな作戦には反対？」

命令違反して戦線離脱なんて作戦とも言えない。だけど――

「いや。敵戦力の読めない海域への少数投入、私達の本分だろう」

「だったら良いわけ？」

日向も口をはさむ気がないどころか肯定的だ。

「私も伊勢も、剣道しかしてこなかった。私の全てと言えるほどののではないのだろうが、誇れるものなどそれくらいだ」

電灯の光が消された道場に日差しが降る。窓の形に切り取られたそれを見ながら、日向は目を閉じる。

「艦娘になったときに手放したはずだったが、今こうして剣を振るう機が与えられ、私達だけが持つ力がある」

腰に、竹刀から変わった真剣に手を添える。

「これを幸運というのかもしれないな」

日向は私を見る。

「それを君と元帥が連れてきてくれた」

「そんなこと…」

私じゃない。おじいちゃんがしたこと、私はただ流されるだけだった。

「感謝などではないよ。ましてや君への善意でもない。私の望みに君が応えてくれた、だから私も君に応える。私達の関係はただそれだけだ。だから遠慮なく使えばいい」

立ち止まったままの私を追い抜く。

「まあ、揺らぐ剣筋も味があるさ。今の君は実に楽しそうだ」

後押しされたはずの言葉の返事を探している間に、日向は陽光に照らされた道に溶けていった。

「なんなのよ……」

### 第3章 第11話 海天使

大規模作戦に向けて、私の部隊は分かれて他の部隊に混ざることになった。私は期待より不安が大きかったけど

「なんか、変わり映えしないわね…」

「まあ、そう言わないでよ」

「よろしくっぽい」

白露型御一行と一緒にしかも

「頑張ろうね、叢雲ちゃん！」

「ご丁寧に吹雪もついてきている。正直ホツとしたといえはそうなんだけど。」

練度があることは分かっているし駆逐艦同士なら連携もしやすいから、楽なもの。

「ちよつと、私が一番なんだからね！」

「突撃できる私我先頭行くのが合理的でしょ！」

いろいろと騒がしいけど…

「楽しかったねー」

私と吹雪は部屋に戻った。一足先、他には誰もいない。ちよつどいい。言いたいことがあったから。それは演習後にしては気の抜けた感想ではなくて。

「あんた、夕立に何を言ったの？」

「え？」

「改二のことよ。あんた、なにか話した？」

「えつと…夕立ちちゃんが改二を使えるようになりたいって言ってたから、一緒に頑張ろうって。って、私もよくわかってないんだけど——」  
「ばかっ！」

吹雪の肩を掴むと吹雪はぼけっと私を見ている。なんでわかんないの？

「どんなに危ないことか分かかってないわけないわよね。私もあんたも運が良かっただけ。なんでできるかも分からないのよ」

そう夕立には言い含めたはずなのに。吹雪なら分かってくれると思っていたのに。今日の演習は動きがおかしかった。まるで私が槍で戦い始めたころのように。

「でも…」

それでも吹雪は、そんな危険な道を正しいとするのだろうか。

「そりゃ私だって、助けられるものなら助けてあげたいわよ。だけど、私たちも分かってない以上どうしようもないじゃない」

「でも…私——」

「いいわね。それが夕立のためなんだから」

頭を冷やさせるため、冷やすため部屋を出て、一方的に話を終わらせた。

「——ねえ」

お風呂から上がって、新聞を読んでいるおじいちゃんに話しかけた。もちろん私達がやろうとしていることは伝えていない。

「どうした？」

おじいちゃんが顔を上げる。

訊くまでもないと思っていた。でも、なにもかもが少しずつ変わっていく。私達が生きていく限り。だから確かめないといけなかった。

「あの島に帰りたい？」

息遣いも聞こえる沈黙が続いた気がした。新聞が畳まれる音が響く。こんな時だけ几帳面だ。

「俺は戻れない」

再び一瞬だけ訪れた静寂に聞こえた私の吐息はどんな意味を持っていたのだろうか。でも、その答えは分かっていたのだと思う。

「俺はたくさんの人に犠牲を強いた。お前たちにも——」

「違う！」

私は知らない。おじいちゃんが何をしてるのかなんて。その犠牲が艦娘を出撃させていることなのか、もっと前の戦争のことなのか、分からない。でも絶対に、私は違う。私たちは、絶対に。

「私はおじいちゃんに逢えてよかった。あの部隊に入れてよかった」

だって、諦めないでいられるから。戦い続ける力を持てるから。私だけじゃない。私たちの願いは他では手に入れられなかったから。

「私聞いたの。日向は幸運だって——」

「ありがとう」

その安堵の声で、私は知る。

誰が望んだわけではない。でも誰かがしなければいけなかった。ただそれだけだ。

それだけなのに、小さな平穏を享受することもできないほど、おじいちゃんはあまりに多くを背負いすぎた。

「それでも、俺は最後まで責任を果たさなくてはいけない」

そう告げるおじいちゃんがいない島に、帰れないとはつきり聞いても、それでも私は帰りたい。

——じゃあ私は、何を背負ったのだろうか？

私は何が変わったのだろうか。

「ちよつとちよつと、2人とも」

吹雪と歩いていると白露が呼び止めてきた。何の用かと尋ねる前に単刀直入に迫られる。

「なんか、隠し事してない？」

「えつ…と、何のことよ？」

動揺を抑えてなんとかごまかすが——

「してるよね、吹雪」

「えつ、なんでばれて——ちがつ、なんでもないよ！」

頭が痛くなる。これじゃ答え合わせだ。

「このバカ…」

「いや、叢雲も分かりやすかったけどね」

そんなことはないはずだけど…

「で、なんなのさ？」

「知ってどうするの？」

「あのね——」

「バカ！」

自白も早い吹雪の口を慌てて抑える。白露が私たちを陥れようとすることはないだろう。けど、だからこそ止めようとするかもしれない。だから、話さないほうがいい。話してしまえば多少なりとも巻き込んでしまうのだから。

「言ってくれないなら提督に告げ口するよ？ 叢雲たちが悪いこと考えてるって」

私の気も知らないでにやにや笑う白露に怒りが湧いてくる。

「私はあるたたちのことを思って——」

「だったら教えてよ」

額をぴんつとはじかれる。

「よく分かんないけどさ、大変なんですよ？ だったらほっとくわけにもいかないじゃん」

おでこをぐりぐりされながら、勝ち誇った顔をする。

「私たちの部屋あんなにしたことは不問にしてあげるからさ」

そう言われても——

「危険なのよ。沈まない保証は——」

「だから、ほっとけないんだって。これで叢雲たちになにかあったら私はずっと後悔するよ。だからほら、私を助けると思って」

ほら、こうやって。私の気持ちや思いやりなんて簡単に無視して勝手な優しさを押し付けてくる。

「叢雲ちゃん、お願いしようよ。みんなに手伝ってもらったほうが絶対いいよ」

吹雪はのんきなもので、私たちが何をしようとしているのか本当に分かっているのか不安になる。でも——

「分かったわよ」

諦めて私たちの部屋に招き入れた。

「と、いうわけで！ 白露型一同、作戦に参加します！」

「ちよつと待ちなさいよ!？」

ずっこけそうになった私の言いたいことは白露には伝わらなかったようだ。

「あんだだけじゃないの!?!何人連れてきてるのよ!」

「いやいや、こんなの私1人でどうにかなるもんじゃないじゃん」

あつけらかんと笑われる。…まあそうかもしれないけど。

「こっそり抜け出せる人でやるしかないんだから、数は多いほうがいいよね。てか、そこらへんはどう考えてるの?」

そう言われると返す言葉がない。結局私たちの作戦は、作戦と呼べないほど不確定要素が多い。

「ずいぶん大所帯になったな」

「あ、木曾さん、よろしくっぽい!—やっぱりかっこいいっぽい!」

「そうか、ありがとな」

「こら!私がかっこよさだつて1番なんだからね!」

こんなに騒がしくなったら、もうなにの集まりだったか分からない。

「おい」

後頭部を小突かれた。振り返ると——振り返らなくても分かっていたけど——やっぱり天龍だ。

「なによ」

「お前がボケつとしてんじゃねーよ」

そりゃそうなんだけど…

「なんだかねー」

緊張感がないどころか、気が抜けてしまった。

「あんたはいいの?秘密の会議なんてもものじゃなくなってるけど」

「ま、いいんじゃないか。こんなのも」

天龍は見まわす。まだまだ広い道場を。

「ずっと6人だったんだからな」

「そうね…」

6人で広いとも、寂しいとも思わなかった。私も天龍も2人から始まったのだから。なのに、こんなに騒がしい空間にまだ空白を見つけてしまう。

誰にも理解されれないと思っていた願い。いや、理解をしてくれてないのではないのかもしれない。でも、こうして近くに来てくれる。

「せっかくですし、集合写真撮りましょう」

白雪がカメラを取り出した。なにがせっかくなのか分からない。単に買ったものを使いたいだけだろうけど。これじゃ誰がこの計画を知っていたか、一目瞭然だ。

「血判状みたいね」

「ますます秘密組織じゃねえか」

…こいつの秘密結社観がどうなってるのかもよく分からない。

押されるがまま、真ん中に座らされる。タイマーの点滅が早くなる。

こうしてまた、私がここにいた記録が増えていく。

### 第3章 第12話 夢追い獺

雨は嫌い。雨にはいい思い出がないから。外に出る気はなくなるけれど出撃がなくなるわけじゃない。私は嫌いな雨をぼんやりと見ている。窓の向こうで、屋根から落ちた雨粒に葉っぱが叩かれて規則正しいリズムで跳ねる。別に面白くはないけど、暇に飽かしてなんとなく眺めていた。

「叢雲ちゃん…」

「どうしたのよ、夕立」

窓に映る姿を見るまでもない。なんならなんで話しかけてきたかも分かっていた。でも、夕立は律儀に応える。

「その…やつぱり、改二——」

「やめなさいって言ったわよね？」

雑に遮っても、今度は黙ってくれなかった。

「でも、夕立も…叢雲ちゃんの力になりたいから——」

「なんでそこまでするのよ」

嬉しいのは本当で、今ここで諦めずに居られるのは吹雪や白露や、夕立のおかげだと思ふ気持ちに嘘はない。だけど

「私には分からない。なんでここまでしてくれるの？」

ただの親切で済む話じゃない。沈むかもしれない。何かあったら、何もなくても。

私には願いがあがる。私のすべてを捨てても手に入れると誓った願いが。でも、夕立にはそんな理由がない。それでいい。そこまでして戦わなくちゃいけない理由なんてないほうが。

「言ったわよね。命を賭けるほどのものがないのは——」

——ああ、そうか

「叢雲…ちゃん…？」

雨は嫌い。どんな天気だって出撃することには変わらない。雨の中釣りに行く気はしないし、洗濯物は乾かない。雨音しかしない景色を見ていると私の声が聞こえる。大っ嫌いな私の。

でも、どんな天気だって楽しそうに出撃する奴も、めんどくさそう

にする奴もいる。行く気がしなくても引つ張り出されるし、洗濯物は油断すればどのみち溜まる。雨音を静かに聞いたことなんていつ振りだっただろう。

少しずつ、気づいたら変わっていた。おじいちゃんが戦わせる責任を背負ったように。そして私が背負ったのは――

――そうか、私はいま――

「幸せ…なんだ…」

受話器を取って、散々押してきた番号を押した。聞きなれた音が途切れて聞きなれた声が聞こえた。でも今までは、電話越しで話すことなんて会いに行く予定を伝えるくらいだった。なのに、こんなことを顔も見ずに伝ええないといけない。…それでいい気がした。

「あのね、おじいちゃん――」

もう恒例になってしまった集まりは一応真面目な出だしで始まる。けど、結局作戦なんて実際の部隊編成と運用に合わせるしかないのだから考えられることは少ない。せいぜいいろいろなパターンを考えておくくらい。

「時雨ってスキあらば私から1番奪おうとしてない？」

「言いがかりだよ。これだとほら、僕が先に動いたほうがいいじゃないか」

「ねえ――」

自然に呼びかけようとしたのに声は震えていた。唾を呑み込んで息を整えてみても、代わりに心臓の鼓動が鼓膜を打つ。

「もう、やめない…?」

「叢雲ちゃん?」

首をかしげる吹雪からは私のどんな顔が見えたのだろうか?ごまかすように急いで息継ぎを終わらせる。

「やっぱり、こんなの…命令違反になるのに、おかしいわよ。だから、もういいじゃない、こんな危ないことしなくても…」

「——私、戻らない。ここに、おじいちゃんと一緒にいるね」

島を奪われたあの日は違う。泣く必要なんてない。

あの日誓った言葉に嘘はない。でも、もっと大切なものが出来た。諦めてもいいと思えるだけのものが。天秤のかけることができない人たちが。

言いたいことはたくさんあった。私は今、幸せなんだというつもりだった。けど、

「そうか」

その声に頷いた。穏やかな、安心したような息遣いが伝わる。おじいちゃんは分かっていたのかもしれない。ただ心配してくれていたのかもしれない。だから、何も言わなかった。

電話を切る。嫌いじゃない雨が途切れて覗いた青空を見上げた。なんてことはない。ただ、夢を見ていただけ。

——ちっぽけで誰も理解してくれない長い永い夢が覚めただけ。

「でも——」

「でももなにも、沈んだらどうしようもないでしょ？あんたたちにあげられる見返りもないしね」

終わらせようとしてるのに——

「だからもういいの」

「どうした？お前らしくねえじゃねえか」

「心配しなくてもあんだとの約束はちゃんと守るわよ。世界を救うつてのはあんだの満足するまで付き合っただけ」

「んなことじゃ——」

「勘違いしないで。別に諦めたわけじゃないわよ。何年後かもっと先か、いつかはチャンスが来るんだから。その時は付き合ってもらおうから」

「…わかったよ」

終わったと思ったのに——

「ほんとにいいの？」

「吹雪…」

なんでそんなこと聞いてくるの？

「だって叢雲ちゃん、帰りたいって言ってたでしょ。私は見たことないけど、叢雲ちゃんにとってすごく大切なのは分かるよ」

「だから、別に今じゃなくても——」

「でも叢雲ちゃんずっと頑張ってたのに。ここに来てから、毎日練習してたの見てたよ」

吹雪は私の手を広げる。ぼろぼろになって硬くなった手のひら。おじいちゃんといたころは、あの島にいたころは、血が出るとおばあちゃんに薬を塗ってもらってまた練習ができるようになるまでを待ち遠しがっていたのに。痛みを耐えて、無力さを突きつけられながら歯を食いしばって振り続けた日々のほうが長くなってできた、血が馴染んだ手。

「ほんとうにいいの…？」

「いいわけ…ないでしょ…」

終わったと思ったのに、終わらせようとしてるのに。

「いいわけないじゃない！あの島に帰りたいって、ずっとずっとそれだけ考えてきたのよ！それだけが私が戦う理由だったのに！」

私はなんでこんなこと叫んでるの？

「あとちよつとなのに、目の前にあるのに！いつか、なんて思えるわけないじゃない！」

「こんなの、ただのわがまま。だから叫んだところで答えは変わらない。い。」

「でも、できるわけないじゃない！私だけで良かったはずなのに、なんであんなたちがいるのよ！なんで助けてくれるのよ！」

——違う。こんなことを言いたいんじゃない。諦めてもいいって思えるくらい

「全部無くなってもいいなんて、あの島さえ取り戻せばいいなんて、思えるわけないじゃない！」

私は幸せだって、ありがとうって、言いたいのに。言わなきゃいけないのに。

「だからもう諦めさせてよ！」

ぐちやぐちやになった頭で、気づけば逃げ出していた。

「叢雲ちゃん！」

吹雪が叢雲の後を追うのを眺めた。それ以外、何もすることはない。

「日向、どうするの？」

隣で伊勢が体を伸ばす。答えが分かっているのにわざわざ聞いてくるのは伊勢のいいところであり悪いところである。どうするものにも、とぼやきながら立ち上がった。

「聞いていた通りだ。私達の勝手で悪いが、これで解散だ。通常任務で共に戦場に立つときはよろしく頼む」

「ちよつと待てよ！」

「深雪ちゃんっ——」

白雪が深雪の袖を引っ張るが、それも控えめだ。号令に従ったのは、刀を携えた者だけ。

「なんでそんなこと言えるんだよ！だってあいつ、泣いてたじゃんか！叢雲は日向さんたちのこと、仲間って言ってた！なのになんて——」

「仲間だからな」

理由はそれだけだ。互いの願いを確かめたときから、仲間になった。

「互いに協力する、そういう約束だ。それは契約であり、言葉の裏を読んでまで勝手な事はしない。それが仲間であり、私達の信頼関係だ」

「なんだよ、それ……」

理解できないのは当然だ。あり方の根本が違うのだから。だから腰を下ろす。

「だが君達は友達だ。友達とは勝手になるものだろうか？」

叢雲がそれを手に入れたことに安堵も嬉しさもある。でもこの感情の一番は悔しさなのだろう。

「だったら勝手にすればいい」

### 第3章 第13話 Meia!

気が付けば屋上で膝を抱えていた。港と海が一番よく見える場所。人工的なものが多くて、どうしても島の山から見た景色と比べてしまう。でもこれが、これから私が見る世界だ。そう何度も言い聞かしたはずなのに。

「なんで——」

いつの間にか濡れていた目元を拭う。私は幸せなんだと、やつぱり思う。こんな私を思ってくれる人がたくさんいて、だからこそ平気なふりをしないとイケなかった。諦めることに後悔なんてほんとなにし、そう伝えたかった。だけど、現実はどうして1人で不貞腐れている。

ずっとあこがれていた。吹雪のどんなに辛くても笑っている強さに、悲しみに気づかないふりをして笑いかけられるやさしさに。

私はできなかつたから。誰のせいでもない不幸を振りかざして、1人で傷ついて傷つけた。謝らなくちゃいけない人も、もう謝れない人もたくさんいる。こんなにたくさん失敗しても、変われなかつた。

私はやつぱり私が嫌い、みんなも私が嫌いだったらしい。

こんな私に愛想つかしてくれば、それでいい。私のために馬鹿な作戦をやらうとなんてしなくなれば元通りだ。

…そんなことも、本気で思えない、情けない私。

自己嫌悪が引っ込んでくれるまで、しばらくただこうしていたいのに——

「叢雲ちゃん!」

吹雪型はプライバシーもなければデリカシーもないみたい。

「ここにいたんだ。私もここに好きなんだ」

私の気など知らないで私を追い抜き、私と同じ景色を見下ろす。

「きれいだよね」

うつすらと浮かんだ汗が振り返った勢いで弾け、強い日差しを反射した。吹雪はまっすぐに私を見る。

「叢雲ちゃん」

——ずっと

「私は諦めないよ」

——ずっとあこがれていた。

「だって、叢雲ちゃんに笑ってほしいから」

どんなに辛くても笑っている強さに、悲しみに気づかないふりをして笑いかけられるやさしさに。それが吹雪の強さ——だと思っていたから。

「叢雲ちゃんが頑張ってるから、私は力になりたいんだ」

でも、吹雪は違った。

泣きたかった。気づかないふりなんてしたくなかった。

「私は叢雲ちゃんと、みんなと一緒にいたい。誰が無理だって言っても、諦めたくない、ううん——」

優しきで作った笑顔なんかじゃなく、本当に笑いたかったんだ。本当に笑ってほしかったんだ。

「絶対諦めない」

だから、頑張ったんだ。ずっと、私が追いつけないくらい、ずっと

「だから叢雲ちゃん、力を貸して」

手が差し伸べられる。小さくて暖かくて、力強い手が。

これは、ずっと諦めてきた吹雪が頑張って、闘って、ようやく手に入れたわがままで。だから私の気持ちなんでもので、幸せなんて理由で諦めさせてくれないんだ。

「だめ…かな…?」

首を傾げた吹雪から、別れの朝が覗いた。触れた指から小さな震えが伝わる。

——怖いんだ

手を伸ばす、ただそれだけなのに。私が小さな島を希うように、吹雪にとってこれは、ようやく届きそうな、なんでもないはずの願い。

伸ばすことすらできなかった手を

伸ばしても掴むことができなかった手を

それでも伸ばしてくれた手を、私は握る。それだけで、立ち上がる

には十分だった。

「あんた、強くなったのね…」

「うん！」

その笑顔まで私が届くのはいつになるのだろう。だって私は

「ありがと…」

こんなことも、目をそらさないと云えないのだから。でも、いつか

そう。あこがれてしまったのだから、私も諦めるわけにいかない  
じゃない。

「叢雲ちゃん、早くみんなのところに戻ろ！」

「——んっ」

ためらう私を不思議そうに見る吹雪はやっぱりデリカシーつても  
のがない。どんな顔をして会えばいいのだろう。ここでのこのこ戻  
るのは、なんだかとてもかっこ悪いような——

そんなこと考えている私に笑えてくる。

「いまさらか…」

引かれて踏み出した一步は想像よりずっと軽かった。

そう。私は弱くて情けなくてかっこ悪くて、自分勝手に誰かを傷つ  
ける。

私が私を好きになれるのはきつとずっと先だ。

でも、諦めなかったから——諦めさせてくれなかったから

これから始まるのは、私たちの奇跡の物語——

## 第4章 第1話 月

これは、これから始まる長い長い闘いの最初の軌跡――

「むらくもちゃーん!」

「なによ?」

吹雪が意味もなくご機嫌なのはいつものことだけど、今日は輪にかけて声大きい。夜戦演習明けの私の気分などお構いなし。

「いい話があるんだ」

どうした? マルチ商法にでも引っかかったの?

「叢雲ちゃんも驚くと思うなー」

「だつたらさつさと言いなさいよ」

「まあまあ、ちよつと待ってよ」

しばいてやろうか。だいたい、ちよつともなにも、もうすぐこの話は終わり。私が夜勤明けに吹雪の相手をしているのはもう恒例になってしまっている、深雪曰くの悪だくみのため。

あの日、吹雪の手を掴んだ後の醜態は思い出したくもない。でも、こうして私はここにいる。叶わないと思っていた未来の目の前に。

吹雪だけじゃない。この扉の向こうに、一緒に戦ってくれる人たちがいる。それは私には抱えきれないほどの幸せだ。

「Hey! ブツキー! 遅いデスヨー!」

――ん?

向こうにはやけにハイテンションな奴が待っていた。

「金剛さん! もう来ていたんですね!」

「ブツキーに呼ばればたとえ火の中水の中デース!」

…なんだこれ?

吹雪は平然と話しているけど、私は何が何だか分からない。ふぶきが…よんだ?

「えへへ、驚いた?」

固まっている私を嬉しそうに見つめる吹雪。あのしばきたくなる

だらしない笑顔だ。驚いたとかそんなんじゃない。それに吹雪の様子を見るに嫌な予感がした。

「驚くのはまだ早いよ！」

ほら、やつぱり。

「じゃーん！司令官でーす！」

申し訳なさそうに座る司令官の姿に、さすがに思考が停止した。

「ほらね、おどろいた—— パシンツ

で、しばいた。

「え？むらくもちゃ——」

首を絞めて黙らせる。

「このっ、あんたあつ、ゲホコボっうえっう——」

吐き気がした。空気を通す仕事を忘れた喉を深呼吸で無理矢理開く。落ち着け、落ち着け私。そう、ゆっくり息を吸って…吐いて。うん、そうそう。大丈夫。

——まだ怒りは残ってる！

「こんの！ばかやろうがつ！」

「ふぎゃん！」

吹雪を投げ飛ばして上にのしかかる。起き上がることを許さずにマウントポジション。スムーズに動けたのは日々の鍛錬のおかげ。

「なにしれつと裏切ってるのよ！あんたみたいなの、あんたみたいなポンコツを信じた私がバカだった——！」

「WOW！バイオレンスはダメデース！」

後ろから羽交い絞めにされて振り上げた腕を掴まれる。こいつも吹雪の一味か！

…戦艦との体格差では抵抗も虚しく吊り上げられる。

「ゴカイデース！ゴカイデースヨー！」

ゴカイ…？なにそれ？

「叢雲、落ち着いて聞いてほしいんだが」

司令官が、気持ちはよくわかる、と全身で表現しながら近づいてきた。

「俺はお前たちを止める気はないぞ」

——えっと、それはどうゆう…

「吹雪から聞いたが、勝手なことをされるくらいなら作戦に組み込まだほうがよっぽどましだ」

どうせやめろと言っても聞かないだろう、と吹雪を一瞥した司令官はぼやく。

「あ…そう、なの…」

気が抜けて周りを見回してみると、先に集合していたみんなが神妙な顔をして目線を私から逸らしている。というか、私以外知っていたのか。

だったら止めなさいよ。1人醜態をさらしてしまった恨みが募ってきたが、この様子からして

「うう…ひどいよ…」

倒れたままさめざめと泣くこいつに口止めされていたのだろう。いや、なおさら止めてあげなさいよ。こうなることは分かってたでしょうに。

仕方なく吹雪を引っ張り上げる。

「でもいいの？」

この頼りなさそうな司令官に尋ねてみる。命令違反を企てていたことのお咎めがないどころか全面的に協力までしてくれるらしい。戦力はかなり厳しいと言っていたのに。

「褒められたことではないけどな。だが、戦うのは君達だ。君の戦う理由がそれだというのなら俺は頑張つてやりくりするしかないさ」

「Hey Hey、サムライガール！私のテートクの懐の広さに感謝するデース！」

アンタはアンタでうるさいわね。ひとまず無視しとこう。

「よくそれで司令官が務まるわね」

「む、叢雲ちゃん！」

吹雪が止めにくる。たしかに素直に感謝するべきところだったかもしれない。

「まあ、俺もそう思うよ。ただ、1つ条件があつてだな」

身構える私に司令官は苦笑をさらに深める。

「元帥にはちゃんと話してこい」

「…おじいちゃんに？」

事の経緯は話してはいるんだけど…

「どうせ会えてはいないだろう？ 大事なことなんだからきちんと顔を合わせたらどうだ」

確かにしばらく会えてないけど、どうしてそんなことを知ってるのだろう。

「君は結構分かりやすいからな」

吹雪ほどじゃないが、と一応のフォローを入れた後、司令官は少しの間を開ける。

「あと、元帥にこの作戦を行うことを伝えてもらえるか助かる。やりわりとでいいから…」

「し、司令官？」

「テートクー！そこは命令違反の責任は俺がとる、ってシーンじゃないんですか!? やっぱりテートクはヤサオトコデース！」

「事前確認の何が悪い！ だいたい俺は目をつけられてるんだからそうそう勝手な真似はできん！」

この司令官、前になにかやらかしたのか？ まあ、よく考えたらおじいちゃんには命令違反するって言ってたようなものだから、組織的に動く分には止められもしいと思うけど。

なんて言う前に騒がしきは広がって、いつもの慣れた光景に戻っていった。

「私、やっぱりあの島に帰りたい」

あの時と同じように大切な人たちのために、大切な人たちのおかげであの時とは違う言葉を告げた。

「また心配かけちゃうね」

「そうか」

おじいちゃんはその時のように、いつものように静かに答えた。

「叢雲」

湯呑を机に置く音がして、私と目が合う。

「いい友人を持ったな」

友人：「そうか、友達、か…」

騒がしくてだらしなくて人の話なんて聞かなくて、そんな困った奴らだけど——

「うん！」

友達って響きがなんだか嬉しい。

だから、私はまだ帰れない。

「まだやらなくちゃいけないことがあるの。吹雪がヨーロッパに行ってみたって英語の勉強してたし」

行先はドイツのはずなんだけど。日向や伊勢の相手もしないといけないし、そうそう、世界だって救わなきゃいけない。やることはたくさんある。のんびりしている時間なんてないくらい。

私はもうたくさん背負ってしまった。抱え込んだものを下ろそうとするたびにまた増えて、誰かに引き受けてもらって、そうやってずっと進んでいくんだ。

おじいちゃんはゆっくりと頷く。

「月に叢雲花に風、という言葉がある」

「なにそれ？」

私の名前…

余計な言葉は知っているのにな、とおじいちゃんは嘆息する。いいからもったいぶらずに教えなさいよ。

「綺麗な月を雲が隠す、つまりは良いことには邪魔が入るという意味だ。無粋の意味でも使われるな。このように叢雲とはあまり良い意味でつかわれる言葉ではない。そのような名前を持ったお前には大変な苦難が待っているんじゃないかと——」

「なにそれ」

急に何を言い出すかと思ったら。

「そんなくだらない心配してたの？名前を決められたらたまったものじゃないわよ」

「俺達は心配するくらいしかできないからな。くだらない心配もさせ

てくれ」

おれたち、か。ずっと見守ってくれていたのだろうか。私が気づかなかっただけで、そんな迷信も気にしてしまうほど。私があつたまま自分勝手でも。

でも、もう大丈夫。

「変なこと考えないでどっしり構えときなさいよ。なにがあつたつて勝つてやるわよ」

困難の象徴のような名を冠した彼女が私には想像の出来ない苦痛の中で、それでも前に進んだように。私の手を取ってくれたように。「まだまだ時間はかかるかもしれないけど。私は絶対に負けないから」

私にはおじいちゃんが背負ったものは分からない。でも、この海を取り戻せたときにすべて下ろせるのなら、おろせていたのなら――

「一緒に帰ろ、おじいちゃん」

おじいちゃんは何にも言わず頷く。口約束にもならない、小さな約束。

玄関の先で顔を合わせる。ようやく馴染んだこの家から出ていく理由なんて本当はもうないのだろう。それでも、もう迷うことはない。

誰にも理解されない孤独な夢は背を預ける仲間を得て、一緒に進んでくれる友達と一緒にあつた。

「また来るね」

だから私は別れの言葉を告げる。ここに迎えに来ることを約束して。

バス停のベンチに座り見上げると月が見えた。足元が明るいと思つたら今日は満月だ。

手をかざして丸い月を隠してみる。

「無粋……か」

私が艦娘になったことも、島を失ったことも、いろいろな人を傷つ

けたことさえも無粋なんて言葉になるときが来るのだろうか。

顔に落としていた影を消すように辺りが暗くなる。手を下げても満月は黒い雲に覆われていった。

なんだ――

同じ名前を持つせいでひいき目なだけかもしれないけど、雲の隙間からこぼれる月明かりは

「別に悪くないじゃない」

そう思えただけで、なんだか嬉しくなって脚をぶらぶらと振ってしまったり。

## 第4章 第2話 風船

「む、叢雲ちゃん…！」

夜も遅くに帰ってきたら意外なことに迎えがいた。もちろん吹雪たちではない。私の姉妹艦はどうせぐつすりおやすみ中だ。

「どうしたのよ」

夕立は妙に緊張しているというか、怯えているみたいに見えた。私、そんなに怖がられること…してたわね。

思い返してみると夕立には初対面から強く当たりすぎたような…

「その…やっぱり、改二…ぼい…」

とぎれとぎれでだんだん小さくなっていく声でも聞き取れたのは何が言いたいのかももう分かっていたから。

「あのね…」

夕立に少し優しくしようと思った矢先だけど。

私は夕立が好きだ。頑張っているし、ちよつと能天気なところもかわい。でも、それとこれとは別。いや、別にできないから私は諫める。

「何度も言ってるでしょ？あんなに危ない橋を渡る必要ないじゃない」

「でも——」

夕立は息を吸い込む。今度ははっきりと伝えるために。

「やっぱり夕立も強くなりた。白露ちゃんたちに心配かけたくないし、吹雪ちゃんや…叢雲ちゃんを助けてあげられるようになりたい——っぼい…」

恥ずかしそうに顔を下げた夕立を見て、ようやく分かった。夕立は確かに幸せなのだろう。命を賭けて戦うことなど考えられないくらい。でも、幸せだからこそ戦いたいのだ。今の幸せを守るために。幸せを与えてくれた人たちのために。

「…分かったわよ」

そんな人たちの中に私を入れてくれたと思うのはうぬぼれでなければいいけど。

「正直、私だってよく分かってないのよ。それでいいなら、あんたが無茶しないなら、付き合っただけあげるわよ」

「叢雲ちゃん!」

全力で往復するしっぽが見える気がするほど表情が明るくなった。だから、そんなに期待しないでよ。

「てか、吹雪には頼まないの?」

「頼んでみたっぽい!」

そりやそうか。でもこのリアクションは…

「吹雪ちゃん、頑張ろうとしか言ってくれないっぽい」

「ま、あいつに根性論以外期待するのは酷な話ね」

論理的な解説をする吹雪など想像できない。とはいっても、私も答えを持っていないことは変わりない。それでもここは違いを見せておかないと。

「そうね、私から言えることがあるなら——」

「ぽい!」

「そのぽいぽいってのをやめなさい!自信もってはきはきとするところからよ!」

「…すっごく根性論っぽい!」

「で、で、どうするの?」

「ま、地道に訓練していくしかないんじゃない」

「そっか!…叢雲ちゃんも分かんないか!」

露骨にがっかりする吹雪のほっぺをつねってやる。

「吹雪ちゃんと叢雲ちゃんは改二になったときどんな感じだったっぽい?」

不毛な攻防を見かねた夕立に割って入られた。どんな感じ、ねえ…そんなのが参考になるとも思えないけど。

「んーとね、なんかこう、がんばろう!みたいな…?」

「なによそれ」

単純すぎるといっつか、それを吹雪らしいといっつか。

「私をもっと強くないと、って。みんなを守らなきゃって。でも

どうしたらいいか分かんないからがんばろうって思ったらなんかふわってなった、みたいなの？」

首を傾げられても私も夕立も首を傾げ返すしかない。

「どっちにしる当てにならないわね。どう考えても私とは違うし」

「叢雲ちゃんはどんななの？」

「なんでもいいでしょ」

しつこく聞いてくるけど、こんな心情の吐露を恥ずかしいとは思わないのかしら…思わないでしょうね…

「…ムカついていたのよ」

観念してつぶやくと2人も一歩引いて身構えた。吹雪は散々伸ばされたほっぺを重点防御する。うん、これは私の日ごろの行いを反省するべきところだ。

「あんたたちじゃないわよ」

「な、なにに…？」

深海棲艦だったり同僚だったり、なにより私自身にだったり。要約するなら

「いろいろよ」

それ以上語るつもりはないと話を終わらせる。参考にならないことは分かっただろうし。

夕立は再び頭をひねる。夕立は私とは違う。投げやりな感情をぶつけたあの時の私とは。夕立は自分の意思で、自分じゃない人たちのために改二を求めている。そんな優しさは私にはないもので、託された想いを背負った吹雪ともまた違うものなのだろう。だから私たちには夕立に教えられることなどないのかもしれない。

「まあ、なににせよ練度を上げないとね」

そもそもどうすれば改二になれるのかなんて分かっていない。改二になれる艦娘は数えるほどしかいなくて、改二が確認されてからずっとあり続けていた疑問だ。私たちがやろうとしているのはそういう問題だ。

「何度も言うけど頼らないのが第一よ。自由に使えようが、ね」

## 第4章 第3話 風に押されて

「やーやー、叢雲」

屋上で寝転んでぼけっとしてしていると無遠慮に声をかけられた。顔を上げる(?)とさかさまの白露が映った。

「なによ」

「こんなところで何してんだろと思ってさ」

断りもなく隣であぐらを組んだ。はしたない。

「どうよ?夕立とはうまく行ってる?」

「なんとも、って感じね」

その話か。面倒見のいい白露としては気になるところなのは分かるが、良い返事は返せない。

「午後からブリーフィングだって。早めにご飯食べといたら?」

「そうだったかしら」

「私たちだけね。結構やりくりが大変みたいだから作戦はちゃんと確認しとかないとね」

司令官のお墨付きがもらえたところで本来は必要ない作戦であることには変わらないし、流石に関係ない艦娘を巻き込むわけにはいかない。

いや、そもそも巻き込みたくないと考えることが傲慢なのかもしれない。だってこうして隣にいるのだから。

「ねえ——」

なんとなく

「なんであんたは助けしてくれるのよ」

ほんとうになんとなく口に出してみる。そこに疑念も遠慮も、不思議なこと感謝すらなかった。

どんな答えの待つ気もなかったが、白露は脚をそろえて膝を抱え込む。はしたなさはなくなったが、このかつこも意外と無防備なんじゃないかとか、私も気を付けようとか、そんなことが腑抜けた頭にめぐる。

「…ごめんね」

白露の小さなつぶやきがそんなどうでもいい思考に水を差す。

「なによ…っ」

思いがけない言葉に驚きはした。驚いてはいるけれど、返す声はさつきと変わらない。身構えるでもなく予想するでもなく、なんとなく先を促す。意識は青い空の中にあるような、心地よい無気力さ。

「私じゃ夕立の助けになってあげられないから。でも、叢雲や吹雪だったら何とかしてくれるんじゃないかって…」

ゆつくりと漏れ出るような声は、白露には似合わないな、なんて。

「私が協力したら叢雲は夕立を助けてくれるかもって…」

そんなこと、考えてたんだ…

「嫌な子だ、わたし…」

「別にいいじゃない」

私には白露のうつむくわけがよく分からない。だって

「そんなものでしょ？交換条件なんて、分かりやすくもいいじゃない」  
私たちの部隊が結んだ単純な契約。信頼でもない利害関係だけど、それは私が戦う意味で、戦い続けてきた理由だ。あんな連中と仲良くやるなんてなんだか寒気がする。

でも、違うのね…

白露にとつて、そんな取引なんて考えたことすら否定したくなるほど卑怯なこと。だって、困っている人を助けるのは当たり前のことなんだから。そんな子だってことだけは分かるから。

「あんたは夕立と関係なく私を手伝ってくれたわよ」

私なりに頑張って言葉を紡ぐ。

「あんたがいなくても私は夕立の面倒を見てあげたし」

…それはどうなのかしら？言い切ったものの、不安になる。私はまだそこまで私を信じることができない、けど。

「それでいいじゃない」

「…うん」

白露が少しでも笑って頷いてくれたからいいとする。もう一度青い空を見つめる。そろそろ太陽が視界に入ってきて見上げられなくなる空を。

ひとつだけ分かったことがある。この感情と無気力の正体。助け合うことも一緒にいることも、それに感謝することも当たり前のことだから。そんな、白露にとって、吹雪たちにとっての日常になじんできてしまった私。

でも、彼女たちのようにはなれないから。いつか日常になつてしまふまでは、この私だけが気づける幸せをかみしめていよう。

「ねえ」

でも、代わりにちよつとした疑問も出てくる。

「1番艦つてそんなに大事なものの？」

私にとってはどうでもいいけど、白露にとっては潰されそうなほどの罪悪感なのだろう。言わなければすむ話なのに、黙っていることに耐えられないほどの。だけどそれは夕立の、血のつながらない妹のためで。

「あんといい吹雪といい」

がんばるのに、姉だから、なんて理由になるのだろうか？…まあ、吹雪はうるさいだけだけど。

「私、ひとりっ子で、ずっと妹欲しかったんだ。だから1番艦になったときはうれしくてさ」

白露はまた膝を強く抱え込む。

「でも、みんなすごいのに私にはなんにもなくて。結局1番艦つてことしかないから…それだけでも頑張りたいんだ」

「私は、あんたが白露で良かったと思う」

私はようやく体を起こす。

「時雨や夕立だつてそう思ってるんじゃない？」

こんなこと、顔を見られながらじゃ言えないから。

「ありがと」

白露がどんな顔をしたのか分からないけど

「叢雲も妹ができたら分かると思うよ」

その言葉だけは看過できない。それじゃまるで私が世話されてるみたいじゃない。あの吹雪たちに…

「もうすでにできの悪い妹4人抱えてるようなものなんだけど」

ようやく目があつて笑みをかわす。

本当に妹、吹雪型の6番艦がくればまたちがうのだろうか。そんな不確定な未来も楽しみになつてくる。

「ひとまずは夕立の面倒を見ないといけないわね」

白露が眉をよせる。

「ちよつと、夕立の世話を一番みるのは私だからね」

…まったく、どいつもこいつも

「めんどくさいわね…」

## 第4章 第4話 劣等星

もうすぐ大規模作戦が始まろうというところ、私は久しぶりに司令官に呼ばれた。

「叢雲、言うまでもないが君達は本来の作戦とは外れた動きになる。こちらでも極力支援はするが、危険が確実に大きくはなる」

「…やめろって言いたいのか？」

「いや、その是非は今更話すつもりはない。その先のことだ」

…その先？

「覚悟はしておいてくれ」

——ああ、そういうことか。

深海棲艦が現れた原因も、なになのかも分かっていない。だが、はつきりしている行動原理が一つだけある。それが人工物を狙う性質。船や港を破壊するので結果的に人間にも直接被害が及ぶが、例えば海に投げ出された人を積極的に襲う事例は確認されていない。…襲われたなら報告しようがないだけかもしれないけれど。逆に、人のいない船や施設は関係なく破壊されている。つまり、あの島だって…「分かってるわよ」

それでも、元の形なんて何もなければかもしれないけれど、あの生活に戻ってくるわけじゃないけれど、それでも私は取り戻したい。

「わがままだったってことも、分かってる」

「だったら何も言うことはない。最終的な編成はその時になるまで決められない。なにかと忙しい駆逐艦中心だからな。万全の準備をしておいてくれ」

そんなこと、言われるまでもない。言いたかったことは本当にそれだけのようで、私は背を向けた。

「これは俺の我儘なんだろうが——」

ドアノブに手をかけながら振り返る。

「沈むなよ」

「…それこそ言われるまでもないわよ」

ちよっただけ乱暴にドアを閉めた。

「我儘か…あなたらしいな」

長門は中身のない湯呑に手を伸ばすと提督と目が合った。

「悪いな、また君達を巻き込んで」

「それこそ余計な言葉だ。私とてこの鎮守府の一員だ。もちろん叢雲も」

だから提督に従うことにも、今回の作戦についても異論はないと言外に告げた。

「誰も沈ませない、か…」

提督の言葉を口の中で思い起こす。提督はそう言う以外になかったのだろう。長門とは違う戦場を生き抜いて、生き残ったからこそ自らの命すら諦めた艦娘を救うには。およそ不可能と思われる誓いを提督は守った。今のところは。

「俺もここまで優柔不断だったとは思わなかったよ」

漏れ出ていたのか、提督は苦笑した。

沈ませたくないのであれば、余計な事をせず与えられた作戦を遂行していれば良かった。もちろんそれで安全とは言えないが、戦線を広げて戦力を分散させることに比べればよっぽど堅実だろう。

「これで良いのだと、私は思う」

だが、現実はその簡単ではないのだろう。

「沈まないとは、ただ生きていればいいということではないのだから」

それだけで済むのなら、金剛は、鳳翔は、吹雪はその言葉を求めない。どしなかつただろう。生きるために捨ててしまえば、自分が自分でいられない。そんなものが確かにあるから、戦わなくてはいけない。

「それを教えてくれたのはあなただ」

かつて仲間を見捨てる決断をしたことが間違いだとは今でも思っていない。その時の長門にはそれしかできなかつたのだから。

「あなたがいたから私は仲間を失わずに済んだ。ならば今度はあなたが何も捨てないために力になろう」

それが長門の、この鎮守府の答えだ。

「…ありがとう」

笑みを向けられたところで申し訳ないが、そろそろ秘書艦の仕事として仕分けた書類を部屋の隅から持ち上げる。崩さないように慎重に提督の前に運ぶと机がたわんだ気がした。大規模作戦の前のためただでさえ煩雑な事務仕事で、作戦変更によりさらにややこしいことになってる。

「すまないが、こればかりは私ではどうしようもない」

提督のため息を背に、逃げるようにお茶を淹れにいった。

「むーらくーもちゃん」

「…なによ」

執務室から出ると吹雪に呼び止められた。まあ別に大した用事なんてないのは分かっている。

「ごはん食べに行こうよ」

想像に輪をかけて大したことじゃなかった。まあもう日も落ちたし断る理由もない。

「みんなは？」

「えっと、深雪ちゃんが遠征で——」

同じ部屋の姉妹は出払ったみたい。駆逐艦はみんなそれぞれ忙しい。…私だって普段は結構忙しい。

だから2人しかいないのだから珍しくもないわけで、食堂で夜ご飯を食べて、私の日替わり定食のカツを物欲しげに見るものだから一切れあげたりした。そんな何でもない夜だと、大規模作戦がもうすぐだと忘れそうになる。ふと見上げた夜空に浮かぶ月は少し欠けていた。

「ねーねー」

明かりの消えた布団の頭上から声が降ってきた。

「もう寝なさいよ」

夜更かしすると寝坊するんだから。

「がんばろうね」

「…言われるまでもないわよ」

寝返りをうった。カーテンの隙間から差し込んだ月明かりだけではなにも見えない。

「私ね、ずっと強くなりたかったんだ」

「知ってたわよ」

別れたあの朝から。でも吹雪は、きつともつと前から、ずっと。

「私がここにいるのはみんなのおかげだから、強くなるなくっちゃって、みんなの役にたたくっちゃって、ずっと思ってたんだ」

結局私には、吹雪のことなんて分からない。私には誰かに託されたものも、誰かのために戦ったこともないのだから。でも確かに救われたんだ。吹雪を助けた、私の知らない誰かに。そんな誰かが間違っていないかったと証明したかった吹雪に。

「…ありが——」

「ありがと、叢雲ちゃん」

息を吸い込んでいるせいでさえぎられてしまった。

「私、少し変わった気がする」

私はなにもできていないのに、感謝を伝えないといけないのは私なのに。先に言われるとなんだかいびつらしくて黙ってしまうのは、私が成長していない証拠なのかもしれない。

「この作戦で、もつと変わるのかな？」

「そんなの——」

「分かんないわよ」

私は変わったのかもわかってないのに、なんであの島に戻りたいのかも本当は分かかっていないかもしれないのに。この先に何かがあるのかなんてわかるはずがないじゃない。だけど、だから。

「それを確かめに行くんじゃない」

「そうだね」

真つ暗な中でも、笑った吹雪が見えた気がした。

そう。願いの先にあるものを確かめるために、私たちは戦うんだ。

### 閑話③

「て・い・と・く」

いかげんに耐えがたくなり、掃除を終えたはたきで机をたたいた。目の前で埃が舞つても、当の本人はめんどくささを隠そうとせず椅子にますます沈みこむだけだった。目の前にごつそりとたまつた仕事からはますます遠ざかった。

「昨日の夜はほとんど終わっていたと三隈から聞いていましたのに」

「いやいやくまのん、そんなこと言つたつてさー」

「口を動かす暇があつたら頭を動かしてくださいさらない？」

掃除用具を片付けながら、聞かせるためにため息をつく。いつものことだからあきれるといった感情もわいてこないのが実際のところである。そしてその心情はもちろん相手も分かっているのだから効果は薄い。

どうしたものか、と思索しながら来客用ソファに座る。提督が頭を抱えてもだえる様子を眺めながらティータイムにするのがもう習慣になっている。

「今日一日どこで遊んでいましたの？」

もう日は沈もうとしているのに。

「明日にでも大規模作戦なのでしょう？こんなことではなんの戦果もあげられませんわよ」

「ああー…そのことだけどねー」

「てーとくー」

扉が吹き飛ばされそうな勢いで開いた。

「鈴谷!? いったいなに——」

「提督! どーゆーこと!?!」

思わず壁を背に着くまで退いた熊野を無視して鈴谷は、ドアを開けた勢いのまま提督の机をたたく。

「そんな大声出さなくてもいいじゃんかよー」

「今回の作戦に出ないって、マジで言つてんの!?!」

「——それ、本当ですか?」

思わず立ち上がった、気づけば提督の前に来ていた。だが肝心の提督は2人の様子を見ても少し体を持ち上げただけだった。

「ほんとほんと。別にあたしらが参加しようがしなكارうが大した影響ないしさ」

「そんなこと言つてつから鈴谷たち、田舎暮らしの弱小鎮守府ってバカにされるんじゃない〜!」

「頑張つてもここが田舎なのは変わらないけどね〜」

「…それはごもつともですわね」

鈴谷の言い分はともかく、だ。

「どういふことか、説明していただけます?」

「どうもこうも、この鎮守府は輸送部隊なんだからさ。前線で戦うなんてナンセンスでしょうよ。後方支援も大事な仕事だよ」

提督の言い分はもつともだ。だが、

「いいかげんに本当のことをおっしゃつたらいいかがですか」

そもそも輸送中心の方向性からして提督の方針で、ただの出世欲のなさとか怠惰さとかとは違う気がしていた。隣の鈴谷も口を挟まず提督を見ているが、当の提督は肩をすくめるだけだった。

「だって戦つたら危ないじゃん。そんなんよそこに任せてのんびりしとけばいいよ。大規模作戦つて言つたつて勝手に何とかしてくれるつて」

へらへらと手を振る提督を見ても、驚きはしなかった。意識をせずつともどこかで分かつていたのだろう。ずっと見てきたのだから。

かつて艦娘だったというこの提督は理解している。いくら戦い方が確立されていても存在する、戦いが持つ危険を。もたらす恐怖を。だから、そこから遠ざけようとしている。意識せずに理解していた彼女の姿を意識した途端、同時に沈んでいたこの感情を理解した。

「提督…」

小さく小さく、重い声。耳の奥で齒が軋む音が激んだ。

「あなたつて人は…」

こわばつた腕が全力で握られていると気づいたときにはすでに振り上げ――

パンツ

——られる前に、頬を打つ音が響いた。

「なめんなー！」

「鈴谷…」

提督は赤くなっていく頬を抑えることもせず茫然としていた。

「そりや鈴谷たちだつて沈みたくなんてないよ。当たり前じゃん！でも、みんなが必死に戦ってるのに何もしないでへらへら笑ってられるほど情けなくない！鈴谷たちだつて、この国を守るために頑張ってきたのに、それを否定すんな！提督が鈴谷たちを…提督の艦隊を馬鹿にすんな！」

両手が机に叩きつけられた音でようやく提督は動き出した。

「…そつか。もう…ちがうんだな…」

打たれた痛みによく手を当て、吐息のような声が出た。

「ごめん」

パシツと両の頬が叩かれる。ようやく提督がこちらを見てくれた気がした。

「これでいいんだつて、みんなのことちゃんと知ろうとしてなかった。叩かれないと分からない、情けない提督だけどき。頑張ってみる…だからお願い——」

目をあわせた。ここにはいない艦娘の分まで。

「必ず、生きて帰ってきて——」

「はあ？」

熊野は熊野で、鈴谷の声にかき消されないほどのため息が出た。ついでに肩をすくめる。

「え…だつて…」

困惑する提督は初めて見た。鈴谷と顔をあわせると、たぶん2人で同じ顔をしていた。結局この提督は、大事なところが分かってない。

「そうじゃないっしょ」

「もっと期待していただいてよろしくつてよ」

もう時間がないのだから、さっさと背を向ける。

「すずやん、くまのん…」

扉に手をかけると、声が聞こえた。

「深海棲艦なんざぶっ飛ばしてこい！」

振り返るまでもなく、片手をあげて応える。

「承りましてよ」

「おう！鈴谷たちにおまかせ！」

「まったく…提督には困ったものですわね」

「まーねー」

鈴谷と愚痴を言いながら部屋に帰る、仕事が終わったあとの帰り道。違うのはいつもよりちよつと日が高いことと、まだやることが残っていること。

だらしなくていいかげんで隙があるとセクハラをしてきて、臆病で過保護な提督。だけど、どうしようもなくそんな提督が好きだった。初出撃のときに優しく背中を押してくれたときから。初めての戦いで傷ついた姿に、抱きつき涙を流してくれたそのときから。

「てか熊野さー、グーで殴ろうとしてたっしょ」

「…な、なにをおっしゃるんですの!?わたくしがそんな野蛮なことをするわけが——」

「もがみんもだし、三隈もわりとごぶし使うよね。わりとヤバイと思うんだけどー」

「だからー違うと言っているでしょう!？」

逃げる鈴谷を追いかける。部屋までの少しばかりの追いかけてこ。今まで提督が動いていなかった分、急いで作戦の準備を整えないといけない。三隈と最上を引っ張ってきて明日までに間に合うとは思えないが、できるだけ早く終わらせよう。なんせ、ようやく提督が戦うと言ってくれたのだから。ようやく守ってもらっただけじゃない自分たちになれたのだから。

一人になった部屋でゆっくりと天井を見上げた。引き出しの奥に手を伸ばすが、指先に当たる感触だけを確かめて、透明な息を吐きだ

す。

ずっと守っているつもりだった。安全なところにいさせるのが提督になった役目だと思っていた。でももう――

「……りっぱになつたな」

思わず口にした言葉に苦笑する。もしかしたら初めから、守る必要なんてなかったのかもしれない。ずっと傷つきたくなくて、ずっとみんなを見ようとしなかったから、いまさら確かめる方法なんてないけど。

いまからできるのは彼女たちを信じることだけ。何も分からないまま艦娘となった自分とは違う、艦娘であることを誇れる彼女たちを。

重い腰をあげ、数歩先のゴミ箱に手を落とす。乱雑に丸められた紙の束を指先で挟んで持ち上げた。ゆっくりと広げると海図が見えた。

それはただただ平凡な作戦計画で。それだけでしかない。どれだけ時間をかけて考えたところで、みんなを守る保証も自信も出て来やしない。

紙に新たなしわが刻まれる。力が入り震える手と紙に頭をうずめる。あの後輩のような判断力があれば、あの先輩のような決断力があれば、みんなになにかしてあげられたのだろうか。でも現実にいるのは情けない、もう艦装を背負えない何の力にもなれない提督。

それでも、進んでいくしかない。祈ることしかできなくても、信じることしかできなくても。

「そっか……」

これが、提督か――

第4章 第5話 mirror house

「しっかし、変わり映えしないわね…」

「いつも通りでいいじゃないか」

と、時雨。

「っばい！」

と、夕立。

「一番槍といえは私だからね」

と騒がしいのは白露。

「一番と聞いたら負けてられないぜ」

と更にうるさくするのは深雪。そして――

「がんばろうね！」

相変わらず能天気な吹雪。これが私たちの艦隊の編成だ。時雨の言う通り、訓練の意義が正しく出ているのだから文句の言う筋合いはないけれど。

「珍しく寝坊しなかったじゃない」

集合は日が昇る前だというのに。

「えへへ、今日は大事な日だからね」

笑顔で答える吹雪と親指を立てる深雪。…視界が滲――いや、集合時間を守るのは人として当たり前のこと。目頭を熱くするようなことじゃない。私も寝ぼけているようだ。

「叢雲ちゃん…その…」

出撃準備をしている私の横で夕立が目線を下げた。言いたいことは分かっているから、肩をよせて遮る。

「いいのよ。あんたが頑張ってるのは分かっているから」

結局今日まで改二になれることはなかった。期待してなかったわけじゃないけど、私だってなんでできているのか分からないのだから、仕方ない。

この作戦までに成果を出すことが夕立の目標だったのだろう。でも、私はそこまで焦っていない。

「終わったらまた練習しましょう」

作戦の後もまだまだ戦いは続くのだから。なんなら、一緒に訓練する時間が終わってしまうことが名残惜しいくらい。

夕立と一緒に戦ってくれることが嬉しかった。だから謝らせてはあげない。

「おーい、早く行こうぜー」

深雪がせかす。動き出すのは全艦隊がそろってからだから急ぐ必要もないのだけど、私は呼ばれるままに海面に足をのぼした。

もうずいぶんと沖に出た。風もない気持ちの良い快晴だ。

「おめーらはそろそろこの海域から離脱だな」

隣の艦隊で並走していた天龍がレーダーで周囲を確認しながら声をかけてきた。天龍は私と違って従来の作戦に沿って航行する。だからここでお別れで、ここからは味方の援護も期待できない。天龍は片手をあげる。

「わりいな、手伝ってやれなくて」

「あんたがいたら心配事が増えるだけよ。ばかなこと言っていないであんなたちはあんたたちでちゃんとやりなさいよ」

まったく…普段もつと気を使ってほしいことが山ほどあるのに、こんなときだけ余計な気遣いをやってくる。

「…ねえ」

天龍の隣にいるのに目を合わせてくれない龍田に呼びかける。

「あんたは、好きになれた？」

あんたも、とは言えない。何が、とも言わない。龍田が自分に似ているから嫌いだった私から、私は変わったのだろうか？龍田はもう違うのだろうか？

「…さあ」

予想していた通りの応えが返ってくる。

「あのね、この作戦が終わったら——」

「余計なこと考えないの」

小さく開いた口に指を立てて遮られる。やっと目が合った。そのかすかな笑みが何を意味するのかは分からなかった。でも、語り合う

こともないし、表情で分かり合えるほどの仲じゃない関係がもうずいぶんと長い。今までもこれから、龍田とはこれでいい。

「それとも、また助けて欲しいの?」

「…ばか言わないでよ」

助けられるのはもう十分だ。ここまでで、これまでで。あとは私の戦いなのだから。

「行ってこい」

天龍にこぶしを出される。言われるまでもない。

「はいはい、そっちは任せたわよ」

痛いほどこぶしを突き合わせて航路を別った。

「右舷、魚雷来てるわよ!」

「了解」

私の指示を受けて時雨が回避行動をとる。艦隊の隣に魚雷の航跡が浮かぶ。もう数回目の戦闘で疲労が見えてきた。練度は十分にあってから迅速な応答には問題ないが、少しずつ見落としが増えてきている。かすり傷も負うようになってきた。それでも負担を感じないのは

「深雪ちゃん!面舵!」

「オツケー!」

艦隊の指揮半分は任せられるから。私が動けば吹雪もそれに合わせて指示を出し、吹雪の戦闘に合わせて私が艦隊を動かす。確認の必要もない連携。だから――

「叢雲ちゃん!」

私を見たのはつまり、そういうことなのだろう。

私たちが進む海の上空には、忘れもしない暗雲が渦巻いていた。島を呑み込んだ嵐が示すものは、深海棲艦の根城だ。事前の海域を映した衛星写真ではそんなものはなかったが、刻一刻と変化する海で目の前の現象を否定するのは無理な話。

電探に映る深海棲艦の数も増えている。もちろん重巡や戦艦も含めて。駆逐艦隊で戦艦とまともに当たるのはほとんど無謀で、戦える

のはそのために訓練をしていた私と、ほかはせいぜい吹雪くらい。吹雪に求められた判断の答えは…決まっている。

「退くわよ」

艦隊の動きを止めながら伝える。

「ぐずぐずしてる暇はないわ。もう撤退戦としても厳しそうね」

「叢雲ちゃん…でも…」

夕立の弱々しい目と合う。

「いいの。また来ればいいんだから」

これは私の望みで、私のわがまま。私のすべてを賭して願ったものだから、諦めきれなかったものだから、退くべきだと思う。だってここで友達を失ってしまったら、私は本当に諦めるしかできなくなってしまうから。

たった1人だったあの日とは違う。ただ逃げるしかできなかったあの日とは。

暖かい光が一瞬体を包み込む。もう私にとっては体にしみ込んだ改二を携えて前に出る。

「あんたたちはさっさと退きなさい。時間は稼ぐから」

——なんだ、私も成長してるじゃない。

「手伝ってもらうわよ、吹雪」

こんな当たり前のように巻き込んでしまうなんて。だって、1人だと大変だし。

「できるわよね？」

「うん！」

吹雪は引っ張ってくるまでもなく横に並ぶ。その瞬間に吹雪の機装が換装される。吹雪にとっては2度目でも、私にはできることが当然の気がしていた。吹雪も驚きもせず、いつもの気が抜けた笑顔に向けてくるだけ。今だけは、それに付き合っただけ。

ほら、大丈夫。今じゃいけない理由なんてない。またここに戻ってこれる。

私の夢はまだ白昼夢だった。それだけ。

——あの日とは違う。

そう心に告げ、  
撤退戦は始まった。

## 第4章 第6話 Primal Scream

ギリ：

と、奥歯が軋む音が聞こえた。あるいはため息だったのかもしれない。自分とは遠いところから届いた音は、足を止めるには十分だった。

…これでいいの？

足が止まっても振り返りはしなかった。そんな勇気なんてなかった。

撤退すると聞いてどこかほっとした。戦うことになる深海棲艦を思うだけで足がすくむ。

なにがちがうんだろう…

改二なんてできないから、艦娘としての経験が足りないから——  
違う

ずっと一緒にいて知っていた。吹雪も叢雲も、特別なものなんてないただの女の子だ。

ずっと一緒にいて教えてくれた。艦娘としての戦い方を、生き残る方法を。

…なのに、こんなにも違う。

怖がってばかりでなにもできない。

「夕立、行こう」

抱えるように大きく腕を引かれた。その力に任せて一步を踏み出す。仕方がない。だって、怖いのは当たり前だった——

——2人とも、怖くないなんて言わなかった。ずっと戦ってきた2人は戦う怖さを一番知っているのだから。でも今、彼女達は深海棲艦の前に立っている。何も変わらないはずの友達が。

何も変わらない。だから、戦えないのはただ夕立の気持ちじゃ弱かった、それだけ——

振り返った。近くにいるはずなのに、ずっと遠く見える2人の背中。だけど、やっと見れた。

ただそれだけ――  
気持ちだけなら、  
心だけなら――

「お久しぶりですね」

会うたびに同じ挨拶で始まることに気づいたのか、亜庭は口角を上げる。船の上で再会してから、その言葉を聞く感覚も短くなってきた。いる。

「どうしました？わざわざこんなところにまで来ていただくなんて」

お忙しいでしょう？と、インスタントのコーヒーを亜庭自ら机に置く。

「いざ作戦が始まってしまえば元帥など案外やることがないものだな」

老人の暇つぶしに付き合ってもらって悪いが、とうそぶきながらコーヒーを口に運ぶ。来客なんてめったにないものでこんなものしかないですが、と亜庭はいうが、コーヒーの味に詳しくないので気に止まらない。

「作戦に参加したのか」

「はい」

このことを言うためだけにわざわざここに来た自分にあきれる。今更気の利いた言葉をかけられるわけでもないだろうに。

「大したことをするわけでもないですけど」

作戦域から遠い鎮守府の果たす役割は小さい。大陸からの輸送の継続と、守りが薄くなる日本近海の防衛がせいぜいだ。だが、亜庭はそれすら参加を拒否してきた。

「なにかあったのか？」

過去を糾弾するつもりもない。心境の変化を問いたですつもりも。ただ心配だった。この変化が彼女にとって良いものなのかが。

「…ちよつと怒られちゃいました」

亜庭は頬に手を当てて小さく笑う。

「私はもう艦娘じゃないんですね」

頬を搔くように手を握る。柔らかく閉じられたこぶしを目の前でゆっくりと開く。

「艦娘だったころの私は沈まないように精一杯でした。死ぬのが怖かった。何をしても生きていたかったんです」

「…それが当然だ」

「提督になっても私はその恐怖をあの子たちに押し付けていたんです。私は私の恐怖を消そうと必死になってた。怖かったのは…怖くて立ち止まっていたのは私だけだった」

開いた手が今度は固く握られるのを見つめる。

「私はもう…提督なんですね」

ただ祈ることが、信じることが、提督なのだろうか。託すといえば聞こえは良いが、苦痛を、責任を押し付ける責務をまだ若い彼女に背負わせたのは、これもまた背負うべき罪なのだ。

「我々はいつても若い世代につけを払わせているな」

嘆息を漏らしただけのつもりだったが、組んだ手は軋んだ。そもそももの発端も――

「大戦の、残留思念…ですか…」

言及したものの、亜庭は否定も肯定もしなかった。ただの与太話と言えばそれまでのことだ。

深海棲艦の根源。それはかつての大戦で沈んでいったモノの残滓、残穢だと思っている。発生海域も行動もそう考えれば合点はいく。ただ海軍は当然ながら否定している。讃えるべき英霊の否定であるからだ。だが、国のために戦った兵士に恐怖や恨みがなかったと断ずるのもまた不誠実なことだろう。

もう昔話になったはずの大戦の罪が今更人類に降りかかった。…あるいは昔話になったから、なのか。その贖罪を放棄した軍は無垢な少女に背負わせた。人ならざるものとなる罰を。

そのあり方は、艦娘と深海棲艦で変わらないのだろうか。

「だから、深海棲艦化が起きると？」

亜庭は自分だけコーヒーを入れなおすと雑に口に運んだ。平然と

振る舞う彼女は先を促していると解釈して先を続ける。

きつかけは単純。目の前に迫る死という恐怖。深海棲艦とは恐怖を消す力であり、死をもたらすもの。その誘惑に抗えなくなった時、深海棲艦と同一になる。

「ならば改二との差異も単純だ」

艦娘は、叢雲たちは死者とは違う。傷ついても傷つけても、立ち上がって支えあつて明日を望む彼女たちなら——

「知っているかどうかだ」

言葉にすることを一瞬でもためらった己を胸中で叱責する。目の前の彼女もまた、新たな道を進むと決めたのだから。

「恐怖とは消すものではなく乗り越えるものだ——」

逃げたかった。沈むかもしれないと思ったときから、自分の中に何が潜んでいると知ったときから。

逃げてよかった。それで失うものなんてない。今までの日々が続いていくだけ。それで不満なんてないくらい幸せだ。

遠い背中のさらに先を見る。深海棲艦の向こうに何かあるのか知らない。そこまでして手に入れたいものなのか分からない。

でも、

みんなが、友達が——叢雲が笑ってくれたなら、もつと幸せだろうな

胸の奥にある暗い光が溶けていく。消えるんじゃない、ゆっくりと全身に広がって。

戦いたいと、初めて願った気がする。もう一人の自分の、苛烈な破壊衝動の熱がめぐるのを受け入れる。

そう。邪魔されなかったために、願いを叶えるために強くなったんだ。

まだ足りない。この荒れる海を越えるには。でも——

うん、大丈夫。

だって、この先にはもつと楽しいことが待っているから——

「夕立、どんどん強くなれるっぽい！」

巻きあがる炎がその一瞬で体も機装も描き換えた。

「夕立…」

「叢雲ちゃん、もう大丈夫っぽい！」

「大丈夫って…」

改二とは艤装が変わるものだと思っていた。だけど夕立は

「大きくなったわね…」

私も吹雪も確かに身体能力の向上はあったけど、夕立はもはや成長と言える。小さくてちよつとお嬢様みたいな感じがあったのに、今の目線は私より少し高い。

「早くあいつらぶつ飛ばしたいっぽい！」

…こんな子だったっけ？

まあ根本は変わってない気はするけど。だけど、だからといって—

「むーらくも」

深雪が肩に腕をかけてきた。こんなところは天龍の悪影響を受けてて困る。

「行こうぜ、せつかくここまで来たんだしな」

「やっぱ私たちが1番じゃないとね」

「僕たちのことは心配しなくていいからね」

口では気を使ったようで、私の話を聞くつもりなんてなさそう。

「ばかね…」

こんな時でも変わらないみんなにあきれる。

「あんたたちを心配するほどうぬぼれちゃいないわよ」

でも私だって、こんなにも変わらない。いつもみたいに、今までみたいに勝手な優しさに背中を押されてる。それが今この瞬間じゃないといけない理由だ。行けって言うなら行ってやる。やれって言われたのなら——

「やってやるしかないじゃない」

「叢雲ちゃん！」

吹雪から伸ばされた目のまえの手のひらをはたく。この海に響かせるには小さな小さな号砲が消える前にはもう機関が鬨の声を上げ

ていた。

「吹雪！深雪と一緒に対空は任せたわよ！夕立！好きに暴れていいけど、調子乗らないで！白露と時雨と一緒にいなさい！」

雑な航行のまま、槍を両手で構える。ようやくここまで来た。なんて嬉しいのだろう。大切な友達が後ろにいるのは。葬り去る敵が目の前にいるのは。

さつさと起きなさい——

内に沈む衝動を引きずり出す。せつかくなんだから使ってあげる。この私はすべてを奪われたあの日に生まれたのだから。全部奪い返す、この日のために。

## 第4章 第7話 ソルジャーガールズ

機動力の向上。それが改二になって真っ先に実感する変化だ。数で劣る艦娘が、装甲の薄い駆逐艦が誇る優位性で、私の戦闘の要。

目の前に飛んできた工夫もない砲撃は素直な拍子で弾いた。深海駆逐艦が次弾の装填を終えた直後には、回避行動をとらなかつた速度差で間合いに入れていた。横殴りに振るつた槍が黒ずんだ鉄の表皮を避けて生体部分を切り裂く。

火力だって、駆逐艦を沈めるに足るだけは上がっている。だけどわざわざ近づいたのは――

倒したことを腕に残る感覚だけで確認をして、わずかに落とした機関の回転数を最大に引き上げる。私が行かなくちやいけないのはこの暗雲の下、私だけが戦える戦艦の群れ。

「ちよつとちよつとー！」

慌てて夕立の首根つこを掴む。

「ぽいっ。」

「なんで突っ込もうとするかなー！」

白露に吊り上げられる形になった夕立が首だけ振り返って見上げてくる。

「だって、いけそうな気がするっばい…」

「そんな気になるな！あまり離れすぎないようにって言われたじゃん」

駆逐艦である限り近接は避けられないとはいえ、あまりに混戦になると援護もできない。なのにこの夕立は妙に深海棲艦に近づきたがる。

「でも夕立、がんばりたいっばい…」

夕立を放して小さくため息をつく。変なことを考えていた自分の頭を叩いた。

改二になって見た目が変わって、知らない夕立になってしまったんじゃないかと心配していた。でも、ここにいるのは友達想いで頑張り

屋の、いつもの夕立だ。

「だって。どうする?」

「僕は白露の判断に任せるよ」

聞いてみたものの、時雨も白露の扱いを心得ている。

「…そうだね。ここが踏ん張りどころ、がんばりどころだ」

初雪だって白雪だって一緒にいたかったはずだ。ずっと同じ部隊の人たちだって別動隊なんて望んでいなかったはずだ。

——なのに、ここにいる私が戦いませんでした、じゃかつこつかな  
いもんね。

「よし!じゃあちよつとムチャしてみますか!」

「ほい!」

「ちよつとだからね、ちよつと!」

はやる夕立を時雨と抑えながら動き出す。

叢雲は言うまでもなく、吹雪たちだって心配に及ばない。白露は艦娘としてまだまだ未熟で、夕立を自由に戦わせてあげることができない。  
い。

でも、私だって——

1番艦として、遅れているわけにはいかない。もつと強くなりた  
い。みんなと肩を並べられるようになりたい。今はまだ遠くても——

その最初の一步だと信じて、雷撃を放った。

視線を頭上に向ける。上空を舞う敵艦載機はずいぶんと数を減ら  
していた。本来牽制が目的の対空砲火で目に見える戦果を挙げられ  
ているのは

「吹雪、あぶねーぞ」

魚雷を言われるがままに回避している間に、深雪が魚雷を放った駆  
逐艦に砲撃を返した。

「ありがと!次はみぎ——」

「おっけー」

戦果を挙げられているのは指示を出す前に動きだす深雪が対空に

専念させてくれているからだ。

深雪だけじゃない。白露だって時雨だって夕立だって、そしてここにいないみんなのおかげで戦えている。

爆炎が装甲を超えて皮膚を熱する。射線から外れるのが一瞬遅れただけで砲弾の衝撃が体勢を崩す。だけど、今ここで戦えていることが嬉しかった。どんなに傷つこうとも、深海棲艦がひしめくこの海でも、何も恐れるものはなかった。

「さすがに疲れたー。もう弾もないぜ」

深雪が息をついた。——もう息をつける。止めていた呼吸を吐き出して、吹雪は思わず膝を落としそうになる。もう一度一瞬だけ息を止めて踏ん張って前を見る。まだ深海棲艦は残っている。——叢雲が戦っている。疲弊した駆逐艦ではどうしようもないし、今から近づいても間に合わない。もうできることなんて何も無い。でも、まだ終わりじゃない。

吹雪には、叢雲が戦っている理由が分からない。大切なものだって分かっているけど、それだけだ。だけど、力になりたかった。

ずっと探していた。生き残った、生きさせてくれた理由を。戦うこともできなかつた吹雪を庇ってくれた艦娘たちが正しかったのだと証明したかった。

それができるのかなんて分からない。でも、この先に進めれば、叢雲が笑ってくれるなら。変わる気がする。沈んでいく夢を見る日々が、その姿に謝るしかできなかつた自分が。やっつと、ありがとうと言える自分に。

…だから、一緒に行こう——

最後の砲弾を天に向かって放った。

急速に拍動する肺のひりついた痛みがのどまで上がってくる。すぐそばに着弾しても心臓の鼓動はうるさいまま。何度も振るってきいた腕は目を向けなければどこにあるのかもわからない。固くつかんだこぶしは開いてしまえばもう握れない。

だれに言われるまでもない。すべてが限界だった。

あと数隻。海域を煤と鉄片で黒く染めても、まだ足りなかった。艦種による火力と物量の差を埋めるものが。あれだけの時間をかけて練り上げた技も、死線を潜り抜けた経験も届かない。諦めたはずの願いを掴むためには――

落下してくる砲弾を斬り払うために力を込める。

――必要なんだ。奇跡が――

槍を振り上げようとした寸前で、背後から飛来した砲弾が先に激突する。金属の削りあう音が頭上で弾け、膨大な運動エネルギーの衝突で砲撃は遠くに外れていく。

「叢雲ちゃんー！」

脈動のノイズの上から、確かに届いた気がした。続いた援護射撃は吹雪の精度とは程遠いけど、深海棲艦をひるませるくらいにはなった。

心配しないで。そう伝えるために振り返り――

たぶん私は笑っていた。誰も祈ってなんて、心配なんてしてくれなかったんだから。こんなにぼろぼろなのに、私はまだまだ期待に応えないといけないみたい。自然に手のひらが緩んでいた。

前を向いたときには、もう笑えなかった。ひらいた手の頬を叩く。

「ふざけんなっ！」

また私は嫌いな私だった。さつき何を思った？何に期待した？

奇跡なんてものを求めてどうするの。そんなの待ってなんになるの。奇跡なんてものがあるのなら――

――私はもうたくさんもらったんだから。

あの島に着いたときから、おじいちゃんとおばあちゃんに出会えた日からずっと。暖かい手も冷たい雨も、刀を握った日も、一緒にご飯を作ったときさえ、私に訪れた奇跡だ。

取り戻したいと思えたことも、戦う術を練り上げたことも、死線を潜り抜けたことも、一緒に戦ってくれる仲間がいなきや出来はしなかった。

苦しくて焦るだけだった日々が楽しいと思える毎日に変わるなん

て思ってもいなかった。それでもここに立っていることを選んだのは大切な友達のおかげ。

私が望んだものなんて何もない。私が自分でつかんだものなんて何もない。空っぽで不安定で情けなくて弱くて我儘な私は、数えきれない奇跡のおかげでここにいる。だったら、足りないなんて言ってもらえない。届かないなんてあるはずがないじゃない。あと少し。この一歩だけでも――

かすめた砲弾が装甲を奪っていく。でももう必要ない。残る深海棲艦は3隻。ちょうどいい。どうせ3回くらいしか振る力は残っていない。それで全部が決まる。ろくに力が出ないくせに、全部1撃で仕留めることにはなぜか不安はなかった。

切っ先の届くまで、私の間合いまで入り込む。とつさに機銃を向けてきたが、艦隊戦ではありえない超近接は私の領域。駆逐艦の装甲なんて簡単に引き裂く戦艦の機銃を相手にせず、薄い鉄を押し切る。柔らかな組織からあふれた澱んだ液体が頬に散るけれど、拭うこともしない。

そのまま、次の目標を捕捉する。頭上に振りかぶった槍を力任せに叩きつけ、頭部の装甲をたたき割る。しびれた感覚のまま切り返しなから振り上げた切っ先が、最後の深海棲艦の装甲を――甲高い音を立てながら撫でていった。小刻みな振動が肩までつながる。ぼろぼろになった穂先はもう斬ることなんてできない。そんなことに気づかないまま不安定な体勢で振り回したところで、装甲を浅く傷つけるのが限界。槍の重さに引つ張られるまま、後ろに崩れ視界が上がる。

私はやっぱり弱いまま。でも――

焼け付く機関の悲鳴は、無様に倒れていく方向だけを変えた。全身の感覚がマヒしていても離していないことだけは信じれる槍をただただ強く握った。どす黒い装甲が目の前に迫った。

――こんな私を信じてくれるやつらがいる。なんの根拠もないのに、私なら大丈夫だって。

だから、このひと振りだけは――

最後の一歩だけは自分で進まなきゃ、みんなに合わせる顔がない。

私を抱きとめてくれた人たちと、背中を叩いてくれたあいつらと、手を取ってくれたこいつらと――

「私たちはこの先に行くんだ――！」

鉄のぶつかり合う音が、切り裂かれる音が全身を揺らした。

## 第4章 第8話 ジュブナイル

突き立てられた穂先を引き抜く。肺が広がったとたんに全身の細胞が酸素を求めて脈動し始めた。昂った感情がゆつくりと沈んでいくのと同時に体の排熱を自覚する。

…終わった、の？

「叢雲ちゃん！」

背後から飛びついてきた吹雪の重さでようやく実感する。吹雪の腕をゆつくりと握りしめた。

「そうね…」

「ほいー」

夕立がへなへなとへたり込んだ。私でもガス欠寸前だというのに、最後まで頑張ってくれた。初めての改二だったのに。夕立だけじゃない。みんな負傷して、立ち上がる力も残っていない。深雪に至ってはもう航行を放棄して仰向けで波に揺られている。誰かがいなければここにいられなかった。そして、誰もいなくなることなく、ここにいられる。

「…ありが——」

「私たちはいいからさ、早く行つてきなよ」

白露は手を振る。遮られて、私は思い出す。いや、本当は忘れてなどなかった。だから私は膝に手をつけてでも立っている。

この先に——

全てを忘れてスクリューが回る。ずっと、ずっと願っていたものに向けて。

ずっと求めていた場所が、忘れたことのない景色が——そこにはなかった。

深海棲艦は人の痕跡を消し去ろうとするかのように破壊する。そんなことは分かっている。本当に何もなくなつたかのような光景。でも、ここに戻つてくれた。

「叢雲ちゃん…」

うしろについてきてきた吹雪が私を見る。…なんて顔してるのよ。なんだか私が励ましているみたいに頭に手を置く。

いつも出撃していた、港とは名ばかりの船置き場の崩れた防波堤から島に上がる。出撃が終われば艀装を格納していたあたりに艀装を置いた。あんまり好きじゃなかった魚を干す臭いはもうただの潮のにおい。もとからろくに舗装もされていなかった道は脇の田んぼより少し草が少なくくらいの差しかない。もう破壊の跡より自然に帰っていく姿が目立つ。

この家の人はよく野菜くれたっけ、ここの道には雨上がりにカエルがたくさんいて…

でもそんなこと、今日に映る景色では何も分からない。

「叢雲ちゃん！」

吹雪の声で走り出していたことに気づく。見たことないはずの風景が流れていって、それでもどこにいくか分かっていった。ここを曲がれば、ずっと過ごした家だけど。覚えていたよりも危なっかしい山道を登った。

長い長い樹木のトンネルを抜けると、ついさっきまで浴びていたはずの日差しが視界を覆う。明るさに慣れて開けた視界の先に、ずっと願った世界が広がった。

島と海を見渡せる小さな草原。おばあちゃんと一緒に見た視界が。おじいちゃんと何度も通った小さな墓標が思い出のままそこにあった。だから、やっと――

ああ――

やっと分かった。私は――

強くなれたなら、この島を取り戻せたなら、

弱かった私を受け入れてくれた場所に戻ってこれると、からっぽだった私を埋めてくれた日々が返ってくると。おばあちゃんが笑いかけてくれるときえ。

――どこかで信じていたんだ。

でももう理解してしまった。頭を預けて眠った優しい感触も、ゆっくりと目を覚まさせるやわらかな手も。2人で火をつけた線香のに

おいすらも——もう戻らないのだと。

だから、やつと言える。ずっと言いたかった言葉を。伝えたい言葉を。

私は膝をつき、よく見るとやつぱり風化してしまった墓標に手を添える。

ただいま。

「行ってきます」

目を閉じると冷たい雫が頬を伝った。

「うわー!」

急に背後が騒がしくなった。喧騒の元である吹雪はあっさり私を追い越して風を一身に受けて港を見下ろしている。

「吹雪」

振り返った大きな瞳を見つめる。

「ありがとう」

「どういたしまして!」

やつと言えたのに、ずいぶんと簡単に返される。文句を言うのもおかしい気もして、息をつきながら横に並ぶ。

同じ景色なんてないのかもしれない。でも、この瞬間は思い出の中と同じように——

そういえば、一度も口に出したことはなかった。なんだか照れくさくて。でも、今なら……

「…きれ——」

「きれいだね——!」

……こいつ

なんだか情けなくなる。この能天気さを羨ましくさえ思ってしまうけど、

「こんなもんじゃないわよ」

私が素直になれるのはいつになるのやら。

ちっほけな私は、この広い世界をどこまで変えていけるのだろう。分からないけれど、でも誓おう。

「ここから見えるもの全部、この海全部取り戻すわよ」

吹雪の手をゆっくりと握りしめる。この手のぬくもりに私はなにかを返せたのだろうか。なにかを返していけるのだろうか。

想像できないほどの、果ての見えない航路。すべてを終えて、今度はみんなでここに帰ってこよう。

その時に広がるのはきつと、誰も見たことのない海だ。せかい